

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(15)

東九州自動車道(志布志IC～鹿屋串良JCT)建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

た はら さこ の うえ
田原迫ノ上遺跡 2

(鹿屋市串良町)

縄文時代早期編

第1分冊

田原迫ノ上遺跡 2

第一分冊

二〇一七年三月

2017年3月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター



田原迫ノ上遺跡遠景



縄文時代早期の土器・石皿・磨・敲石



Ⅳ類瘤状突起集合

序 文

この報告書は、東九州自動車道（志布志 I C～鹿屋串良 J C T 間）の建設に伴って、平成 22～平成 26 年度に実施された鹿屋市串良町細山田に所在する田原迫ノ上遺跡の発掘調査の記録（縄文時代早期編）です。

田原迫ノ上遺跡では、平成 22～26 年度の調査で、縄文時代・弥生時代を中心に多数の遺構・遺物が発見されており、当時の人々の生活及び地域の歴史を知る上で貴重な資料となるものと考えます。本報告書では、縄文時代早期（平成 22～26 年度調査分）の調査成果を報告しています。

主な調査成果として、20 軒を超える竪穴住居跡、200 基近くの集石、40 基の連穴土坑が挙げられます。また本遺跡は、縄文時代早期中葉の石坂式土器を主体とすることが分かりました。このことは、遺跡周辺だけでなく、大隅半島中央部における当時の人々の生活を解明する手がかりになるものと期待されます。

本報告書が、県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に、調査にご協力いただいた国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所、鹿屋市教育委員会、関係各機関及び発掘調査に従事された地域の方々に厚く御礼申し上げます。

平成 29 年 3 月

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長 堂 込 秀 人

報 告 書 抄 録

ふ り が な	たはらさこのうえいせき じょうもんじだいそうきへん								
書 名	田原迫ノ上遺跡 2 縄文時代早期編								
副 書 名	東九州自動車道（志布志 I C ～鹿屋串良 J C T）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書								
巻 次	2								
シ リ ー ズ 名	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書								
シリーズ番号	15								
編 著 者 名	徳永 愛雄・平 美典・国際文化財株式会社（大塚 正樹・辻本 彩・島崎 直行）・株式会社九州文化財研究所（山下 研・中岡 達也・中村 幸四郎）								
編 集 機 関	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター								
所 在 地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL0995-70-0574 FAX0995-70-0576								
発行年月日	2017年3月								
ふ り が な 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因	
たはらさこのうえ 田原迫ノ上 いせき 遺跡	かごしまけん 鹿児島県 かのやしきしらちょう 鹿屋市串良町 ほそやまだ 細山田	46203	H25 - 203 - 385	31° 26′ 30″	130° 55′ 00″	本調査 2009.02.01 ～ 2009.03.19 2010.05.06 ～ 2011.03.11 2011.05.09 ～ 2012.03.16 2012.07.02 ～ 2013.01.28 2013.06.03 ～ 2014.01.28 2014.05.12 ～ 2015.01.28	62,389	東九州自動車道 （志布志 I C ～ 鹿屋串良 J C T） 建設に伴う記録 保存調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
田原迫ノ上 遺跡	集落跡	縄文時代早期	竪穴住居跡21軒，落 とし穴9基，連穴土 坑40基，土坑104基， 集石遺構192基，石 器製作跡5基		前平式土器，吉田式土器，倉園B式土 器，石坂式土器，下剥峯式土器，桑ノ 丸式土器，押型文土器，手向山式土器， 平椀式土器，塞ノ神式土器，石鏃（打製・ 磨製），石斧（打製・磨製），石槍，礫器， トロトロ石器，砥石，石皿，磨石，敲石			連穴土坑内から 石坂式土器が出 土	
	散布地	縄文時代前期	—		曾畑式土器				
		縄文時代後期	—		指宿式土器，市来式土器，鐘崎式土器				
		縄文時代晩期	—		黒川式土器				
	集落跡	弥生時代中期	竪穴住居跡，掘立柱 建物跡，円形・方形 周溝，土坑，柱穴列		山ノ口式土器，擬凹線文系壺，樹皮布 敲石，磨製石鏃，砥石，石匙，土製勾 玉，土製加工品			大型建物跡は現 地保存	
散布地	古墳時代以降	溝状遺構，道跡，畝 状遺構群		成川式土器，須恵器，土師器，陶器， 磁器，瓦器					
要 約	縄文時代早期～弥生時代中期を中心とした複合遺跡である。弥生時代中期では，大型で円形の竪穴住居跡や棟持柱を持つ掘立柱建物跡，柱穴列や周溝など，大隅半島中央部での当時の集落のあり方を知る上で貴重な資料である。縄文時代早期についても多くの竪穴住居跡や連穴土坑，集石遺構など，注目される遺構が多く検出されている。縄文時代早期中葉から早期後葉をつなぐ時期の集落として貴重な遺跡である。								

※主要な遺構・遺物については，平成26年度までの調査成果を掲載している。



田原迫ノ上遺跡位置図 (1 / 25,000)

例 言

- 1 本書は、東九州自動車道（志布志 I C～鹿屋串良 J C T）建設に伴う田原迫ノ上遺跡の発掘調査報告書の第2巻（縄文時代早期編）である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県鹿屋市串良町細山田に所在する。
- 3 発掘調査は、国土交通省九州地方整備局から鹿児島県教育委員会が受託し、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」という。）が、平成22・23・24年度に、公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下「埋文調査センター」という。）が平成25・26年度に実施した。
- 4 発掘調査支援業務を埋文調査センターが平成24・25・26年度に国際文化財株式会社に委託して発掘調査を実施した。
- 5 発掘調査における実測図の作成は、平成22・23年度は埋文センター調査担当者が行った。平成24・25・26年度は、埋文調査センター調査担当者の指揮のもと、国際文化財株式会社が行った。写真撮影は埋文センター及び埋文調査センター調査担当者が行った。また、空中写真撮影は株式会社ふじたに委託した。
- 6 整理作業・報告書作成作業は、平成24年度に埋文センターが、平成25・27・28年度に埋文調査センターが実施した。
- 7 整理作業・報告書作成作業支援業務を埋文調査センターが平成27年度に株式会社九州文化財研究所に、平成28年度に国際文化財株式会社に委託して整理作業・報告書作成作業を実施した。
- 8 遺構図・遺物分布図の作成は、埋文調査センター調査担当者の指揮のもと、国際文化財株式会社及び株式会社九州文化財研究所の協力を得て行った。
- 9 出土遺物の実測・拓本・トレースは、埋文調査センター調査担当者の指揮のもと、国際文化財株式会社及び株式会社九州文化財研究所の協力を得て行った。また、剥片石器の一部は、株式会社バスコ及び大福コンサルタント株式会社に委託した。
- 10 出土遺物の写真撮影は、埋文センターの写場にて、埋文調査センターの吉岡康弘・辻明啓が行った。
- 11 本報告に係る自然科学分析は、テフラ分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に、放射性炭素年代測定を株式会社加速器分析研究所及びパリノ・サーヴェイ株式会社に、樹種同定を株式会社加速器分析研究所及びパリノ・サーヴェイ株式会社に、種実同定をパリノ・サーヴェイ株式会社に、植物珪酸体分析を株式会社古環境研究所、石材産地推定分析を有限会社遺物材料研究所に委託した。本報告において、編集を行った上で掲載した。
- 12 本編の執筆は次のように分担し、編集は徳永愛雄と平美典が国際文化財株式会社の協力を得て行った。
 - 第1章 寺原徹・徳永愛雄
 - 第2章 徳永愛雄
 - 第3章 徳永愛雄・平美典
 - 第4章 徳永愛雄・平美典・大塚正樹・辻本彩
 - 第5章 パリノ・サーヴェイ株式会社
株式会社加速器分析研究所
株式会社古環境研究所
有限会社遺物材料研究所
 - 第6章 徳永愛雄・平美典
- 13 本報告書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は埋文センターで保管し、展示・活用を図る予定である。
- 14 遺物の注記で用いた田原迫ノ上遺跡の記号は「田」である。
- 15 使用した土色について基本的には『新版標準土色帖』（1970、農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に基づく。
- 16 本書で用いたレベル数値は、海拔絶対高である。
- 17 本書で使用した方位は、磁北である。
- 18 掲載した遺物の番号は、通し番号で、本文・挿図・表・図版の遺物の番号と一致する。掲載した遺構の番号は、遺構の種類ごとに番号を付し、本文・挿図・表・図版の遺構の番号と一致する。
- 19 挿図の縮尺は、挿図ごとに示している。
- 20 掲載した土器の拓本を表裏とも貼付している場合は、底部片の一部を除き、左が表面、右が裏面になるよう配置している。
- 21 遺構の埋土には、薩摩火山灰（XIII層）やにぶい赤褐色が含まれるものもあり、文中の埋土に含まれるものもある。
- 22 集石遺構一覧表の石材別個数の合計が総礫数と合わないものは、その他の石材があるためである。
- 23 遺物観察表の標高について、2点以上接合しているものは、最高値と最低値を掲載している。

凡 例

1 グリッドについて

グリッドは、高速道路建設予定地のセンター杭 STANo.181 と STANo.182 を基準にして、1 グリッド 10m×10m の大きさで田原迫ノ上遺跡を含むように設定した。

2 遺構について

(1) 各遺構の縮尺、略記号及び番号は、以下に示すとおりである。

遺 構 名	縮 尺	略 記 号
竪穴住居跡	1／40	SH
落とし穴	1／20	ST
連穴土坑	1／20	SV
土 坑	1／20	SK
集 石	1／20	SQ
石器製作跡	1／100	SO

(2) 遺構番号は、遺構ごとに通し番号を付した。

(3) 遺構の網掛けは、右上に示すとおりである。

3 遺物について

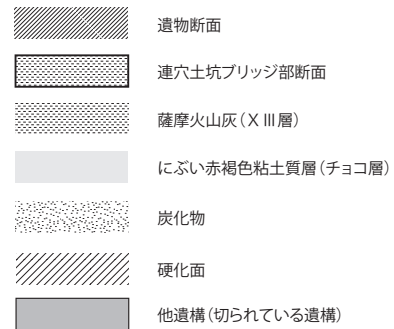
(1) 掲載遺物の縮尺は、土器・石器とも 1／3 を基本とした。石鏃等については、縮尺を変えてあるので、図中に示した縮尺を参考にしていきたい。

(2) 掲載遺物は掲載順に番号を付している。

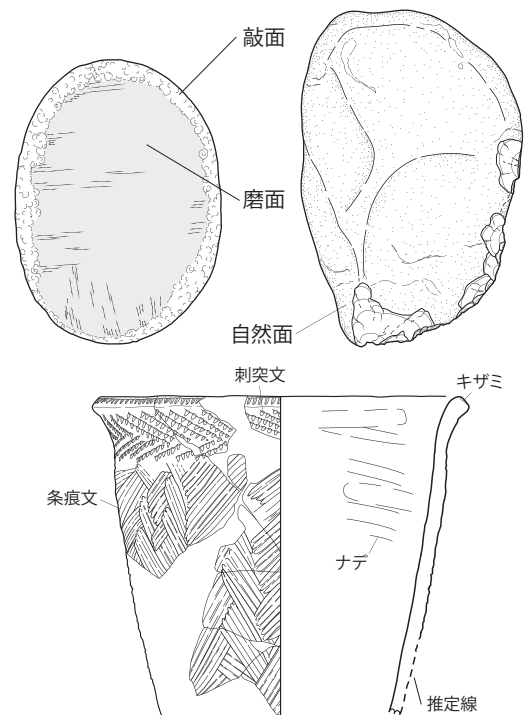
4 配置図等について

折り込みの遺構配置図は 1/800、土層断面図は、1/60 で作成し、縮尺を入れた。なお、縮尺の表示のない図面が一部あるが、1 グリッド（1 マス）が 10m×10m である。

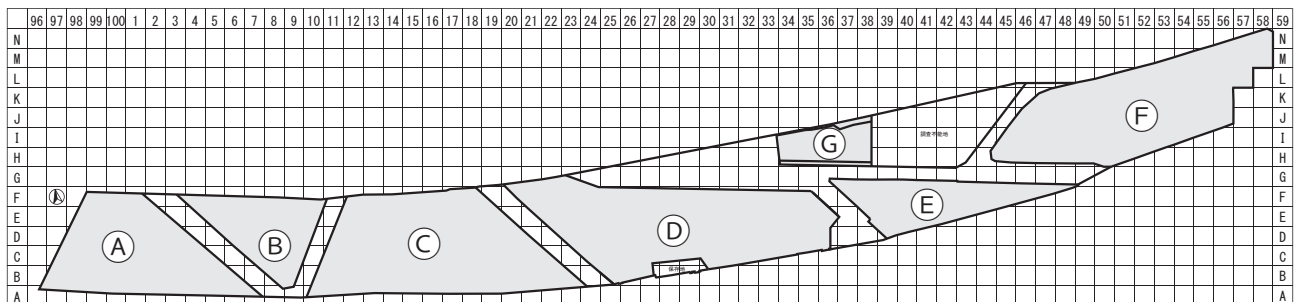
5 調査区を便宜上下図のように調査区 A～G と 7 つに大別している。



遺構網掛け



遺物表現



田原迫ノ上遺跡調査区大別図

総 目 次

第1分冊

巻頭図版

序文

報告書抄録

例言

凡例

目次

第1章 発掘調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 一部本調査	2
第3節 本調査	3
第4節 整理・報告書作成	10
第2章 遺跡の位置と環境	13
第1節 地理的環境	13
第2節 歴史的環境（周辺の遺跡を中心に）	13
第3節 志布志 I C～鹿屋串良 J C T間の遺跡	17
第3章 調査の方法と層序	23
第1節 調査の方法	23
第2節 層序	24
第3節 出土遺物の分類	46
第4章 発掘調査の成果	53
第1節 縄文時代早期の調査成果	53
1 調査の概要	53
2 遺構	53
3 遺物	289

第2分冊

第5章 自然科学分析	1
第1節 自然科学分析の概要	1
第2節 テフラ同定	1
第3節 年代測定	7
第4節 樹種同定	14
第5節 植物珪酸体分析	20
第6節 石器石材産地推定	26
第6章 総括	
第1節 遺構について	57
第2節 遺物について	64
遺物観察表	76
写真図版（遺構）	117
写真図版（遺物）	149
奥付	

第1分冊目次

巻頭図版

序文

報告書抄録

例言

凡例

目次

第1章 発掘調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 一部本調査	2
第3節 本調査	3
第4節 整理・報告書作成	10
第2章 遺跡の位置と環境	13
第1節 地理的環境	13
第2節 歴史的環境（周辺の遺跡を中心に）	13
第3節 志布志IC～鹿屋串良JCT間の遺跡	17
第3章 調査の方法と層序	23
第1節 調査の方法	23
第2節 層序	24
第3節 出土遺物の分類	46
第4章 発掘調査の成果	53
第1節 縄文時代早期の調査成果	53
1 調査の概要	53
2 遺構	53
(1) 竪穴住居跡	53
(2) 落とし穴	77
(3) 連穴土坑	85
(4) 土坑	123
(5) 集石遺構	177
(6) 石器製作跡	285
3 遺物	289
(1) 土器	289
(2) 石器	371

挿図目次

第1図	確認トレンチ位置図	2
第2図	平成22年度調査範囲図（縄文時代早期）	3
第3図	平成23年度調査範囲図（縄文時代早期）	4
第4図	平成24年度調査範囲図（縄文時代早期）	6
第5図	平成25年度調査範囲図（縄文時代早期）	8
第6図	平成26年度調査範囲図（縄文時代早期）	9
第7図	周辺遺跡位置図	16
第8図	志布志IC～鹿屋串良JCT間の遺跡位置図	22
第9図	土層断面1	25
第10図	土層断面2	26
第11図	土層断面3	27
第12図	土層断面4	28
第13図	土層断面5	29
第14図	土層断面6	30
第15図	土層断面7	31
第16図	土層断面8	32
第17図	土層断面9	33
第18図	土層断面10	34
第19図	土層断面11	35
第20図	土層断面12	36
第21図	土層断面13	37
第22図	土層断面14	38
第23図	土層断面15	39
第24図	土層断面16	40
第25図	土層断面17	41
第26図	土層断面18	42
第27図	土層断面19	43
第28図	土層断面20	44
第29図	土層断面21	45
第30図	田原迫ノ上遺跡出土土器分類1	46
第31図	田原迫ノ上遺跡出土土器分類2	47
第32図	田原迫ノ上遺跡出土土器分類3	48
第33図	田原迫ノ上遺跡出土土器分類4	49
第34図	田原迫ノ上遺跡出土石器分類1	50
第35図	田原迫ノ上遺跡出土石器分類2	51
第36図	竪穴住居跡の各部の名称	53
第37図	竪穴住居跡分布図	54
第38図	縄文時代早期遺構配置図	55
第39図	竪穴住居跡1号・出土遺物	57
第40図	竪穴住居跡2号	58
第41図	竪穴住居跡3号・出土遺物	59
第42図	竪穴住居跡4号・出土遺物	60
第43図	竪穴住居跡5号	61
第44図	竪穴住居跡5号出土遺物	62
第45図	竪穴住居跡6号・竪穴住居跡7号・出土遺物	63
第46図	竪穴住居跡8号・出土遺物	64
第47図	竪穴住居跡9号・竪穴住居跡10号	65
第48図	竪穴住居跡11号・出土遺物	66
第49図	竪穴住居跡12号	67
第50図	竪穴住居跡13号	68
第51図	竪穴住居跡14号・出土遺物	69
第52図	竪穴住居跡15号・出土遺物	70
第53図	竪穴住居跡16号・出土遺物	71
第54図	竪穴住居跡17号・出土遺物	72
第55図	竪穴住居跡18号・竪穴住居跡19号	73
第56図	竪穴住居跡20号・出土遺物	74
第57図	竪穴住居跡21号・出土遺物	75
第58図	落とし穴の各部の名称	77
第59図	落とし穴タイプ別分布図	77
第60図	落とし穴1号	78
第61図	落とし穴2号・落とし穴3号	79
第62図	落とし穴4号	80
第63図	落とし穴5号	81
第64図	落とし穴6号・落とし穴7号	82
第65図	落とし穴8号	83
第66図	落とし穴9号	84

第 67 図	連穴土坑の各部の名称①	85
第 68 図	連穴土坑の各部の名称②	85
第 69 図	連穴土坑の各部の名称③	85
第 70 図	連穴土坑の最深部位置の範囲	85
第 71 図	連穴土坑の主軸の方向	86
第 72 図	連穴土坑タイプ別分布図	87
第 73 図	最深部位置別分布図	87
第 74 図	連穴土坑 1 号・連穴土坑 2 号	88
第 75 図	連穴土坑 3 号・出土遺物	89
第 76 図	連穴土坑 4 号・連穴土坑 5 号	90
第 77 図	連穴土坑 6 号・出土遺物	91
第 78 図	連穴土坑 7 号・連穴土坑 8 号	92
第 79 図	連穴土坑 9 号・連穴土坑 10 号	93
第 80 図	連穴土坑 11 号・連穴土坑 12 号・出土遺物	94
第 81 図	連穴土坑 13 号・出土遺物	95
第 82 図	連穴土坑 14 号	96
第 83 図	連穴土坑 15 号	97
第 84 図	連穴土坑 16 号・連穴土坑 17 号	98
第 85 図	連穴土坑 18 号・出土遺物・分布図	99
第 86 図	連穴土坑 19 号・連穴土坑 20 号	101
第 87 図	連穴土坑 21 号	102
第 88 図	連穴土坑 22 号・連穴土坑 23 号・出土遺物	104
第 89 図	連穴土坑 24 号・出土遺物	105
第 90 図	連穴土坑 25 号・連穴土坑 26 号	107
第 91 図	連穴土坑 26 号出土遺物・分布図	108
第 92 図	連穴土坑 27 号・連穴土坑 28 号	110
第 93 図	連穴土坑 29 号・連穴土坑 30 号・出土遺物	111
第 94 図	連穴土坑 31 号・出土遺物	112
第 95 図	連穴土坑 32 号・出土遺物・連穴土坑 33 号	113
第 96 図	連穴土坑 34 号	114
第 97 図	連穴土坑 35 号・連穴土坑 36 号	115
第 98 図	連穴土坑 37 号	116
第 99 図	連穴土坑 38 号・出土遺物・連穴土坑 39 号	117
第 100 図	連穴土坑 40 号・出土遺物	118
第 101 図	土坑の各部の名称	123
第 102 図	土坑タイプ別分布図	124
第 103 図	土坑 1 号	125
第 104 図	土坑 2 号・出土遺物	126
第 105 図	土坑 3 号・出土遺物・土坑 4 号・土坑 5 号	127
第 106 図	土坑 6 号・出土遺物・土坑 7 号・土坑 8 号	128
第 107 図	土坑 9 号	129
第 108 図	土坑 10 号・出土遺物・土坑 11 号	130
第 109 図	土坑 12 号～14 号	131
第 110 図	土坑 15 号・土坑 16 号	132
第 111 図	土坑 17 号・土坑 18 号	133
第 112 図	土坑 19 号・出土遺物・土坑 20 号	134
第 113 図	土坑 21 号・出土遺物・土坑 22 号	135
第 114 図	土坑 23 号・土坑 24 号	136
第 115 図	土坑 25 号・土坑 26 号	137
第 116 図	土坑 27 号～29 号	138
第 117 図	土坑 30 号・土坑 31 号	139
第 118 図	土坑 32 号～34 号	140
第 119 図	土坑 35 号～37 号	141
第 120 図	土坑 38 号～40 号	142
第 121 図	土坑 41 号～43 号	143
第 122 図	土坑 44 号～46 号	144
第 123 図	土坑 47 号・土坑 48 号	145
第 124 図	土坑 49 号・出土遺物	146
第 125 図	土坑 50 号・土坑 51 号	147
第 126 図	土坑 52 号・出土遺物・分布図	148
第 127 図	土坑 53 号・土坑 54 号・出土遺物・土坑 55 号	149
第 128 図	土坑 56 号～58 号	150
第 129 図	土坑 59 号～61 号	151
第 130 図	土坑 62 号・土坑 63 号	152
第 131 図	土坑 64 号・出土遺物・土坑 65 号・土坑 66 号	153
第 132 図	土坑 67 号・出土遺物	154
第 133 図	土坑 68 号	155
第 134 図	土坑 69 号	156

第 135 図	土坑 70 号・出土遺物	157
第 136 図	土坑 71 号～74 号	159
第 137 図	土坑 75 号・出土遺物	160
第 138 図	土坑 76 号～78 号	161
第 139 図	土坑 79 号～81 号	162
第 140 図	土坑 82 号・出土遺物・土坑 83 号	163
第 141 図	土坑 84 号～86 号	164
第 142 図	土坑 87 号～89 号	165
第 143 図	土坑 90 号～93 号	166
第 144 図	土坑 94 号・出土遺物	167
第 145 図	土坑 95 号	168
第 146 図	土坑 96 号・出土遺物	169
第 147 図	土坑 97 号	170
第 148 図	土坑 98 号～100 号	171
第 149 図	土坑 101 号・土坑 102 号	172
第 150 図	土坑 103 号・土坑 104 号	173
第 151 図	集石遺構の範囲	177
第 152 図	集石遺構タイプ別分布図	178
第 153 図	集石遺構検出層別分布図	179
第 154 図	集石遺構 1 号・集石遺構 2 号	179
第 155 図	集石遺構 3 号～7 号	180
第 156 図	集石遺構 8 号～11 号	181
第 157 図	集石遺構 12 号・集石遺構 13 号・出土遺物・ 集石遺構 14 号	182
第 158 図	集石遺構 15～18 号	183
第 159 図	集石遺構 19 号～21 号	184
第 160 図	集石遺構 22 号・出土遺物	185
第 161 図	集石遺構 23 号・集石遺構 24 号・出土遺物	186
第 162 図	集石遺構 25 号・集石遺構 26 号	187
第 163 図	集石遺構 27 号・出土遺物・集石遺構 28 号・ 出土遺物	188
第 164 図	集石遺構 29 号・出土遺物	189
第 165 図	集石遺構 30 号・集石遺構 31 号	190
第 166 図	集石遺構 32 号・集石遺構 33 号	191
第 167 図	集石遺構 34 号・集石遺構 35 号	192
第 168 図	集石遺構 36 号・出土遺物	193
第 169 図	集石遺構 37 号・集石遺構 38 号	194
第 170 図	集石遺構 39 号～42 号	195
第 171 図	集石遺構 43 号～46 号	196
第 172 図	集石遺構 47 号～49 号・出土遺物	197
第 173 図	集石遺構 50 号・出土遺物・集石遺構 51 号・ 集石遺構 52 号	198
第 174 図	集石遺構 53 号～56 号	199
第 175 図	集石遺構 57 号～59 号・出土遺物	200
第 176 図	集石遺構 60 号～62 号・出土遺物	201
第 177 図	集石遺構 63 号・集石遺構 64 号・出土遺物・ 集石遺構 65 号	202
第 178 図	集石遺構 66 号・集石遺構 67 号・出土遺物・ 集石遺構 68 号・出土遺物	203
第 179 図	集石遺構 69 号・集石遺構 70 号	204
第 180 図	集石遺構 71 号・出土遺物	205
第 181 図	集石遺構 72 号～74 号	206
第 182 図	集石遺構 75 号・集石遺構 76 号・出土遺物	207
第 183 図	集石遺構 77 号・集石遺構 78 号	208
第 184 図	集石遺構 79 号・集石遺構 80 号	209
第 185 図	集石遺構 81 号・出土遺物・集石遺構 82 号・ 出土遺物	210
第 186 図	集石遺構 83 号・集石遺構 84 号	211
第 187 図	集石遺構 85 号・出土遺物	212
第 188 図	集石遺構 86 号・集石遺構 87 号	213
第 189 図	集石遺構 88 号	214
第 190 図	集石遺構 89 号・集石遺構 90 号・出土遺物	215
第 191 図	集石遺構 91 号	216
第 192 図	集石遺構 92 号	217
第 193 図	集石遺構 93 号・出土遺物	218
第 194 図	集石遺構 94 号・集石遺構 95 号	219
第 195 図	集石遺構 96 号・集石遺構 97 号・出土遺物・ 集石遺構 98 号	220

第196図	集石遺構99号・出土遺物・集石遺構100号	221
第197図	集石遺構101号・集石遺構102号	222
第198図	集石遺構103号～105号	223
第199図	集石遺構106号～109号	224
第200図	集石遺構110号～112号	225
第201図	集石遺構113号・集石遺構114号・出土遺物	226
第202図	集石遺構115号・出土遺物	227
第203図	集石遺構116号・集石遺構117号・出土遺物	228
第204図	集石遺構118号・出土遺物	229
第205図	集石遺構119号～121号・出土遺物	230
第206図	集石遺構122号・出土遺物・集石遺構123号	231
第207図	集石遺構124号・集石遺構125号・出土遺物	232
第208図	集石遺構126号～128号・出土遺物	233
第209図	集石遺構129号・集石遺構130号	234
第210図	集石遺構131号・出土遺物	235
第211図	集石遺構132号・出土遺物・集石遺構133号・ 出土遺物	236
第212図	集石遺構134号・出土遺物・集石遺構135号・ 集石遺構136号	237
第213図	集石遺構137号・出土遺物・集石遺構138号	238
第214図	集石遺構139号・出土遺物・集石遺構140号	239
第215図	集石遺構141号・出土遺物	240
第216図	集石遺構142号・出土遺物	241
第217図	集石遺構143号	242
第218図	集石遺構144号・出土遺物・ 集石遺構145号～147号	243
第219図	集石遺構148号	244
第220図	集石遺構149号	245
第221図	集石遺構150号・集石遺構151号	246
第222図	集石遺構152号	247
第223図	集石遺構152号出土遺物	248
第224図	集石遺構153号・出土遺物・集石遺構154号	249
第225図	集石遺構155号	250
第226図	集石遺構156号・出土遺物	251
第227図	集石遺構157号・集石遺構158号	252
第228図	集石遺構159号・集石遺構160号	253
第229図	集石遺構161号・出土遺物	254
第230図	集石遺構162号	255
第231図	集石遺構163号・出土遺物	256
第232図	集石遺構164号・出土遺物	257
第233図	集石遺構165号	258
第234図	集石遺構166号	259
第235図	集石遺構167号	260
第236図	集石遺構168号・出土遺物	261
第237図	集石遺構169号・出土遺物	262
第238図	集石遺構170号	263
第239図	集石遺構171号・出土遺物	264
第240図	集石遺構172号・出土遺物	265
第241図	集石遺構173号	266
第242図	集石遺構174号・集石遺構175号	267
第243図	集石遺構176号・集石遺構177号	268
第244図	集石遺構178号・出土遺物・集石遺構179号	269
第245図	集石遺構180号・集石遺構181号	270
第246図	集石遺構182号・出土遺物	271
第247図	集石遺構183号・集石遺構184号	272
第248図	集石遺構185号・集石遺構186号	273
第249図	集石遺構187号	274
第250図	集石遺構188号・集石遺構189号	275
第251図	集石遺構190号	276
第252図	集石遺構191号	277
第253図	集石遺構192号	278
第254図	石器製作跡分布図	285
第255図	石器製作跡1号・出土遺物	286
第256図	石器製作跡2号・出土遺物・石器製作跡3号	287
第257図	石器製作跡4号・出土遺物・石器製作跡5号	288
第258図	遺物分布図（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類・ Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類系土器）	289
第259図	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類土器・Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類系土器	290

第260図	遺物分布図（Ⅳ類土器）	291
第261図	遺物分布図（Ⅳ-a類）	292
第262図	Ⅳ-a-斜類土器（1）	293
第263図	Ⅳ-a-斜類土器（2）	294
第264図	Ⅳ-a-斜類土器（3）	295
第265図	Ⅳ-a-斜類土器（4）	296
第266図	Ⅳ-a-斜類土器（5）	297
第267図	Ⅳ-a-斜類土器（6）	298
第268図	Ⅳ-a-横類土器（1）	299
第269図	Ⅳ-a-横類土器（2）	300
第270図	Ⅳ-a-横類土器（3）	301
第271図	Ⅳ-a-横類土器（4）	302
第272図	Ⅳ-a-羽類土器（1）	303
第273図	Ⅳ-a-羽類土器（2）	304
第274図	Ⅳ-a-羽類土器（3）	305
第275図	Ⅳ-a-羽類土器（4）	306
第276図	Ⅳ-a-縦類土器（1）	307
第277図	Ⅳ-a-縦類土器（2）	308
第278図	遺物分布図（Ⅳ-b類）	309
第279図	Ⅳ-b-斜類土器（1）	309
第280図	Ⅳ-b-斜類土器（2）	310
第281図	Ⅳ-b-斜類土器（3）	311
第282図	Ⅳ-b-斜類土器（4）・Ⅳ-b-横類土器（1）	312
第283図	Ⅳ-b-横類土器（2）	313
第284図	Ⅳ-b-横類土器（3）	314
第285図	Ⅳ-b-横類土器（4）	315
第286図	Ⅳ-b-羽類土器・Ⅳ-b-縦類土器（1）	316
第287図	Ⅳ-b-縦類土器（2）	317
第288図	遺物分布図（Ⅳ-c類）	318
第289図	Ⅳ-c-斜類土器	318
第290図	Ⅳ-c-横類土器（1）	319
第291図	Ⅳ-c-横類土器（2）・Ⅳ-c-縦類土器（1）	320
第292図	Ⅳ-c-縦類土器（2）	321
第293図	Ⅳ類胴部	322
第294図	Ⅳ-底-ア類（1）	323
第295図	Ⅳ-底-ア類（2）	324
第296図	Ⅳ-底-ア類（3）・Ⅳ-底-イ類（1）	325
第297図	Ⅳ-底-イ類（2）・Ⅳ-底-ウ類・Ⅳ-底-エ類（1）	326
第298図	Ⅳ-底-エ類（2）・Ⅳ類系土器1（1）	327
第299図	Ⅳ類系土器1（2）	328
第300図	Ⅳ類系土器1（3）	329
第301図	Ⅳ類系土器2	330
第302図	遺物分布図（Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ類土器）	331
第303図	Ⅴ類土器（1）	331
第304図	Ⅴ類土器（2）	332
第305図	Ⅴ類土器（3）	333
第306図	Ⅴ類土器（4）	334
第307図	Ⅴ類土器（5）	335
第308図	Ⅵ類土器（1）	336
第309図	Ⅵ類土器（2）	337
第310図	Ⅵ類土器（3）	338
第311図	Ⅶ類土器	339
第312図	遺物分布図（Ⅷ類土器）	339
第313図	Ⅷ類土器	340
第314図	遺物分布図（Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ・Ⅻ類土器）	341
第315図	遺物分布図（Ⅸ-a-楕類・Ⅸ-a-山類・Ⅸ-a-菱類）	342
第316図	Ⅸ-a-楕類（1）	342
第317図	Ⅸ-a-楕類（2）・Ⅸ-a-山類（1）	343
第318図	Ⅸ-a-山類（2）・Ⅸ-a-菱類	344
第319図	遺物分布図（Ⅸ-b-楕類・Ⅸ-b-連類・Ⅸ-b-山類）	345
第320図	Ⅸ-b-楕類（1）	345
第321図	Ⅸ-b-楕類（2）・Ⅸ-b-連類（1）	346
第322図	Ⅸ-b-連類（2）・Ⅸ-b-山類（1）	347
第323図	Ⅸ-b-山類（2）	348
第324図	遺物分布図（Ⅸ-c-楕類・Ⅸ-c-連類・ Ⅸ-c-山類・Ⅸ-c-菱類）	349
第325図	Ⅸ-c-楕類（1）	349
第326図	Ⅸ-c-楕類（2）・Ⅸ-c-連類	350

第327図	IX-c-山類 (1)	351
第328図	IX-c-山類 (2)	352
第329図	IX-c-山類 (3)・IX-c-菱類	353
第330図	X-a類・X-b類・X-c類	354
第331図	XI類土器・XII類土器	355
第332図	遺物分布図 (XIII類土器)	356
第333図	XIII類土器 (1)	357
第334図	XIII類土器 (2)	358
第335図	XIII類土器 (3)	359
第336図	XIII類土器 (4)・XIV類土器	360
第337図	遺物分布図 (XIV・XV・XVI類土器)	361
第338図	XV類土器	361
第339図	XVI類土器 (1)	362
第340図	XVI類土器 (2)	363
第341図	XVI類土器 (3)	364
第342図	XVI類土器 (4)	365
第343図	XVI類土器 (5)	366
第344図	XVI類土器 (6)	367
第345図	XVII類土器 (1)	368
第346図	XVII類土器 (2)	369
第347図	XVII類土器 (3)・土製品	370
第348図	石鏃 I 類	371
第349図	石器分布図 (狩猟具類)	372
第350図	石器分布図 (加工具類)	372
第351図	石鏃 IIa類	373
第352図	石鏃 IIb類 (1)	374
第353図	石鏃 IIb類 (2)	375
第354図	石鏃 IIb類 (3)・石鏃 IIIa類	376
第355図	石鏃 IIIb類 (1)	377
第356図	石鏃 IIIb類 (2)	378
第357図	石鏃 IV類・石鏃 V類 (1)	379
第358図	石鏃 V類 (2)	380
第359図	石鏃 VI類	381
第360図	石鏃 VIIa類・石鏃 VIIb類	382
第361図	尖頭状石器	383
第362図	石槍	384
第363図	石匙 (1)	385
第364図	石匙 (2)	386
第365図	削器 (1)	387
第366図	削器 (2)	388
第367図	搔器・石錐・ドリル・楔状石器	389
第368図	二次加工剥片	390
第369図	剥片 (1)	391
第370図	剥片 (2)	392
第371図	剥片 (3)	393
第372図	石核 (1)	394
第373図	石核 (2)	395
第374図	石核 (3)	396
第375図	異形石器	397
第376図	器種不明石器	398
第377図	打製石斧 (1)	399
第378図	打製石斧 (2)	400
第379図	磨製石斧	401
第380図	局部磨製石斧・石斧未成品	402
第381図	礫器 (1)	403
第382図	礫器 (2)	404
第383図	礫器 (3)	405
第384図	礫器 (4)	406
第385図	礫器 (5)	407
第386図	磨石・敲石類 I 類 (1)	408
第387図	磨石・敲石類 I 類 (2)	409
第388図	磨石・敲石類 I 類 (3)	410
第389図	磨石・敲石類 I 類 (4)	411
第390図	磨石・敲石類 I 類 (5)	412
第391図	磨石・敲石類 I 類 (6)	413
第392図	磨石・敲石類 I 類 (7)	414
第393図	磨石・敲石類 II 類 (1)	415
第394図	磨石・敲石類 II 類 (2)	416

第395図	磨石・敲石類 III 類 (1)	417
第396図	磨石・敲石類 III 類 (2)	418
第397図	磨石・敲石類 III 類 (3)	419
第398図	磨石・敲石類 III 類 (4)	420
第399図	磨石・敲石類 IV 類 (1)	421
第400図	磨石・敲石類 IV 類 (2)	422
第401図	磨石・敲石類 IV 類 (3)・ 磨石・敲石類 V 類 (1)	423
第402図	磨石・敲石類 V 類 (2)・石錘・ 石製加工品・軽石製品	424
第403図	石皿 (1)	425
第404図	石皿 (2)	426
第405図	石皿 (3)	427
第406図	石皿 (4)	428
第407図	石皿 (5)	429
第408図	石皿 (6)	430
第409図	石皿 (7)	431
第410図	石皿 (8)	432
第411図	石皿 (9)	433
第412図	石皿 (10)	434
第413図	石皿 (11)	435
第414図	石皿 (12)	436
第415図	石皿 (13)	437
第416図	石皿 (14)	438
第417図	石皿 (15)	439
第418図	砥石	440

挿表目次

第1表	周辺遺跡一覧表	15
第2表	志布志 I C～鹿屋申良 J C T 間の遺跡	17
第3表	石器の石材分類表	52
第4表	竪穴住居跡の検出層	53
第5表	竪穴住居跡の形状	53
第6表	竪穴住居跡の長軸と短軸の最大値・最小値・平均値	54
第7表	竪穴住居跡の検出面積の最大値・最小値・平均値	54
第8表	竪穴住居跡一覧表	76
第9表	落とし穴の検出層	77
第10表	落とし穴の検出面の形状	78
第11表	落とし穴のタイプ	78
第12表	落とし穴一覧表	84
第13表	連穴土坑の最深部位置	85
第14表	連穴土坑の底面傾斜方向	85
第15表	連穴土坑の従穴部と主穴部の形状タイプ	86
第16表	従穴部と主穴部の形状タイプ組み合わせ	86
第17表	従穴部・ブリッジ・主穴部の主軸・短軸の平均値	86
第18表	主従値	86
第19表	連穴土坑一覧表 1	119
第20表	連穴土坑一覧表 2	120
第21表	連穴土坑一覧表 3	121
第22表	連穴土坑一覧表 4	122
第23表	長軸・短軸の平均値及び最大値・最小値	123
第24表	土坑の検出層	123
第25表	土坑の検出層毎のタイプ基数 (基)	124
第26表	土坑一覧表 1	174
第27表	土坑一覧表 2	175
第28表	土坑一覧表 3	176
第29表	タイプ別基数	177
第30表	検出層別のタイプ基数及び検出層で占める割合	177
第31表	集石遺構一覧表 1	279
第32表	集石遺構一覧表 2	280
第33表	集石遺構一覧表 3	281
第34表	集石遺構一覧表 4	282
第35表	集石遺構一覧表 5	283
第36表	集石遺構一覧表 6	284
第37表	石器製作跡の検出層及び終焉層	285
第38表	石器製作跡の黒曜石・その他の石材分類点数	285

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会（以下、「県教委」という。）は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し、諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は、東九州自動車道の建設を計画し、志布志IC～末吉財部IC区間の事業に先立って、事業地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下、「文化財課」という。）に照会した。

この計画に伴い文化財課は、平成11年1月に鹿屋串良JCT～末吉財部IC間を、平成12年2月には志布志IC～鹿屋串良JCT間の埋蔵文化財の分布調査を実施し、50か所の遺跡（854,100㎡）が存在することが明らかとなった。

この結果をもとに、事業区間内の埋蔵文化財の取扱いについて、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所、鹿児島県土木部道路建設課高速道路対策室、文化財課、埋文センターの4者で協議を重ね対応を検討してきた。

その後、日本道路公団民営化の政府方針が提起され、事業の見直しと建設コストの削減も検討することとなった。このような社会情勢の変化に伴い、遺跡の緻密な把握が要求されることとなり、埋蔵文化財の詳細分布調査、試掘調査、確認調査が実施されることとなった。

そこで、県教委は、まず平成13年1月29日から平成13年2月6日に調査の利便性や面積等を考慮して宮ヶ原遺跡、加治木堀遺跡、石縊遺跡、十三塚遺跡の試掘調査を実施した。さらに、平成13年7月10日から7月26日に鹿屋串良JCT～末吉財部IC間の工事計画図をもとに33の遺跡について詳細分布調査と、平成13年9月17日から10月26日まで、平成13年12月3日から12月25日までの2期間にわたり各遺跡の調査範囲及び遺物包含層の層数を把握するための試掘調査を実施した。

これらの詳細分布調査や試掘調査に加えて、既に合意されていた本線工事用道路及び側道部分の確認調査も実施することとなり、関山西遺跡、関山遺跡、狩俣遺跡の3遺跡を対象に平成13年10月1日から平成14年3月22日にかけて確認調査を実施した。

平成14年4月には、志布志IC～鹿屋串良JCT間の遺跡について再度分布調査を実施した結果、遺跡の調査対象面積が678,700㎡となった。

その後、日本道路公団民営化（現在の西日本高速道路株式会社）の閣議決定と新直轄方式に基づく道路建設の

確定、平成15年11月に暫定2車線施行に伴う議事確認書締結、同年12月に大隅IC（平成21年4月28日、「曾於弥五郎IC」へ名称変更）から末吉財部IC間の発掘調査協定書締結、平成16年3月に国土交通省九州地方整備局長、日本道路公団九州支社長、鹿児島県知事の間で新直轄方式施行に伴う確認書締結が結ばれ、工事は日本道路公団が国土交通省から受託し、発掘調査は日本道路公団が鹿児島県に再委託することとなり、これまでの確認書、協定書はそのまま生きるということになった。

また、日本道路公団からの再委託は曾於弥五郎ICまでで終了し、曾於弥五郎ICからの先線部は国土交通省からの受託事業となった。

田原迫ノ上遺跡の調査は、一部本調査を平成20年度に実施し、平成22年度から埋文センターが本調査を以下のように行った。

平成22年度 平成22年5月6日～平成23年3月11日

平成23年度 平成23年5月9日～平成24年3月16日

平成24年度 平成24年7月2日～平成25年1月28日

平成25・26年度の本調査は、埋文センターの国事業に係る発掘調査業務が埋文調査センターへ移管されたことに伴い、県文化財課からの委託を受けた埋文調査センターが以下のように行った。

平成25年度 平成25年6月3日～平成26年1月28日

平成26年度 平成26年5月12日～平成27年1月28日

報告書作成作業は、平成23・24年度は埋文センターが行い、平成25・27年度は埋文調査センターが行った。

田原迫ノ上遺跡の調査経過は、以下のとおりである。

発掘調査

1 分布調査：平成13年7月

2 試掘調査：平成13年12月

3 一部本調査：平成20年1月～3月

4 本調査：平成22年5月～平成27年1月

整理作業・報告書作成作業

整理・報告書作成作業は、平成23年度から実施しており、縄文時代前期～弥生時代編（平成25年度までの本調査分）を平成26年度に刊行している。

なお、各調査期間、調査体制等詳細については次節以降で報告することとする。

第2節 一部本調査

田原迫ノ上遺跡の一部本調査は、立小野堀遺跡・牧山遺跡と併せて下記の期間で実施された。実働は34日間である。

期 間 平成21年1月20日～平成21年3月19日

調査体制

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

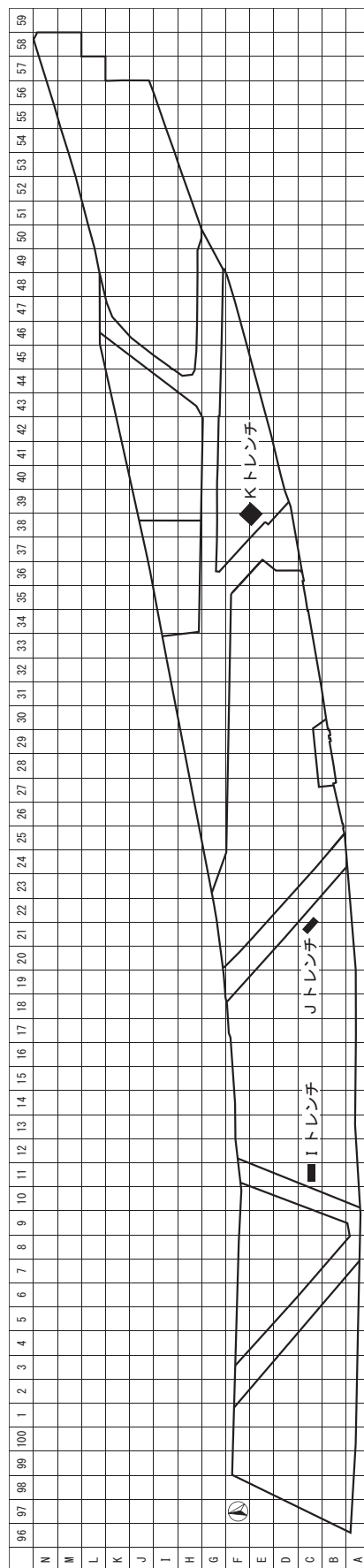
	所	長	宮原	景信
調査企画	〃	次長兼総務課長	平山	章
	〃	次長兼南の縄文室長	池畑	耕一
	〃	調査第二課長	彌榮	久志
	〃	主任文化財主事兼		
		第二課第一調査係長	中村	耕治
調査担当	〃	文化財主事	高岡	和也
事務担当	〃	総務係長	紙屋	伸一
	〃	主事	五百路	真

調査の詳細（調査日誌より）

調査の詳細を調査日誌より月単位で記す。

平成21年1月～3月

確認トレンチ（I～Kトレンチ）設定準備。I～Kトレンチ：表土剥ぎ後，調査。Iトレンチ：Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ，早期遺物出土状況写真撮影，遺物取り上げ，トレンチ位置図作成。



第1図 確認トレンチ位置図

第3節 本調査

本調査は平成22・23・24年度の3ヶ年は、埋文センターが、平成25・26年度の2ヶ年は、埋文調査センターが実施した。各年度の調査期間は以下のとおりである。現道部分は未調査であるが、平成28年度以降に調査を予定している。

平成22年度：平成22年5月6日～平成23年3月11日

平成23年度：平成23年5月9日～平成24年3月16日

平成24年度：平成24年7月2日～平成25年1月28日

平成25年度：平成25年6月3日～平成26年1月28日

平成26年度：平成26年5月12日～平成27年1月28日

各年度の調査体制及び調査の詳細については以下のとおりである。なお、調査の詳細については、平成22・23・24年度は日誌抄を基に、平成25・26年度は各種日報を基に記述している。

平成22年度の調査体制

事業主 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所

鹿児島県土木部高速道路対策室

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

所 長 山下 吉美

調査企画 〃 次長兼総務課長 田中 明成

〃 次長兼南の縄文調査室長 中村 耕治

〃 調査第二課長 井ノ上 秀文

〃 文化財主事兼

調査第二課第一調査係長 前迫 亮一

調査担当 〃 文化財主事 遠矢 勝幸

〃 〃 藤山 賢一郎

事務担当 〃 総務係長 大園 祥子

〃 主 事 高崎 智博

調査の詳細（日誌抄より）

平成22年度の本調査を平成22年5月6日から平成23年3月11日（実働172日間）まで実施した。平成22年度は主に弥生時代を中心としたⅡ～Ⅵ層の調査が中心で、縄文時代早期の調査は一部のみである。縄文時代前期以降の調査については、『田原迫ノ上遺跡1』を参照してほしい。ここでは縄文時代早期に関する調査の詳細について記載する。

平成22年7月

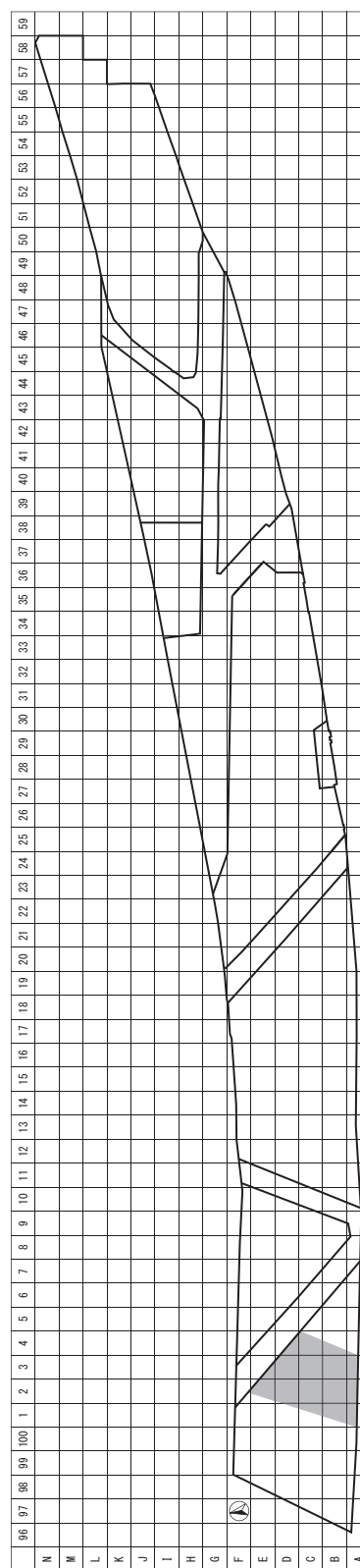
A～E-1～4区：下層確認トレンチを2ヶ所設定し、Ⅶ～ⅩⅢ層上面まで掘り下げ。遺物取り上げ。

埋蔵文化財専門職員養成講座受講者7名（6日）、国土交通省黒木専門職視察（8日）、鹿屋市教育委員会坂口課長・主幹兼文化財班長山口氏来跡（27日）。

平成22年8月

A～E-1～4区：Ⅸ～ⅩⅢ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。C-4区：ⅩⅢ層上面で落とし穴1号検出。

霧島文化財少年団発掘体験・鹿屋市文化財ウォッチン



第2図 平成22年度調査範囲図（縄文時代早期）

グ(3日), 曾於市文化財審議委員10名来跡(4日), 文化財課堂込係長来跡(6日)。

平成22年9月

A～E-1～4区: IX～XI層掘り下げ。C-4区: 落とし穴1号掘り下げ及び実測, 写真撮影。

平成22年10月

A～E-1～4区: IX～XIII層掘り下げ。XIII層上面地形測量図作成。C・D-2区: XIII層上面で落とし穴2・3号検出, 写真撮影及び掘り下げ。

平成22年11月

C・D-2～4区: XIII層上面落とし穴1～3号写真撮影及び掘り下げ。

C・D-2～4区: XIII層上面落とし穴1～3号写真撮影及び掘り下げ, 実測。

平成23年1月

C・D-2～4区: XIII層上面落とし穴1～3号掘り下げ及び実測。

平成23年2月

A-1～3区: XIII層上面まで掘り下げ。南側土層断面実測。C・D-2区: 落とし穴2・3号実測。

平成23年3月

C・D-2区: 落とし穴3号完掘及び完掘状況写真撮影。環境整備, 撤収作業。

平成23年度の調査体制

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所

鹿児島県土木部高速道路対策室

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

		所	長	寺田	仁志
調査企画	〃	次長兼総務課長	田中	明成	
	〃	次長兼南の縄文調査室長	井ノ上	秀文	
	〃	調査第二課長	富田	逸郎	
		調査第二課第一調査係長	八木澤	一郎	
調査担当	〃	文化財主事	遠矢	勝幸	
	〃	文化財研究員	平	美典	
	〃	文化財調査員	原	栄子	
事務担当	〃	総務係長	大園	祥子	
	〃	主事	高崎	智博	

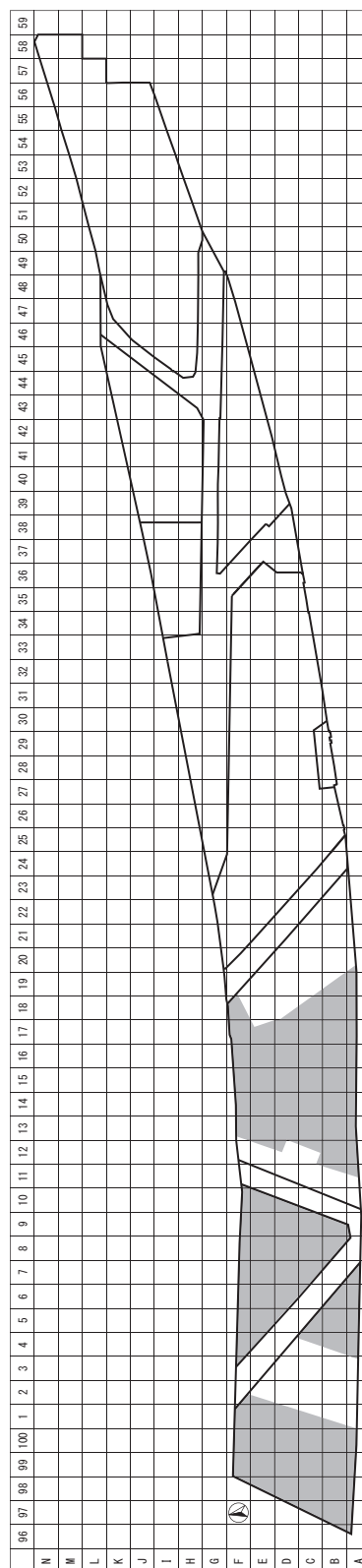
調査の詳細(日誌抄より)

平成23年度の本調査を平成23年5月9日から平成24年3月16日(実働162日間)まで実施した。平成23年度も7月までは弥生時代を中心とした調査が主で, 縄文時代早期の調査が本格化するのは8月以降である。

平成23年6月

A-11区: IX～XIII層掘り下げ及び遺物取り上げ, 写真撮影。

国土交通省上村監督官・本田専門職現地協議(3日)。



第3図 平成23年度調査範囲図(縄文時代早期)

平成23年7月

A・B-11区: XIV層掘り下げ終了, 完掘状況写真撮影。土層断面実測。A～F-11～13区: IX～XII層掘り下げ。A～F-13・14区: IX層掘り下げ。

南日本新聞社子ども記者取材(22日), 大隅河川国道事務所國友所長他4名, 海上自衛隊池群司令他4名遺跡見学(25日)。

平成23年8月

A～D-11～14区: X～XII層掘り下げ及び出土遺物取り上げ, 遺物出土状況写真撮影。E・F-14区: IX～XI層掘り下げ。C-13区: 竪穴住居跡1号検出及び掘り下げ。B-13区: 竪穴住居跡2号検出及び掘り下げ。C-12区: 集石1号実測。B-12・13区: 集石2～4号検出状況写真撮影及び実測。A-13区: 集石5号実測。A・B-12区: 集石7号実測。D-12・13区: 集石8・9号実測。

鹿屋市文化財ウォッチング事業発掘体験42名(3日), 南日本新聞社鹿屋総局堀之内氏来跡(8日), 霧島市文化財少年団発掘体験(23日)。

平成23年9月

A・B-4～7区: XIII層(薩摩火山灰層)上面地形測量図作成。A-7・8区: 下層確認トレンチ掘り下げ(IX～XII層)。B・C-4・5区: 下層確認トレンチ掘り下げ(IX～XIII層上面まで)終了, 完掘状況写真撮影。C～F-11～14区: X～XII層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。E-7区: 下層確認トレンチ掘り下げ(XI～XIII層)。B-13区: 竪穴住居跡1・2号掘り下げ及び完掘写真撮影。断面実測。B-13区: 連穴土坑1号掘り下げ。C-13区: 土坑1号, 連穴土坑2号掘り下げ及び実測。D-13区: 連穴土坑3号検出及び掘り下げ。D～F-13区: 集石10～18号写真撮影及び実測。

平成23年10月

A～C-4～7区: 南壁土層断面実測(A区のみ), 埋め戻し。A～F-8～10区: VIII層機械掘削, IX層以下掘り下げ。A～F-11～14区: IX～XII層掘り下げ及び出土遺物取り上げ, XIII層(薩摩火山灰層)上面地形測量図作成。A-12～14区: 南壁土層断面実測。A・B-14区: XIII層上面地形測量図作成。A・B-15・16区: IX・X層掘り下げ。A～C-14～16区: VIII層機械掘削, IX～XII層掘り下げ。C-14区: 土器集中(石坂式土器)検出及び実測, 写真撮影。F-12～14区: 北壁土層断面実測。C-13・14区: 竪穴住居跡3号検出及び掘り下げ。C-13区: 連穴土坑2号実測。D-13区: 土坑5号掘り下げ及び実測。C-14区: 土坑6号検出及び掘り下げ, 写真撮影。D-14区: 集石18・19・21号実測。B-14区: 集石20号実測。A・B-16区: 集石22・23号実測。

空中撮影(18日), 大隅地区社会教育行政研修会14名,

県文化財課前迫係長来跡(25日)。

平成23年11月

A～C-4～7区: 排土埋め戻し。A～E-15・16区: IX～XII層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。C～E-7・8区: 下層確認トレンチ掘り下げ終了(XIII層まで), 完掘状況写真撮影。C～F-5～10区: VIII層機械掘削, IX～XII層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。C～F-10区: 東壁土層断面実測。F-6～10区: 北壁土層断面実測。B-14区: 竪穴住居跡3号掘り下げ及び実測。D・E-9・10区: 土坑2号・3号検出及び掘り下げ, 実測。C-14区: 土坑6号掘り下げ及び実測, 写真撮影。C-8区: 落とし穴4号検出及び掘り下げ, 実測。D-7区: 落とし穴5号検出及び掘り下げ, 実測。E-9区: 落とし穴6号検出及び掘り下げ, 実測。E-5区: 連穴土坑4・5号検出及び掘り下げ, 実測。E-7・8区: 連穴土坑6・7号検出及び掘り下げ, 実測。F-9区: 連穴土坑8号検出及び掘り下げ, 実測。B-16区: 集石22・23号実測。B・C-15・16区: 集石24・25号実測。E-9・10区: 集石26・27号実測。D-9・10区: 集石28～30号実測。

細山田中学校職員研修10名(7日), 肝付町宮富小学校6年生見学8名(18日)。

平成23年12月

A～F-15・16区: X～XII層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。A・B-17・18区: III～V層掘り下げ。B～F-4～10区: XIII層(薩摩火山灰層)上面地形測量図作成。C～F-15・16区: X～XII層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。B-14区: 竪穴住居跡3号掘り下げ及び実測。E-7・8区: 連穴土坑6・7号完掘状況写真撮影及び実測, 落とし穴6号掘り下げ及び実測, 写真撮影。E-8・9区: 連穴土坑8号掘り下げ及び実測。B-15区: 集石25号実測。D-9区: 集石29号実測。C～E-15区: 集石31～36号実測。F-15区: 集石37号実測。F-17区: 集石38号実測。

平成24年1月

B・C-1区: 落とし穴7・8号掘り下げ及び実測, 写真撮影。B-13区: 土坑5号・連穴土坑9号: 掘り下げ及び実測, 写真撮影。A～D-17区: IX～XI層掘り下げ。来年度調査予定地確認トレンチ(3箇所設定)掘り下げ及び出土遺物取り上げ, 写真撮影。

東串良町教育長来跡(10日)。

平成24年2月

D～F-97～100及び1区: IX～XII層下層確認トレンチ掘り下げ, XIII層上面地形測量図作成, 土層断面実測。A-15区: 連穴土坑12号及びC-16区: 連穴土坑13号掘り下げ及び実測・写真撮影。A～D-17区: 集石39～44号写真撮影及び実測。B-17区: 竪穴住居跡4号写真撮影及び掘り下げ。A～C-18・19区: IX～X

Ⅱ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ⅸ～Ⅻ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。

平成24年3月

A～C-18・19区：Ⅹ～Ⅻ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。A-17～19区：南壁土層断面実測，ⅩⅢ層上面地形測量図作成。A-15・16区：連穴土坑12号実測。A-17区：竪穴住居跡4号掘り下げ及び実測。F-17～19区：Ⅺ・Ⅻ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。集石45～47号実測。B-16・17区：埋め戻し。撤収作業，環境整備。

平成24年度の調査体制

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

	所	長	寺田	仁志
調査企画	〃	次長兼総務課長	田中	明成
	〃	次長兼南の縄文調査室長	井ノ上	秀文
	〃	調査第二課長	富田	逸郎
	〃	主任文化財主事兼		
		調査第二課第一調査係長	八木澤	一郎
調査担当	〃	文化財主事	上床	真
	〃	〃	彌榮	久志
	〃	文化財調査員	原	栄子
事務担当	〃	総務係長	大園	祥子
	〃	主査	岡村	信吾

発掘調査支援業務委託

発掘調査の実施にあたり，埋文センターは「埋文センター埋蔵文化財発掘調査支援業務の委託実施要項」に基づき，民間業者へ支援業務委託を行った。

委託先 国際文化財株式会社

契約期間 平成24年6月8日～平成25年2月22日

調査期間 平成24年7月1日～平成25年1月28日

委託内容 発掘調査支援業務 1式

測量業務 1式

土工業務 1式

担当者 主任技術者 浦壁 晃

主任調査支援員 中村祐一

調査支援員 鳥越道臣，関美男，辻本彩，
土岐耕司，池内啓，長尾聡子

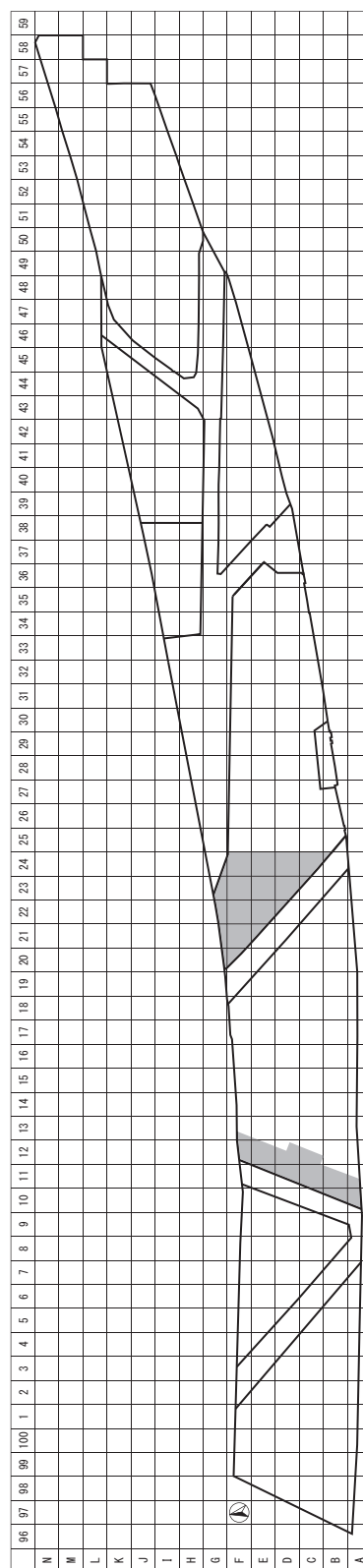
検 査 中間検査 平成24年10月22日

完成検査 平成25年2月14日（成果物・実地）

調査の詳細（日誌抄より）

平成24年度の本調査を平成24年7月1日から平成25

年1月28日（実働108日間）まで実施した。本調査の実施にあたり，国際文化財株式会社へ発掘調査支援業務委託を行った。



第4図 平成24年度調査範囲図（縄文時代早期）

平成24年7月

A～E-10～12区:Ⅸ～Ⅻ層掘り下げ,土層断面実測,写真撮影,Ⅻ層上面全景写真撮影。連穴土坑14～17号検出。落とし穴9号検出。集石48～50号写真撮影,実測。

平成24年8月

B～D-22～29区, E-25・26区, E・F-33・34区:Ⅱ～Ⅵ層の調査(詳細は省く)。

総務福利課視察(8日),鹿屋市文化財ウォッチング・小学生30名(9日)発掘体験,社会教育主事講習受講者・熊本大学11名(10日)。

平成24年9月

B～G-20～24区:Ⅸ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。B～D-22～24区:X層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。集石検出。

中蘭聡鹿児島国際大学教授現地指導(18日),大隅教育事務所現地研修18名(26日)。

平成24年11月

B～G-20～24区:X層・Ⅺ層掘り下げ出土遺物取り上げ。集石51～76検出,写真撮影。

現地説明会開催(10日,290名)。

平成24年12月

B～G-20～24区:Ⅺ層・Ⅻ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。竪穴住居跡5～10号・連穴土坑18～21・土坑検出,掘り下げ,写真撮影,実測。

平成25年1月

E～G-23・24区:Ⅻ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。竪穴住居跡9・10号養生。撤収作業。環境整備。

平成25年度の調査体制

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査統括 公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

		センター長	富田 逸郎
調査企画	〃	総務課長兼総務係長	山方 直幸
	〃	調査課長	鶴田 静彦
	〃	調査第一係長	八木澤 一郎
調査担当	〃	文化財専門員	上床 真
	〃	〃	徳永 愛雄
事務担当	〃	主 査	岡村 信吾
	〃	事業推進員	川崎 麻衣

発掘調査支援業務委託

発掘調査の実施にあたり,埋文調査センターは「埋文調査センター埋蔵文化財発掘調査支援業務の委託実施要

項」に基づき,民間業者へ支援業務委託を行った。

委託先 国際文化財株式会社

契約期間 平成25年4月23日～平成26年3月14日

調査期間 平成26年6月3日～平成27年1月28日

委託内容 発掘調査支援業務 1式

測量業務 1式

土工業務 1式

担当者 主任技術者 浦壁 晃

主任調査支援員 中村祐一

調査支援員 池内啓,鳥越道臣,鶴久森彬,
加世田悠仁,渡部裕司,
長尾聡子,荒木謙志

検 査 中間検査 平成25年10月8日

完成検査 平成26年2月18日(成果物)

平成26年2月19日(実地)

調査の詳細(各種日報より)

平成25年度の本調査を平成25年6月3日から平成26年1月28日(実働124日間)まで実施した。本調査の実施にあたり,国際文化財株式会社へ発掘調査支援業務委託を行った。

平成25年6月

D～F-25～29区:Ⅸ層・X層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。集石78～82検出,写真撮影,実測。石器製作跡1・2検出,写真撮影。

細山田中学校1年生見学37名(6日),文化財課中村文化財主事監理業務(11日),埋文センター堂込課長監理業務(26日)。

平成25年7月

A・B-20～24区:Ⅸ層・X層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。D～F-25～29区:Ⅸ層～Ⅻ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。集石83～89検出,写真撮影。

文化財課中村文化財主事監理業務(9日)。

平成25年8月

A-20～23区, B-19～26区, C-18～22・25・26区, D-18～21・25～29区, E-18～20・25・27～29区, F-25・27～29区:Ⅸ層・X層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。B-20～22区, C-18～22・25・26区, D-25・26区:Ⅺ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。A-20～24区, B-20～24区, C-20～23区:Ⅻ層掘り下げ。集石90～127・竪穴住居跡11号検出,写真撮影,実測。

鹿屋市文化財ウォッチング発掘体験(6日),宮田小学校親子会23名発掘体験,埋文センター堂込課長監理業務(7日)。

平成25年9月

D-20・34～37区, E-20区, F-30～35区:先行トレンチ掘り下げ。D-18～21区, E-17～20・

30～36区, F-30～36区: IX層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。B・C-25・26区, D-18～21・25・26区, E-17～20区, E・F-30～36区: X層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。B・C-25・26区, D-18～21・25・26区, E-17～20区, E・F-30～36区: XI層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。C・D-25・26区, D-17～21区, F-17～20区: XII層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。連穴土坑22・23号検出, 写真撮影, 実測。集石128～140号検出, 写真撮影, 実測。土坑検出, 写真撮影, 実測。

平成25年10月

B-26～28区, C・D-27～29区: IX層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。B-26～28区, C・D-27～29区, E・F-30～36区: X層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。E・F-30～36区: XI層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。E-30～32・35～37区, F-30～36区: XII層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。竪穴住居跡12号検出, 写真撮影, 実測。集石141～147号検出, 写真撮影, 実測。土器集中1検出, 写真撮影, 実測。土坑検出, 写真撮影, 実測。

平成25年11月

B-26～28区, C-27～36区, D-27～36・39～41区, E-39～46区, F-42～48区, G-44～48区: IX層・X層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。B-26～28区, C-27～29区, D-27～29・38～41区, E-38～46区, F-40～48区, G-44～48区: XI層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。B-26～28区, C-27～29区, D-27～29区, F-44～49区, G-45～49区: XII層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。竪穴住居跡13号・集石148～161号検出, 写真撮影, 実測。土坑検出, 写真撮影, 実測。

埋文センター堂込課長監理業務(26日)。

平成25年12月

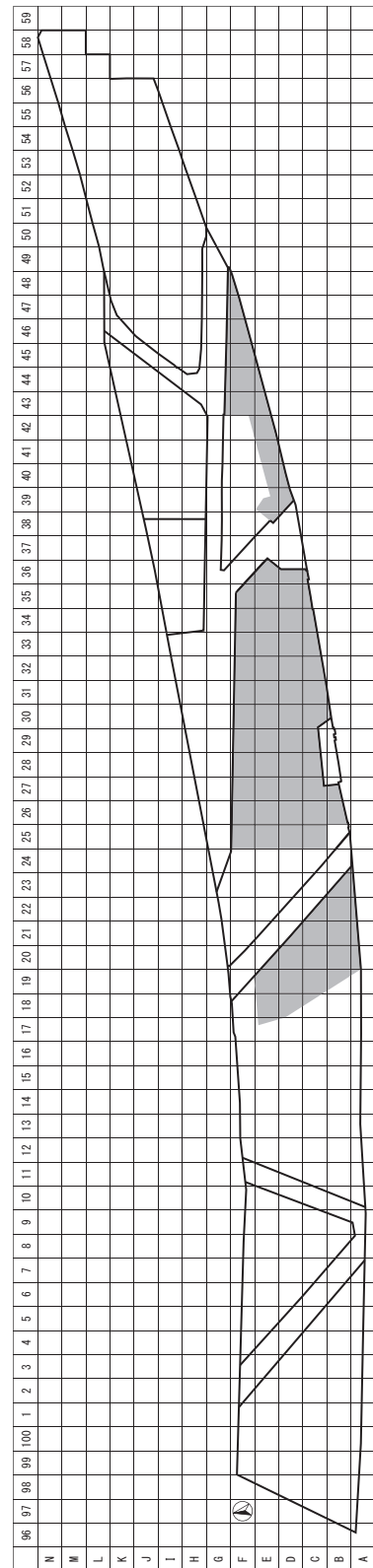
D-30～36区: X層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。B-26～28区, C-30～36区, D-26～28, 30～36区: XI層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。B-26～28区, D-26～28・38～41区, E-38～46区, F-41～49区, G-45～49区: XII層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。竪穴住居跡14・15号検出, 写真撮影, 実測。連穴土坑24号検出, 写真撮影, 実測。集石162～165号検出, 写真撮影, 実測。土坑検出, 写真撮影, 実測。

埋文センター堂込課長監理業務(17日)。

平成26年1月

F・G-43・44区: IX層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。F・G-43・44区: X層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。C・D-30～36区, F・G-43・44区: XI層・XII層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。竪穴住居跡16号

検出, 写真撮影, 実測。連穴土坑25号検出, 写真撮影, 実測。集石166号検出, 写真撮影, 実測。土坑検出, 写真撮影, 実測。空中写真撮影。撤収作業, 環境整備。



第5図 平成25年度調査範囲図(縄文時代早期)

平成26年度の調査体制

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査統括 公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

センター長 堂込 秀人
調査企画 〃 総務課長兼総務係長 山方 直幸
〃 調査課長 八木澤 一郎
〃 調査第二係長 寺原 徹
調査担当 〃 文化財専門員 平 美典
〃 〃 上村 俊洋
事務担当 〃 主 査 岡村 信吾
〃 事業推進員 川崎 麻衣

発掘調査支援業務委託

発掘調査の実施にあたり、埋文調査センターは「埋文調査センター埋蔵文化財発掘調査支援業務の委託実施要項」に基づき、民間業者へ支援業務委託を行った。

委託先 国際文化財株式会社

契約期間 平成26年4月11日～平成27年3月12日

調査期間 平成26年5月12日～平成27年1月28日

委託内容 発掘調査支援業務 1式

測量業務 1式

土工業務 1式

担当者 主任技術者 平林淳雄

主任調査支援員 鳥越道臣

調査支援員 池内啓、山崎良二、青嶋邦夫、
鶴久森彬、加世田悠仁

検 査 中間検査 平成26年10月21日

完成検査 平成27年2月24日（成果物）

平成27年3月3日（実地）

平成26年度の本調査を平成26年5月12日から平成26年1月28日（実働145日間）まで実施した。本調査の実施にあたり、国際文化財株式会社へ発掘調査支援業務委託を行った。

平成26年6月

E～G-36～42区：Ⅸ層～Ⅺ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。集石167～170号検出，写真撮影，実測。礫集積6号検出，写真撮影，実測。土坑検出，写真撮影，実測。

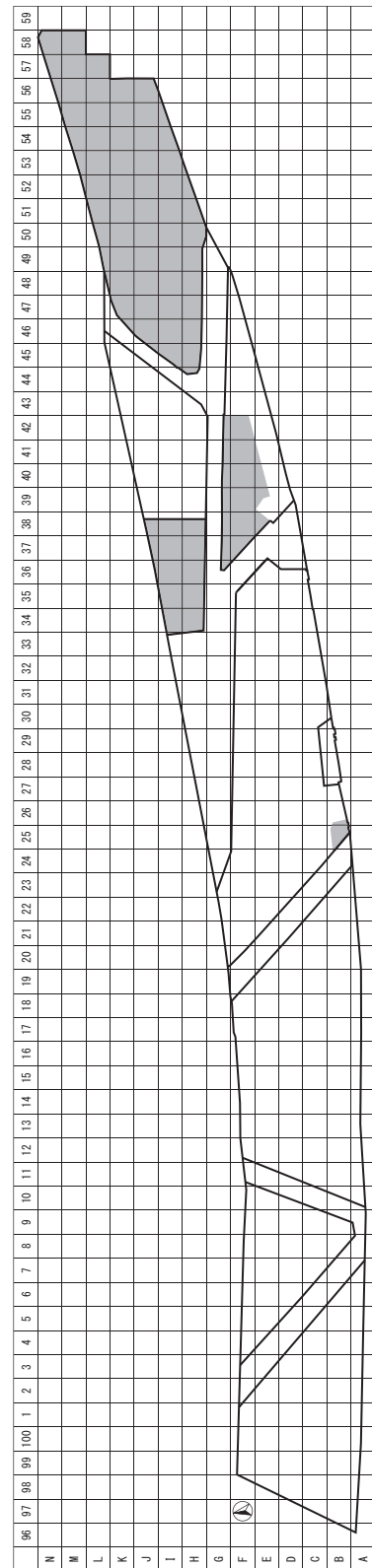
平成26年7月

K-50～53区，L-50～56区，M-52～56区：Ⅸ層・Ⅹ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。D～F-36～42区：Ⅺ層，Ⅻ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。連穴土坑26号検出，写真撮影，実測。集石171

号検出，写真撮影，実測。土坑検出，写真撮影，実測。

平成26年8月

H～J-50～53区，K-50～56区，L・M-54～56区：Ⅸ層・Ⅹ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。H～



第6図 平成26年度調査範囲図（縄文時代早期）

J - 33 ~ 38区：集石172 ~ 175号検出，写真撮影，実測。

平成26年9月

H - 50 ~ 53区，I・J - 50 ~ 56区：IX層・X層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。H - 50 ~ 53・55・56区，I・J - 50 ~ 56区：XI層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。H・I - 34 ~ 35区：IX層～XII層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。B - 25 ~ 26区：IX層～XI層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。連穴土坑27号検出，写真撮影，実測。集石176 ~ 180号検出，写真撮影，実測。土坑検出，写真撮影，実測。

平成26年10月

H ~ L - 44 ~ 49区：IX層・X層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。K・L - 50 ~ 56区，M - 53 ~ 56区，N - 56区：XI層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。H ~ J - 33 ~ 38区：XII層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。A・B - 25・26区：XIII層上面遺構精査。竪穴住居跡17 ~ 20号検出，写真撮影，実測。連穴土坑28 ~ 38号検出，写真撮影，実測。集石181 ~ 188号検出，写真撮影，実測。土坑検出，写真撮影，実測。

平成26年11月

M・N - 58区：XIII層上面精査。H ~ L - 44 ~ 49区：X層～XII層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。H ~ J - 33 ~ 38区：IX層～XI層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。竪穴住居跡21・22号検出，写真撮影，実測。連穴土坑39 ~ 41号検出，写真撮影，実測。集石189・190号検出，写真撮影，実測。土坑検出，写真撮影，実測。

平成26年12月

先行トレンチ掘り下げ。H ~ L - 44 ~ 49区：XIII層上面精査。H ~ J - 33 ~ 38区：XI層・XII層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。連穴土坑42 ~ 47号検出，写真撮影，実測。集石191号検出，写真撮影，実測。土坑検出，写真撮影，実測。空中写真撮影。環境整備。

平成27年1月

H ~ L - 49・50区（ベルト部分）：VIII層～XII層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。集石192・193号検出，写真撮影，実測。撤収作業，環境整備。

第4節 整理・報告書作成

本報告書に伴う整理・報告書作成作業は，平成24・25・28年度は田原迫ノ上遺跡の発掘調査と並行して実施し，平成27年度は整理・報告書作成作業のみを実施した。

整理・報告書作成作業は，平成24年度は埋文センターが実施した。平成25・27・28年度は，県文化財課からの委託を受けた埋文調査センターが実施した。

作業内容は，以下のとおりである。

1 整理事業

(1) 遺構・土層断面

実測図と図面台帳との照合，実測図の遺構別仕分け，デジタルトレースの調整・修正等

(2) 遺物

ア 土器・石器共通

水洗い，注記，遺構内出土遺物と包含層出土遺物との仕分け，遺物と遺物台帳や遺構実測図等との照合等

イ 土器

分類（部位・形式等），接合（簡易な復元含む），実測個体の選別等

ウ 石器

一般礫との仕分け，分類（器種等），実測個体の選別接合等

2 報告書作成作業整理作業

(1) 遺構・土層断面

遺構配置図作成，デジタルトレースによる土層断面図作成・統合，レイアウト等

(2) 土器

実測，拓本，デジタルトレース，レイアウト，観察表作成，原稿執筆，報告書掲載遺物写真撮影等

(3) 石器

実測，実測委託，トレース，レイアウト，観察表作成，原稿執筆，報告書掲載遺物写真撮影等

(4) 自然科学分析

炭化物の年代測定・樹種同定委託等

3 各年度の作成体制

整理・報告書作成作業に関する作成体制は以下のとおりである。

平成24年度

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所

作成主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

作成統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

	所	長	寺田 仁志
作成企画	〳	次長兼総務課長	田中 明成
	〳	次長兼南の縄文調査室長	井ノ上 秀文
	〳	調査第二課長	富田 逸郎
	〳	調査第二課第一調査係長	八木澤 一郎
作成担当	〳	文化財調査員	原 栄子
事務担当	〳	総務係長	大園 祥子
	〳	主 査	岡村 信吾

平成25年度

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所

作成主体 鹿児島県教育委員会
 企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課
 作成統括 公益財団法人鹿児島県文化振興財団
 埋蔵文化財調査センター

作成企画 センター長 富田 逸郎
 〃 総務課長兼総務係長 山方 直幸
 〃 調査課長 鶴田 静彦
 〃 調査第一係長 八木澤 一郎
 作成担当 〃 文化財専門員 國師 洋之
 〃 文化財調査員 中村 有希
 事務担当 〃 主 査 岡村 信吾

平成27年度

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所

作成主体 鹿児島県教育委員会
 企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課
 作成統括 公益財団法人鹿児島県文化振興財団
 埋蔵文化財調査センター

作成企画 センター長 堂込 秀人
 〃 総務課長兼総務係長 有村 貢
 〃 調査課長 八木澤 一郎
 〃 調査第一係長 中村 和美
 作成担当 〃 文化財専門員 徳永 愛雄
 事務担当 〃 主 査 荒瀬 勝己

整理作業・報告書作成作業支援業務の委託

整理・報告書作成作業の実施にあたり、埋文調査センターは「埋文調査センター埋蔵文化財整理作業及び報告書作成作業支援業務の委託実施要項」に基づき、民間調査組織へ作業及び報告書作成作業支援業務の委託を行った。

埋文調査センター職員1名が常駐して、統括、指揮及び運営を行った。委託内容は以下のとおりである。

委託先 株式会社九州文化財研究所
 契約期間 平成27年4月13日～平成28年3月11日
 作成期間 平成27年5月11日～平成28年2月19日
 委託内容 報告書作成作業支援業務 1式
 整理作業支援業務 1式
 担当者 主任調査支援員 山下研
 調査支援員 中岡達也、中村幸史郎
 検 査 中間検査 平成27年10月8日
 完成検査 平成28年3月3日

平成28年度

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
 作成主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課
 作成統括 公益財団法人鹿児島県文化振興財団
 埋蔵文化財調査センター

作成企画 センター長 堂込 秀人
 〃 総務課長兼総務係長 有村 貢
 〃 調査課長 八木澤 一郎
 〃 調査第二係長 宗岡 克英
 作成担当 〃 文化財専門員 徳永 愛雄
 〃 文化財専門員 平 美典
 事務担当 〃 主 査 荒瀬 勝己

整理作業・報告書作成作業支援業務の委託

整理・報告書作成作業の実施にあたり、埋文調査センターは「埋文調査センター埋蔵文化財整理作業及び報告書作成作業支援業務の委託実施要項」に基づき、民間調査組織へ作業及び報告書作成作業支援業務の委託を行った。

埋文調査センター職員1名が常駐して、統括、指揮及び運営を行った。委託内容は以下のとおりである。

委託先 国際文化財株式会社
 契約期間 平成28年4月11日～平成29年3月10日
 作成期間 平成28年5月9日～平成29年1月27日
 委託内容 報告書作成作業支援業務 1式
 整理作業支援業務 1式
 担当者 主任調査支援員 大塚正樹
 調査支援員 辻本彩、島崎直行
 検 査 中間検査 平成28年10月21日

4 整理・報告書作成の経過

各年度の整理・報告書作成の概要を、平成24・25年度は日誌抄をもとに、平成27・28年度は整理作業及び報告書作成作業業務月報をもとに月ごとに記した。

平成24年度

平成24年4月 土器洗い、石の選別、廃棄礫パソコン入力、土器注記、石器洗い
 5月 土器注記、石器分類、廃棄礫パソコン入力、図面点検、石器注記、写真パソコン整理、土器分類、土器接合
 6月 土器接合
 7月 土器接合、石器注記、軽石の土落とし
 8月 土器接合、石器注記
 9月 土器洗い
 平成25年2月 竪穴住居跡・土坑・集石仮トレース、土器接合
 3月 竪穴住居跡・土坑・集石仮トレース、土器接合

※平成24年10月～平成25年1月は、縄文時代早期に関わる作業は実施していない。

平成25年度

平成25年4月	遺構図面整理
5月	遺構図面整理, 石器分類, 遺構埋土フローテーション
6月	遺構図面整理, 遺構内出土礫石器実測, 遺構図トレース, フローテーション
7月	土器水洗い, 遺構内出土礫石器実測・トレース
8月	土器水洗い, 石器実測委託準備
9月	石器水洗い
10月	土器水洗い, 科学分析委託準備, 土器分類, 注記
11月	石器実測委託の実測図チェック
12月	石器実測委託の実測図チェック
平成26年3月	図面整理, 資料整理
※平成26年1月・2月は, 縄文時代早期に関わる作業は実施していない。	

平成27年度

平成27年4月	支援業務委託準備, 入札, 実測石器選別
5月	支援業務委託作業開始, 土器接合, 遺構図面整理
6月	土器接合, 土器分類, 土器実測, 台長作成, 原稿執筆
7月	土器分類, 土器実測, 拓本, 復元, 遺構図調整・修正, 原稿執筆
8月	土器実測, 拓本, 復元, 遺構図調整・修正・トレース, 石器実測, 原稿執筆
9月	土器実測, 拓本, 復元, 遺構図調整・修正・トレース, 石器実測, 原稿執筆
10月	土器実測, 拓本, 復元, 石器実測・トレース, 遺構図調整・修正・トレース原稿執筆
11月	土器実測・拓本・トレース, 石器実測・トレース, 遺構図調整・修正・トレース, 観察表作成, 原稿執筆
12月	土器実測・拓本・トレース, 石器実測・トレース, 遺構図調整・修正・トレース, 台帳作成, 観察表作成
平成28年1月	土器実測・拓本・トレース, 石器実測・トレース, 拓本スキャニング, 遺構配置図作成, 台帳作成, 観察表作成, 原稿執筆
2月	拓本・トレース, 石器実測・トレース, 拓本スキャニング, 遺構配置図作成, 台帳作成, 観察表作成, 検査準備, 支援業務委託作業終了
3月	成果物提出, 完成検査, 支援業務委託終了

平成28年度

平成28年4月	支援業務委託準備, 入札
5月	支援業務委託作業開始, 土器実測, 復元, 土器分類, 石器実測, 遺構図トレース・修正, 拓本・トレース図合成
6月	土器実測, 拓本, 土器分類, 石器実測, 遺構図トレース・修正, 拓本・トレース図合成, 原稿執筆
7月	土器実測, 拓本, 土器分類, 石器実測・トレース, 遺構図トレース・修正, 拓本・トレース図合成, 原稿執筆, データ編集
8月	土器実測, 拓本, 土器分類, 遺構図修正, 石器実測・トレース, 拓本・トレース図合成, 遺構図仮レイアウト, 原稿執筆, データ編集
9月	土器実測, 拓本, 復元, 遺構図修正, 拓本・トレース図合成, 石器実測・トレース, 土器再分類, 土器仮レイアウト, 黒曜石産地推定分析, 原稿執筆, データ編集
10月	土器・石器観察表作成, 土器再分類, 遺物写真撮影, 原稿執筆, データ編集
11月	原稿執筆, 分布図作成, データ編集, レイアウト, 校正
12月	原稿執筆, 分布図作成, データ編集, レイアウト, 校正, 入校
平成29年1月	校正
2月	印刷・製本
3月	成果物提出, 完成検査, 支援業務委託終了

※平成28年度田原迫ノ上遺跡の発掘調査分の出土遺物の水洗い・注記を行ったが, 割愛している。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

鹿屋市串良町は、大隅半島南東部のほぼ中央に位置し東は東串良町、南は肝属川を隔てて肝付町、西は鹿屋市東原町、旭原町、笠之原町、北東は立小野台地を隔てて曾於郡大崎町と接している。平成18年1月1日に旧鹿屋市と合併するまでは広大な笠野原台地を二分していた。

串良町が位置する大隅半島は、九州山地の延長をなす東西の山地、その間の丘陵、台地及び低地等の低地帯から構成され、地質は大部分がシラス、ボラ等の火山灰土壌となっている。

東側の山地は、志布志湾北部から宮崎県に突出した形で北から南へ延びている鰐塚山地である。主峰は宮崎県内の鰐塚山(1,119m)で中生層の地質からなっている。

西側の山地は、北部の霧島火山の分脈から湾奥に形成された始良カルデラのカルデラ壁を含み、南部の高隈山系へと連なっている。高隈山地は、北部の白鹿岳・荒磯岳等500～600m級の山々と、南部の大箕柄岳(1,236.8m)を主峰に横岳・御岳等1,000m級の山から成る山容は急峻で深い森林に覆われている。

東西の山地は、ともに九州山地の延長をなし、それらの間は低地帯となり丘陵や台地及び低地となっている。これらの山地間を埋めるような形で、洪積世の火山活動による火砕流が堆積し、丘陵や台地が広く分布したシラス地形になっている。この火砕流は南西部の鹿兒島湾口に形成された阿多カルデラの火砕流や湾奥に形成された始良カルデラの入戸火砕流である。これらの火砕流をはじめとする噴出物が堆積後から現在に至るまで大小多くの河川で開折され、断片的な台地を残すだけの丘陵状地形や原面はほとんど浸食されず残った広大な台地となっている。

一方、低地は、高隈山地や鰐塚山地等を水源とする大小の河川が走り、志布志湾、鹿兒島湾等に注いでいる。この河川は、上・中流域で狭い谷底平野を形成し、また、何段かの河岸段丘も認められる。

この大隅半島に位置する串良町の地形は、東西に6.5km、南北に13kmの狭長で、北部の山地中央において山地は少なく、笠野原台地と呼ばれる平坦なシラス台地から成っている。台地は「クロボク」と呼ばれる黒色火山灰土壌に覆われており、広大な畑地帯が形成されている。南部及び東部は、肝属川とその支流の串良川が流れ、それによる沖積地が広がり、約695haの水田地帯を形成している。また、北部には低い丘陵性の山地が存在するが、町域に占める割合は少ない。

田原迫ノ上遺跡は、この串良町の北東部に所在し、笠野原台地の縁辺部に位置する。本遺跡の標高は約120mで、遺跡の北側斜面を下ったところには、串良川が西から東に向かって蛇行して流れており、本遺跡との比高差は約70mである。西側には立小野堀遺跡が、東側には牧山遺跡が隣接する。

第2節 歴史的環境（周辺の遺跡を中心に）

串良町では、昭和36、50～52年度に分布調査が行われ、数多くの遺跡が周知のものとなった。現在までに、詳細分布調査及び確認調査によりそれらの遺跡のエリアが確定しつつある。また、串良町における遺跡の大半は、笠野原台地の縁辺部に集中して立地していることが明らかになっている。

東九州自動車道関連遺跡については、第3節において大まかな概要を記すことにする。

旧石器時代

本遺跡周辺の二小塚A遺跡において、旧石器時代の可能性がある剥片が数点出土している。

また、本遺跡からやや離れるが、鹿屋バイパス建設に伴って発掘調査が行われた西丸尾遺跡・榎崎A遺跡・榎崎B遺跡でナイフ形石器文化期～細石刃文化期の遺構・遺物が確認されている。

縄文時代

早期の遺跡としては、倉園B遺跡・下堀遺跡・益畑遺跡・高吉B遺跡などがあげられる。倉園B遺跡では、住居址遺構4軒・連穴土坑と断定できるものが10基・集石遺構60基検出されている。下堀遺跡では、連穴土坑と断定されているものが10基、集石遺構が13基検出されている。本遺跡から3km離れた益畑遺跡では、住居跡2軒・連穴土坑16基・集石遺構85基・土坑160基が検出されている。中でも、1号堅穴住居跡は、長軸464cm、短軸287cm、深さ67cmで、堅穴部の2面にベッド状の張り出しをもつ。この住居跡の埋土中にはP13（桜島起源の薩摩火山灰：約9500年前）がレンズ状に堆積しており、その下位から前平式土器が出土したことから、上野原遺跡とほぼ同じ状況がうかがえる。高吉B遺跡では、連穴土坑のブリッジ部分から完形に近い石坂式土器が出土した連穴土坑1基を含む合計4基の連穴土坑・集石遺構141基などが検出されている。

前期の遺跡としては、神野牧遺跡・石踊遺跡などがあげられる。神野牧遺跡では、集石遺構3基が検出され、曾畑式土器・深浦式土器などが出土している。石踊遺跡では、深さ10cmの落ち込みの中に、磨石・敲石5個と角礫1個の上に約20cmの大きさの五角形状の板

石が乗った状態で検出され集積遺構1基、曾畑式土器・甕式土器が出土している。

中期の遺跡としては、前谷遺跡・岩崎遺跡などがあげられる。前谷遺跡では、竪穴住居跡5軒（方形状3軒・円形状2軒）集石遺構1基などが検出され、春日式土器が出土している。岩崎遺跡は、岩崎式土器の標識遺跡で階段状の道が検出されている。

後期の遺跡としては、ホンドンガマ遺跡・十三塚遺跡・牧山遺跡などがあげられる。ホンドンガマ遺跡では、市来式土器に比定できる土器・石匙・打製石斧などが出土している。十三塚遺跡では、凹線文土器・市来式土器・三万田式土器が出土している。牧山遺跡では、西平式土器・中岳Ⅰ・Ⅱ式土器などが出土し、後期のピットにおいて、遺物が環状に集中する範囲の内側から同心円状に検出されており、環状集落を呈していたと考えられている。

晩期の遺跡としては、宮下遺跡・柿之木段遺跡などがあげられる。宮下遺跡では、黒川式土器・北部九州の夜臼式土器並行の刻目突帯文土器・組織痕土器（平織り）が出土している。柿木段遺跡では、晩期の落とし穴・土坑の他、石斧埋納遺構が検出されている。

弥生時代

大隅半島においても、前期の遺跡はわずかで、確認できる遺跡の規模としては小さく、分布も散発的である。宮下遺跡は、縄文時代晩期から弥生時代前期への移行期にある遺跡と思われる。また、水の谷遺跡では、前期に該当する甕形や鉢形の弥生土器が出土している。

中期以降の遺跡としては、吉ヶ崎遺跡・前畑遺跡・王子遺跡・十三塚遺跡・本遺跡等があげられる。吉ヶ崎遺跡では、中期の竪穴住居跡が3軒検出されている。特に、1号住居状跡はベット状遺構をもち、床面の焼土や炭化物が多く見られ、焼失家屋と思われる。そのためか、甕形土器・壺形土器の完形品が各4点と磨製石鏃・磨製石斧等が住居跡の床面から発見されている。前畑遺跡では、方形プランで約4m四方を呈する竪穴住居跡3軒・平地式建物跡や高床倉庫と考えられる掘立柱建物跡8棟などが検出され、山ノ口式土器の範疇に属する在地系土器が出土している。王子遺跡では、竪穴住居跡27軒・棟持柱を有する掘立柱建物跡6棟・掘立柱建物跡8棟・土坑を有する建物跡2棟などが検出されている。十三塚遺跡では、張り出しのある竪穴住居跡が8軒検出され、住居内からは、壺形土器・甕形土器・棒状叩具・磨製石鏃・鉄鏃等が出土している。本遺跡では、竪穴住居跡31軒・掘立柱建物跡40棟（うち、棟持柱を持つ掘立柱建物跡2棟）・柱穴列6列が検出され、山ノ口式土器と多くの土製加工品も出土している。また、調査区外へ続く大型建物跡と考えられる柱穴列は、現地にそのまま保存されることとなった。

古墳時代

大隅半島、特に志布志湾沿岸部は古くから唐仁古墳群・塚崎古墳群・横瀬古墳群をはじめとする多くの古墳が存在することが知られている。また、南九州特有の地下式横穴墓も多く分布する地域である。

本遺跡に近接する立小野堀遺跡では、約190基の地下式横穴墓と鉄剣や鉄鏃等数多くの副葬品が出土している。副葬品の中の青銅鈴は、環鈴の転用品で、国内最古級のものである。本遺跡に隣接する町田堀遺跡では、地下式横穴墓88基（うち、1基は円形周溝を伴う地下式横穴墓）や鉄剣、異形鉄器等の副葬品が確認されている。

地下式横穴墓に関する遺跡は、鹿屋市の薬師堂古墳・祓川地下式横穴墓群・中尾遺跡・名主原遺跡、串良町の岡崎古墳群、大崎町の下堀遺跡などで出土している。これらの遺跡は、肝属川・串良川・持留川・始良川・大始良川流域に存在しており、地下式横穴墓の分布状況が明らかになりつつある。このことは、岡崎古墳群出土の3個体の初期須恵器・鉄鋌、中尾遺跡出土の象嵌が施された鉄剣・鉄刀と合わせて、当時の人々の生活を解明していく上で貴重な資料である。

集落遺跡として、現在調査中だが、本遺跡と同町内の小牧遺跡・川久保遺跡があげられる。小牧遺跡では、竪穴住居跡9軒・礫集積8基・花卉形住居2軒が検出されている。川久保遺跡では、竪穴住居跡27軒（うち、鍛冶関連建物跡2軒）が検出され、鉄滓・轆の羽口等が出土している。中でも、轆の羽口は転用品のみでなく、専用として作られた可能性があるものも出土している。両遺跡とも、現時点では調査途中である。

古代・中世以降

串良町内における中世以降の遺跡は、県教育委員会発行の「鹿児島県中世城跡」では14カ所が報告されているが、詳細な調査はほとんどなされていない。

岡崎古墳群と甫木川を挟んだ西側の丘陵上に位置する稲村城跡は、16基の近世墓が検出され、土師器・青白磁・染付・備前焼・東播焼等が出土している。下堀遺跡では、土坑墓・畝跡・溝状遺構の他、多くの柱穴・土坑や近世の可能性が高い炉跡も検出されている。柿木段遺跡では、古代のカマド跡・溝状遺構・古道、中世～近世の溝状遺構・道跡・土坑が検出されている。十三塚遺跡では、古道跡が8条検出され、古道跡から陶磁器片が出土したことから近世以降の可能性が考えられている。

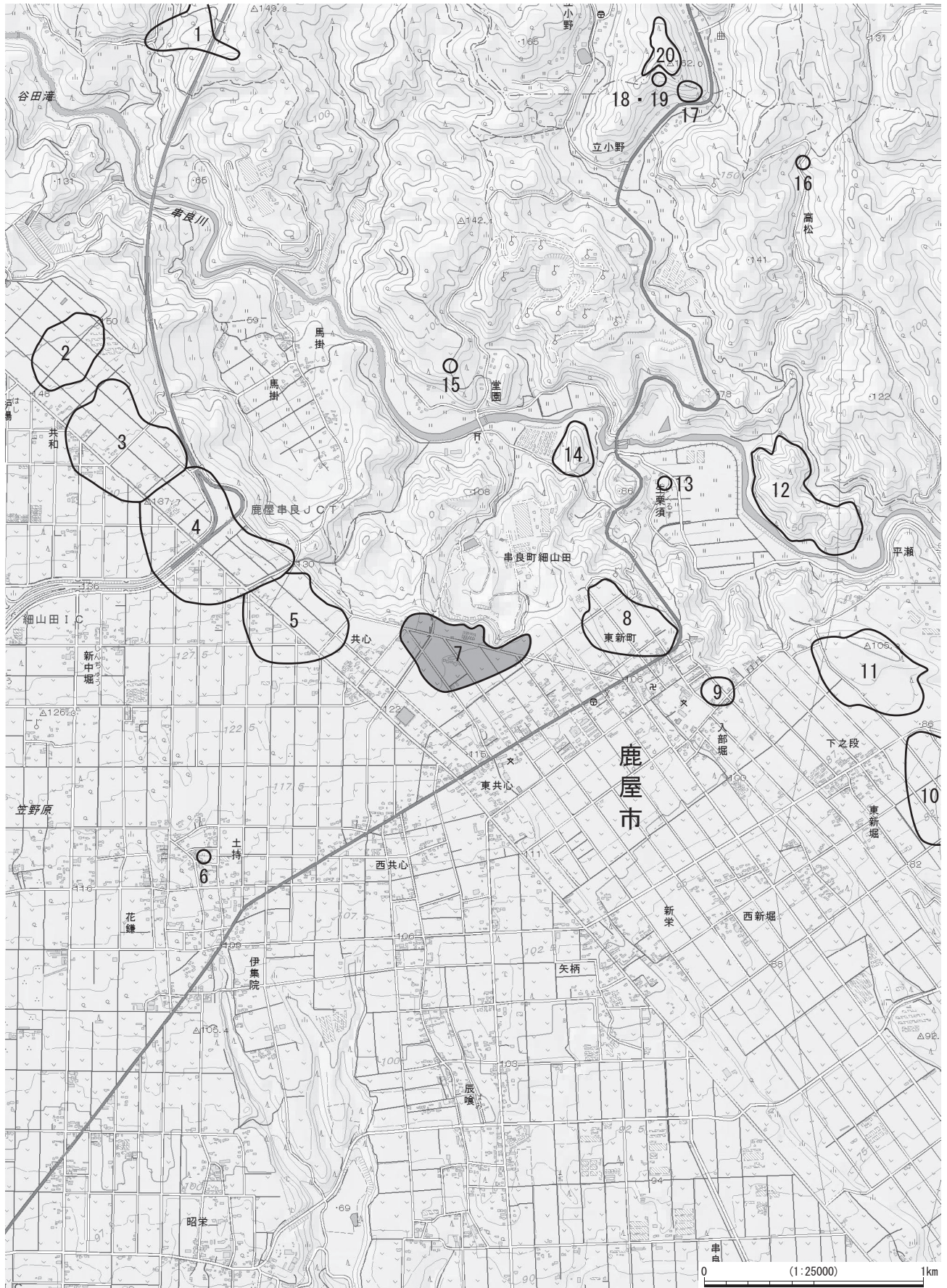
第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	種類	現状	時代	地形	遺構・遺物等	備考
1	樋ノ口Ⅱ	鹿屋市上高隈町	散布地	山林	古墳,古代	丘陵	-	-
2	牧原	鹿屋市串良町細山田	散布地	畑地	弥生,古墳,古代	台地	-	-
3	石縊	鹿屋市串良町細山田	散布地	畑地	弥生,古墳	台地	竪穴住居	H20～本調査
4	十三塚	鹿屋市串良町細山田	散布地	畑地	弥生,古墳	台地	-	H20～本調査
5	立小野堀	鹿屋市串良町細山田	散布地	畑地	弥生,古墳,古代	台地	地下式横穴墓	H22本調査
6	土持堀の深井戸	鹿屋市串良町細山田	包蔵地		近世	台地	深井戸	-
7	田原迫ノ上	鹿屋市串良町細山田	散布地 集落跡	畑地	縄文,弥生	台地	竪穴住居,掘立柱建物,周溝	H22～本調査 本報告書
8	牧山	鹿屋市串良町細山田	散布地	畑地	縄文,弥生,古墳	台地	竊式,埋設土器,石冠	H25～本調査
9	入部堀	鹿屋市串良町細山田	散布地	畑地	弥生,古代	台地	-	-
10	新堀	鹿屋市串良町細山田	散布地	畑地	縄文	台地	-	-
11	町田堀	鹿屋市串良町細山田	散布地	畑地	弥生,古墳	台地	住居跡,製鉄工房跡,掘立柱建物跡	H25～本調査
12	北原城跡	鹿屋市串良町細山田生栗須	城館跡	山林	中世	丘陵	-	-
13	生栗須	鹿屋市串良町細山田生栗須	包蔵地	畑地	弥生	台地	-	-
14	細山田城跡	鹿屋市串良町細山田生栗須	城館跡	山林	中世	丘陵	-	-
15	堂園	鹿屋市串良町細山田生堂園	散布地	畑地	弥生,古墳	台地	-	-
16	高松	鹿屋市串良町細山田高松	散布地	畑地	弥生	台地	-	-
17	立小野	鹿屋市串良町細山田立小野	散布地	畑地	縄文,弥生	台地	-	-
18	立小野A	鹿屋市串良町細山田立小野	散布地	畑地	縄文	台地	-	-
19	立小野B	鹿屋市串良町細山田立小野	散布地	畑地	縄文	台地	-	-
20	遠見ヶ丘	曾於郡大崎町野方立小野・曲迫	散布地	畑地	中世	台地	-	-

参考文献

鹿児島県教育委員会 1997「大隅地区埋蔵文化財分布調査概要」
鹿児島県埋蔵文化財発掘報告書(6)
鹿児島県教育委員会 1992「西尾丸遺跡」 鹿児島県埋蔵文化
財発掘報告書(64)
鹿屋市教育委員会 2008「名主原遺跡」 鹿屋市埋蔵文化財発
掘報告書(84)
始良町教育委員会 2005「中尾遺跡Ⅳ」 始良町埋蔵文化財発
掘報告書(19)
串良町教育委員会 1990「岡崎古墳群」 串良町埋蔵文化財発
掘報告書(3)

串良町教育委員会 2005「益畑遺跡」 串良町埋蔵文化財発掘
報告書(11)
鹿児島県教育委員会 2016「田原迫ノ上遺跡1」 公益財団法人
鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査
報告書(5)
鹿児島県教育委員会 2016「町田堀遺跡」 公益財団法人鹿児
島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書
(7)



第7図 周辺遺跡位置図

第3節 志布志IC～鹿屋串良JCT間の遺跡

東九州自動車道の志布志IC～鹿屋串良JCT間には、第2表に示すとおり23の遺跡が存在する。ここでは調査済み及び調査中の遺跡の概要を記載する。詳細については各報告書等を参照していただきたい。

平成28年3月31日現在

第2表 志布志IC～鹿屋串良JCT間の遺跡

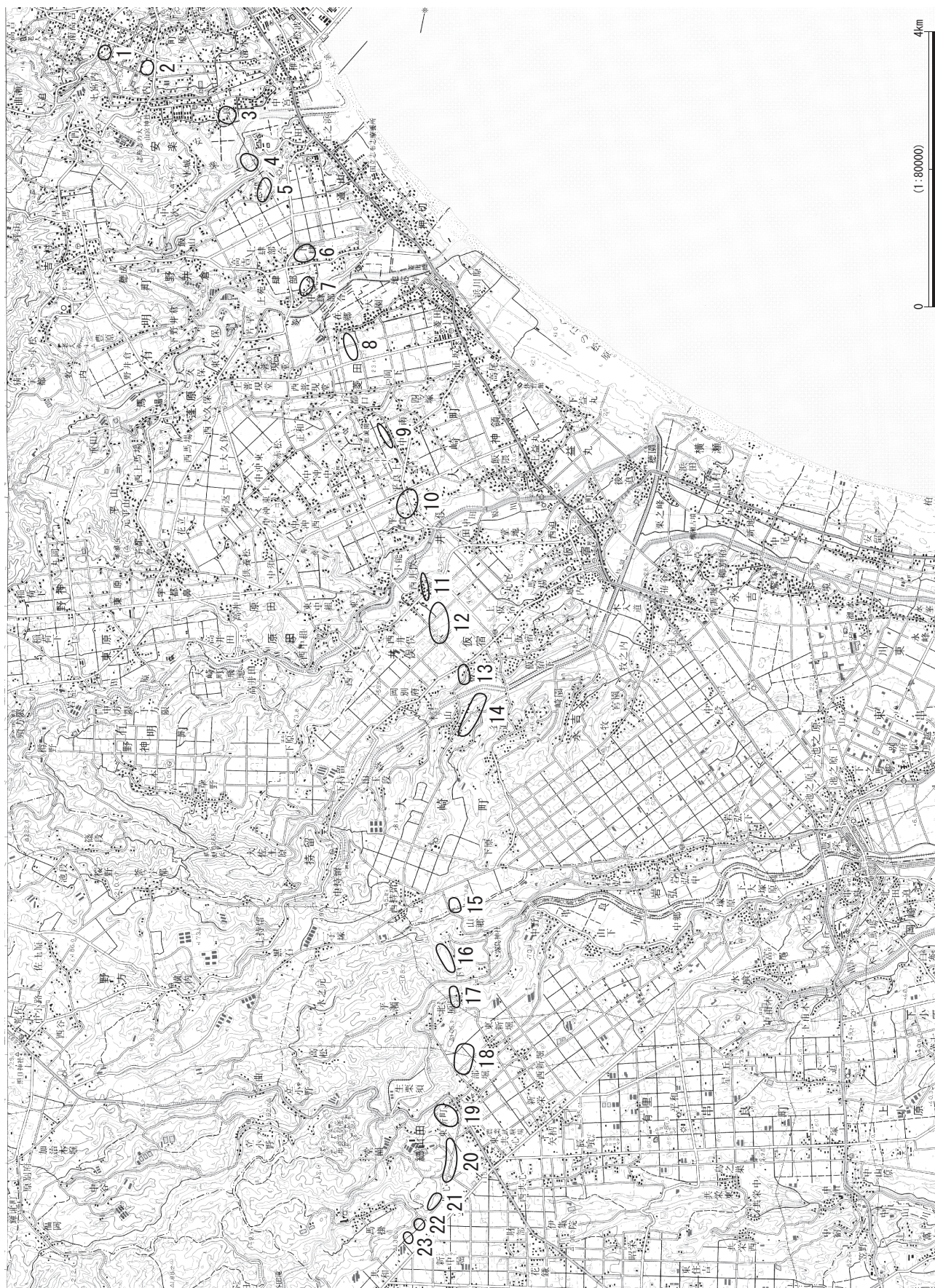
番号	遺跡名	所在地・立地	調査	整理・報告書	遺 跡 の 概 要		
					時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物
1	見 帰	志布志市 志布志町志布志 台地縁辺部 標高約70m	概要は、県立埋セが平成25年度に隣接地を調査した結果で、本線部分は、H28年度以降調査予定である。		旧石器	—	ハンマーストーン、剥片、打面調整剥片
					縄文早期	土坑	石坂式土器、下剥峯式土器、石鏃、磨石、石皿
					縄文前中期	落とし穴、土坑	—
					縄文後晩期	溝状遺構	磨消縄文土器、丸尾式土器、中岳Ⅱ式土器、西平式土器、磨石、敲石
2	宮之上	志布志市志布志町安楽 台地 標高約45m			縄文時代を中心とした遺跡である。旧石器時代は、細石刃文化期に比定される。縄文時代早期の出土遺物は、土器の出土に比べ石器の出土が非常に少ない。前期の落とし穴は2基で、それらの底部には杭跡と考えられる小ピットが7～8つ確認されている。		
					県文化財課の試掘調査により、本路線上には、遺物が無いことが確認されたため、本調査を実施せず。		
3	安良	志布志市志布志町安楽 台地 標高約30m	—	—	H28年度以降調査予定		
4	小牧古墳群	志布志市 志布志町安楽 台地 標高約50m	H27年度～ 調査中	作業中	旧石器	—	細石刃核、細石刃、チップ
					縄文草創期	集石遺構	黒曜石剥片、土器
					縄文早期	集石遺構	前平式土器、石坂式土器、下剥峯式土器、押型文土器、平裾式土器、塞ノ神式土器、耳栓、石鏃、磨石、異形石器
5	次 五	志布志市有明町 野井倉 台地縁辺部 標高約50m	終了	作業中	弥生	—	弥生土器、石包丁
					旧石器	—	蛙原型細石刃核、細石刃、剥片
					縄文早期	落とし穴、連穴土坑、土坑、集石遺構、磨石集積遺構	前平式土器、加栗山式土器、吉田式土器、札ノ元Ⅶ類、石坂式土器、中原Ⅴ式、下剥峯式土器、桑ノ丸式土器、押型文土器、手向山式土器、塞ノ神Ⅲ式土器、打製石鏃、磨製石鏃、石錘、局部磨製石斧、トロトロ石器
6	大 代	志布志市有明町 野井倉 台地縁辺部			縄文時代から縄文時代早期が中心となる遺跡である。調査は志布志市教育委員会によって行われ、旧石器時代は、細石刃文化期に比定される遺物が出土している。縄文時代早期は、早期前葉に該当する遺構や遺物が多く確認され、特に、注目されるのは被熱破砕礫が多量に出土した点である。		
					県文化財課の試掘調査により、本路線上には、遺物が無いことが確認されたため、本調査を実施せず。		
7	木 森	志布志市有明町 野井倉 河岸段丘 標高約30m	H26年度～ 調査中	—	縄文早期	集石遺構	前平式土器、加栗山式土器、吉田式土器、下剥峯式土器、押型文土器、石鏃、石匙、磨石、敲石
					中 世	掘立柱建物跡、ピット	須恵器、土師器、青磁、白磁、滑石製石鍋片、鉄製品、鉄滓
		縄文時代早期と中世を中心とする複合遺跡である。縄文時代早期の集石遺構、中世の掘立柱建物跡等が検出され、縄文時代早期の土器、石器、中世の須恵器、土師器、青磁、白磁、滑石製石鍋片、鉄製品等が出土している。					

番号	遺跡名	所在地・立地	調査	整理・報告書	遺跡の概要	
					時代	主な遺構・主な遺物
8	春日堀	志布志市有明町 遼原 河岸段丘 標高約30m	H26年度～ 調査中	作業中	縄文早期	堅穴住居跡、連穴土坑、集石遺構、土坑、土器集中、落とし穴
					弥生	堅穴住居跡
					古墳	溝状遺構、堅穴住居跡、土坑、棒状礫集積遺構、土器集中
					時期不明	掘立柱建物跡、土坑、ピット
					古代～中世	焼土跡、堅穴建物跡、土坑墓、掘立柱建物跡、柵列、ピット
9	稲荷堀B	曾於郡大崎町菱田 台地 標高約50m			近世	古道、溝状遺構、土坑、遺物集中
						縄文早期から中世を中心とする複合遺跡である。遺構は縄文時代早期の堅穴住居跡・連穴土坑・集石遺構（100基以上）・落とし穴、弥生時代の堅穴住居跡、古代～中世の掘立柱建物跡が検出され、遺物は縄文時代早期の土器・打製石鏃・環状石斧・トロトロ石器・磨石等、縄文時代後期・弥生時代・古墳時代の土器、土師器、陶器、磁器等が出土している。また、鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）も確認されている。
10	平良上C	曾於郡大崎町井俣 台地 標高約50m	終了	作業中	縄文早期	堅穴住居跡、連穴土坑、集石遺構、土坑、土器集中、埋設土器、チップ集中
11	宮脇	井俣 台地 標高約43m	H27年度～ 調査中	—	旧石器	—
					縄文早期 近世～近現代	加栗山式土器、小牧3Aタイプ、下剥峯式土器、桑ノ丸式土器、押型文土器、平椅式土器、塞ノ神式土器、打製石鏃、磨石、チップ、破碎（散在）礫土瓶（薩摩焼）、寛永通宝
12	堂園堀	曾於郡大崎町井俣 台地 標高約45m				石核、円礫、フレーク、チップ
13	荒園	曾於郡大崎町 仮宿	H24年度～	作業中	縄文早期	縄文時代早期を中心とする遺跡である。旧石器時代の遺構は検出されていないが、石器製作過程の所産と思われる石核、フレーク、チップ等が出土している。縄文時代早期の遺構は、集石、土坑、土器集中、ピットが検出されている。遺物は、土器、石器等約10,000点が出土している。近世以降の土瓶（薩摩焼）が出土している。鬼界カルデラ噴火時に2度の大地震により発生した液状化現象を示す噴砂層が見られる。
					弥生中期	畦原型細石核・細石刃・水晶剥片
					古墳	前平式土器、吉田式土器、加栗山式土器、下剥峯式土器、押型文土器、手向山式土器、平椅式土器、塞ノ神式土器、苦浜式土器、条痕文土器、壺形土器、石鏃、スクレイパー、石匙、耳栓、打製石斧、磨製石斧、磨石、石皿、フレーク、チップ
					古代以前	吉ヶ崎式土器、山ノ口式土器、磨製石鏃未製品、砥石
						東原式土器、笹貫式土器、須恵器、砥石

番号	遺跡名	所在地・立地	調査	整理・報告書	遺跡の概要		
					時代	主な遺構	主な遺物
13	荒園	台地縁辺部 標高約50m	調査中	作業中	中世	掘立柱建物跡、土坑、溝状遺構、 帯状硬化面、ピット	土師器（Ⅲ）、東播系須恵器、陶器、青磁、華南三彩
		縄文時代早期から古墳時代を 中心とする複合遺跡である。 遺構は縄文時代早期の土器、石器、 弥生時代・古墳時代の土器、土師器、 陶器、磁器等が出土している。 また、鬼界カルデラ噴火に伴う 液状化現象（噴砂跡）も確認			近世以降	帯状硬化面	薩摩焼
14	永吉天神段	曾於郡大崎町 永吉	終了	埋文調査セ (8) 第一地点編 2016.3刊行 作業中	旧石器	ブロック、礫群	尖頭器、ナイフ形石器、台形石器、剥片
		台地縁辺部 標高約50m 及び			縄文早期	集石遺構、埋設土器	前平式土器、吉田式土器、加栗山式土器、手向山式土器、下剥峯式土器、押型 文土器、平椅式土器、塞ノ神式土器、苦浜式土器、条痕文土器、石鏃、石匙、 打製石斧、磨製石斧、磨石、敲石、石皿、フレーク、チップ
		河岸段丘 標高約30m			縄文後期	—	北久根山式土器、中岳Ⅱ式土器
					縄文晩期	堅穴住居跡、落とし穴、土坑	入佐式土器・黒川式土器、刻目突帯文土器、管玉、打製石斧
					弥生	堅穴住居跡、円形周溝墓土坑墓 群、掘立柱建物跡、土坑	入来式土器・山ノ口式土器、鉄鏃、磨製石鏃、管玉
					古墳	堅穴住居跡、土坑	成川式土器、須恵器
					古代	掘立柱建物跡、土坑	須恵器、土師器
15	京の塚	曾於郡大崎町 西持留 台地縁辺部 標高約95m	終了	作業中	中世	掘立柱建物跡、土坑墓、地下式坑、 火葬土坑、土坑	白磁、青磁、土師器、瓦質土器、東播系須恵器、備前焼、常滑焼、湖州六花鏡、砥石、石塔、古 銭
					近世	近世墓	薩摩焼、染付、寛永通宝、石臼
					縄文早期	集石遺構	石坂式土器、下剥峯式土器、中原式土器、押型文土器、塞ノ神式土器、打製石 鏃、石核
16	小牧	鹿屋市串良町 細山田	H27年度～	作業中	縄文前期～ 中期初頭	土坑、土器集中	曾畑式土器、深浦式土器、鷹島式土器、船元式土器、打製石 鏃、石匙、石錐、スクレイパー、二次加工剥片、磨石、敲石、石皿、石核、フ レーク
					近世以降	溝状遺構、古道	—
16	小牧	鹿屋市串良町 細山田	H27年度～	作業中	縄文時代早期から中期初頭、近世以降の複合遺跡で、縄文時代前期から中期初頭が中心となる遺跡である。200基を超える縄文時代中期の土坑が検出されている。また、在地 系土器の深浦式土器だけでなく、近畿地方の大蔵山式土器や鷹島式土器・瀬戸内地方の船元式土器などが出土しており、他地域との交流をうかがい知ることができる。	旧石器	細石刃、フレーク、チップ
					縄文早期	堅穴住居跡、連穴土坑、土坑、集石 遺構	前平式土器、吉田式土器、下剥峯式土器、桑ノ丸式土器、平椅式土器、条痕文 系土器、石匙、磨石、石皿
					縄文前期	—	曾畑式土器、深浦式土器、磨石
					縄文後期	堅穴住居跡、伏襲、打製石斧、集積 遺構、集石、土坑、土器集中	指宿式土器、市来式土器、凹線文系土器、石鏃、横刃型石器、打製石斧、磨 石、石皿
					縄文晩期	—	入佐式土器、黒川式土器、刻目突帯文土器
16	小牧	鹿屋市串良町 細山田	H27年度～	作業中	弥生中期	—	入来式土器、山ノ口式土器、砥石

番号	遺跡名	所在地・立地	調査	整理・報告書	遺跡の概要	
					時代	主な遺構 主な遺物
16	小牧	台地 標高約60m	調査中	作業中	古墳	東原式～辻堂原式、布留系土器、須恵器、鉄鏃、鉄製品、敲石、勾玉、軽石加工品
					古代	土師器（甕・坏）、須恵器短頸壺
					中世以降	土師器（坏）、白磁、青磁、石鍋、甗の羽口
17	川久保	旧石器時代から中世までの複合遺跡である。本遺跡は、各時期における集落跡と考えられ、周辺の遺跡を含めて串良川沿岸での人間活動の変遷を継続的に追うことができる遺跡である。 鹿屋市串良町 細山田 河岸段丘及び 台地 標高約30～50m	H26年度～ 調査中	作業中	縄文早期	集石遺構、土坑
					縄文前期	集石遺構
					縄文晩期	集石遺構
					弥生中期	堅穴住居跡
					古墳	堅穴住居跡、鍛冶関連建物跡、堅穴状遺構、古道跡
					古代	掘立柱建物跡
					中世	掘立柱建物跡、古道跡、溝状遺構
18	町田堀	旧石器時代から中世までの複合遺跡である。特に、古墳時代では、集落を構成する多数の堅穴建物跡が検出されている。これらの遺構の中には、鍛冶関連遺構を伴うものや専用の甗の羽口が出土している。古墳時代の鉄製品の生産過程を明らかにする良好な資料である。 鹿屋市串良町 細山田 台地縁辺部 標高約90m	H25年度～ 調査中	埋文調査セ (7) 2016.3刊行	縄文早期	集石遺構
					縄文後期	堅穴住居跡、埋設土器、落とし穴、土坑、石斧集積遺構
					縄文晩期	—
					弥生中期	堅穴住居跡
					古墳	地下式横穴墓、円形周溝墓、溝状遺構
					古代	焼土跡、古道
					縄文時代後期では、堅穴建物跡から竪原文を施す完全な石刀が出土している。また、古墳時代では、88基の地下式横穴墓が報告されている。地下式横穴墓では初めて、円形周溝を伴う例が確認されている。	
19	牧山	鹿屋市串良町 細山田 台地縁辺部 標高約110m	H25年度～ 調査中	作業中	旧石器	剥片
					縄文早期	吉田式土器、石坂式土器、下剥峯式土器、辻タイプ、桑ノ丸式土器、押型文土器、石鏃、石匙、スクレイパー、磨石、剥片、チップ、被熱破砕礫
					縄文前期	縄式土器、条痕文土器
					縄文後期	市来式土器、西平式土器、丸尾式土器、太田迫式土器、三万田式土器、中岳Ⅱ式、打製石斧、磨製石斧、磨石、剥片、石核、台石、石冠、被熱破砕礫
					縄文晩期	入佐式土器、突帯文土器
					弥生中期	山ノ口式土器、打製石斧、磨製石斧、打製石鏃、磨石、敲石、石皿、青銅鑿

番号	遺跡名	所在地・立地	調査	整理・報告書	遺跡の概要		
					時代	主な遺構	主な遺物
19	牧山	旧石器時代～中世にかけての複合遺跡である。中でも、縄文時代後期の掘立柱建物跡と考えられる柱穴群（径約30cm・深さ約40cmの柱穴300～400個）が環状で確認されており注目される。また、埋設土器や祭祀用とみられる石冠も出土している。			中・近世	古道跡	青磁、白磁、薩摩焼
20	田原追ノ上	鹿屋市串良町 細山田 台地縁辺部 標高約120m	H22年度～ 調査中	縄文前期以降編 埋文調査セ (5) 2016.3刊行 作業中	縄文早期	堅穴住居跡、落とし穴、連穴土坑、土坑、集石遺構、石器製作跡	前平式土器、吉田式土器、倉園B式土器、石坂式土器、下剥峯式土器、辻タイプ、桑ノ丸式土器、中原式土器、押型文土器、手向山式土器、平格式土器、塞ノ神式土器、石槍、磨製石鏃、打製石鏃、石匙、砥石、石皿、磨石、敲石
					縄文前期	—	曽畑式土器
					縄文後期	—	指宿式土器、市来式土器
					縄文晩期	—	黒川式土器
					弥生中期	堅穴住居跡、掘立柱建物跡、円形周溝、方形周溝、土坑、柱穴列	山ノ口式土器、擬凹線文系壺、樹皮布敲石、磨製石鏃、砥石、石匙、磨石、敲石、台石、土製勾玉、土製加工品
21	立小野堀	縄文時代早期～弥生時代中期を中心とした複合遺跡である。特に古墳時代の地下式横穴墓が、多量の土器・須恵器・鉄剣等の鉄器・青銅製鈴・人骨等を伴い190基発見された。これだけ多くの副葬品を伴った地下式横穴墓の発見は、地中九州の古墳時代の様相を解明していく上で貴重な資料となる。	H22年度～ 調査中	作業中	縄文前・中期	—	深浦式土器
					縄文後期	—	指宿式土器、西平式土器、市来式土器
					弥生中期	—	山ノ口式土器
					古墳	地下式横穴墓、土坑墓、溝状遺構	成川式土器、須恵器、人骨、鉄器（刀・剣・槍・刀子・鏃等）、青銅鈴
					時期不詳	溝状遺構	
22	十三塚	縄文時代前期から古墳時代までの複合遺跡である。特に古墳時代の地下式横穴墓の発見は、地中九州の古墳時代の様相を解明していく上で貴重な資料となる。	終了	埋七報告書 (164) 2011.3刊行	縄文早期	—	石坂式土器
		鹿屋市串良町 細山田 台地 標高約140m			縄文後期	—	凹線文土器、市来式土器
					縄文晩期	—	黒川式土器、三万田式土器
					弥生中期	堅穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑	山ノ口式土器、土製勾玉、磨製・打製石鏃、棒状敲具、鉄鏃
					古墳時代	—	成川式土器
23	石縊	縄文時代早期及び弥生時代中期の複合遺跡である。鎌石橋式土器が1個体と轟A式が2個体出土し、同時期に存在した可能性も考えられる。	終了	埋七報告書 (164) 2011.3刊行	中世～近世	道路状遺構	加治木銭
		鹿屋市串良町 細山田 台地 標高約140m			縄文早期	集石遺構、土坑	岩本式土器、前平式土器、志風頭式土器、石坂式土器、平格式土器、貝殻条痕文土器、打製石鏃、磨石、敲石
					弥生中期	—	山ノ口式土器、須玖式



第8図 志布志IC～鹿屋串良JCT間の遺跡位置図

第3章 調査の方法と層序

第1節 調査の方法

本節では、発掘調査の方法、遺構の認定と検出方法、整理報告書作成作業について簡潔に述べる。

1 発掘調査の方法

田原迫ノ上遺跡の発掘調査は、平成22～平成26年度まで5年間に渡り実施した。現道部分は未調査であるが、平成28年度以降の調査を予定している。調査対象表面積は31,289㎡、調査対象延面積は62,389㎡である。

調査区割りは、高速道路建設予定地のセンター杭STANo.181とSTANo.182を基準にして、1グリッド10m×10mの大きさで設定を行った。グリッドは、その2点を結ぶ直線を東西方向の基準線とし、センター杭STANo.181と直行する直線を南北方向の基準線とした。その上で、センター杭STANo.181と直行する直線を軸として東に向けて10m間隔に1, 2, 3, …と番号を付した。また、センター杭STANo.181から南に30mが、高速道路予定地南端を含む場所であったことから、この地点を南北方向の基準として北側に向けて10m間隔にA, B, C, …とアルファベットを付し、A-1区などと呼称することとした。

なお1区より西側は、発掘調査中で新たに広がった範囲のため、1区より西側は、100, 99, 98, …として、96区まで設定した。

発掘調査は、基本的に重機で表土を除去した後、確認調査の結果に基づき、遺物包含層については人力で掘り下げを行い、遺物取り上げや遺構の検出を行った。無遺物層については、重機を用いて慎重に掘り下げを行った。遺構については、それぞれの遺構の特徴に適した道具（移植ごて・お玉・スプーン・竹べら等）を用いて慎重に調査を行った。また、遺構の実測や写真撮影を適宜行った。遺物は、平板実測またはトータルステーションで取り上げを行った。

なお、調査区の壁際を中心に幅1m程の先行トレンチを設定し先に人力で掘り下げること、地形や各層の把握に努めた。また、遺構の範囲確認やシミ状痕跡には、ミニトレンチを設定するなどして、上面での把握に努めた。

地形測量は、薩摩火山灰（XIII層）上面で、平板測量及びトータルステーションを用いて実施した。

竪穴住居跡については、中央に十字の土層観察用ベルトを残し掘り下げを行い、完掘後には立ち割りを行ったものもある。

落とし穴については、半裁し、土層断面等を確認するため立ち割りをを行い、完掘した。

連穴土坑については、半裁し土層断面等の実測後に完掘し、立ち割りをを行い、底面以下の状況の確認を行った。

土坑については、半裁し完掘を行った。

集石遺構については、検出時の礫を平面・見通し断面2面で実測した後、礫を取り上げ掘り込みの有無の精査を行った。

石器製作跡については、チップ等の出土状況に応じて、周辺を手鎌で精査し、出土状況を把握した。

薩摩火山灰（XIII層）以下については、年度毎・調査区毎に下層の調査を行った。結果、H-48区においてのみ1点石核が出土し、範囲を広げ調査を行ったが、他の遺構・遺物が確認されなかったことから、無遺物層とした。

2 遺構の認定と検出方法

(1) 遺構の認定

検出面、埋土状況、規模等を総合的に判断し、担当職員や民間調査組織担当者で検討したうえで遺構の認定を行った。本編掲載の遺構の認定は、以下のとおりである。

ア 竪穴住居跡・土坑

形状、規模、埋土、壁の立ち上がり状況や床面（底面）の状況などで総合的に判断した結果、21軒を竪穴住居、104基を土坑と認定した。

イ 落とし穴

形状、深さ、埋土、杭跡の有無などで総合的に判断した結果、9基を落とし穴と認定した。

ウ 連穴土坑

大小二つの土坑が地中（トンネル）でつながれたものを一基の連穴土坑とした。また、明確なトンネルはないが、ブリッジ部分が崩落・崩壊した痕跡の見られるものも連穴土坑とした。結果、40基を連穴土坑と認定した。

エ 集石遺構・石器製作跡

周辺の遺物出土状況や礫碎片やチップ等の広がり、範囲を総合的に判断した結果、192基を集石遺構、5基を石器製作跡と認定した。

(2) 遺構の検出方法

鹿児島県内における縄文時代早期の遺物包含層は、アカホヤ火山灰（VIII層）と薩摩火山灰（XIII層）に挟まれている。本遺跡も同様である。その二層の間の土壌は黒く、色調の判断が困難であるが、遺構の有無を判別しやすいのが薩摩火山灰層上面である。そこで、各年度とも共通して、当時の掘り込み面に限りなく近い位置（上層）での検出に努めた。その方法の一つとして、面的に鋤簾等での精査を繰り返したり、パミスの集中が見られる箇所にミニトレンチを設定したりして判断した。それでも、集石以外の遺構の多くは、薩摩火山灰層上面まで掘り下げないと検出できなかった。

3 整理作業・報告書作成作業の方法

平成26年度は、田原迫ノ上遺跡の弥生時代のための整理作業・報告書作成作業を行っているため、ここでは記載しない。

平成24年度

平成22・23年度の発掘調査成果品の整理を行った。図面整理は、遺構実測図、土層断面図等に仕分けし、台帳や遺物との照合を行った。

水洗いは、未洗い遺物や発掘現場で行った水洗いが不十分な遺物について行った。その際、遺物に付着している重要な情報を除去することがないように洗い、細石刃等微細な剥片石器については、超音波洗浄機を使用した。

注記は、水洗い終了後、順次行った。注記は、田原迫ノ上遺跡出土遺物である確認のため、「田」を頭に、包含層から出土した遺物には続けて「区」・「層」を記入した。さらに、点上げにより取り上げた遺物には「取り上げ番号」を、一括で取り上げた遺物には、「一括」を併せて記入した。また、遺構内遺物については、「区」・「層」に続けて「遺構名称」を記入した。なお、小破片や器面の摩滅が著しいものについては注記を省略した。

分類・接合は、遺構内遺物と包含層遺物に分けた後、包含層出土土器については、土器の胎土や文様等で分類し、さらにグリッドごとに分けた後接合を行い、その後エリアを広げて接合する方法をとった。石器については、剥片石器と礫石器に分けた後、作業の効率化を図るため、予算の範囲内で石器実測委託を行った。

一部の遺構については、原稿執筆も行った。

平成25年度

前年度の整理作業に加え、平成25年度本遺跡の発掘現場整理作業所で、水洗い・注記・一部接合の作業を全点実施した。また本年度は、発掘調査支援業務委託において、現場で遺構図面のデジタルトレース等も行った。

平成26年度

平成26年度本遺跡の発掘現場整理作業所で、水洗い・注記・一部接合の作業を全点実施した。

平成27年度

「整理作業及び報告書作成作業支援業務委託」で行った。

土器の接合、台帳類の再整理、遺構図面作成、土器・石器実測、拓本等である。接合後は、文様や胎土、器形等で分類し、実測する土器片の個体抽出を行った。土器・石器実測のトレースはデジタルで行い、土器の内外面の文様等は、拓本で採取した。遺構図面のトレース、コンター図作成もデジタルである。

平成28年度

前年同様、「整理作業及び報告書作成作業支援業務委託」で行った。27年度の方法に準じて、未実測分の土器・石器の実測・トレース、遺構図作成の作業を行っ

た。また、黒曜石の産地推定分析、レイアウト、写真撮影、原稿執筆を行った。

第2節 層序

田原迫ノ上遺跡の基本土層及び遺物・遺構の年代を把握する手掛かりの一つとなる火山灰等の詳細については、以下のとおりである。

I 層：旧耕作土や盛土で、表土とした。

II 層：黒褐色土の無遺物層で、部分残存である。

III 層：黒色系の色調をもつ層である。色調の違いで4層に細分した。

IIIa 層：茶褐色土で、弥生時代の遺物包含層である。

IIIb 層：茶褐色土で、IIIa 層より若干明るく、開聞岳噴出の火山灰を含む、弥生時代の遺物包含層である。

IIIc 層：黒褐色土で、弥生時代の遺物包含層である。

IIId 層：茶褐色土で、開聞岳噴出の火山灰（灰ゴラ）を含む、弥生時代の遺物包含層である。

IV 層：黒色系の色調をもつ層である。色調の違いで2層に細分した。

IVa 層：赤黒色土で、白色・黄色粒を含む。

IVb 層：黒褐色土で、黄色パミスを若干含む。

V 層：茶褐色土で、縄文時代前期遺物包含層であるが、部分残存である。

VI 層：茶褐色土で、池田湖起源（約6,400年前）の火山灰層で軽石を含む。

VII 層：暗茶褐色土である。

VIII 層：明橙褐色土で、鬼界カルデラ起源（約7,300年前）の噴出物を含むアカホヤ火山灰層である。堆積物の違いで2層に細分した。

VIIIa 層：明橙褐色土で、アカホヤ火山灰一次の軽石が点在するアカホヤ二次堆積層である。

VIIIb 層：明橙褐色土で、アカホヤ一次の軽石層である。

IX 層：黒褐色土で、多少粘質を帯びている。縄文時代早期後葉の包含層である。

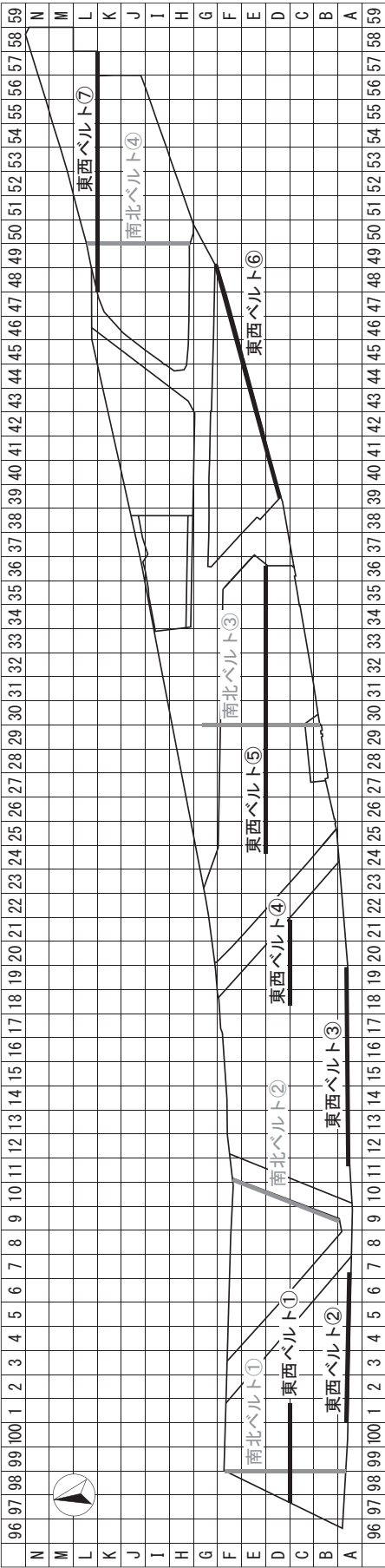
X 層：黒褐色土で、黄橙パミスを含む。縄文時代早期後葉の包含層である。

XI 層：暗茶褐色土で、黄橙色パミスを含む。縄文時代早期中葉の包含層である。

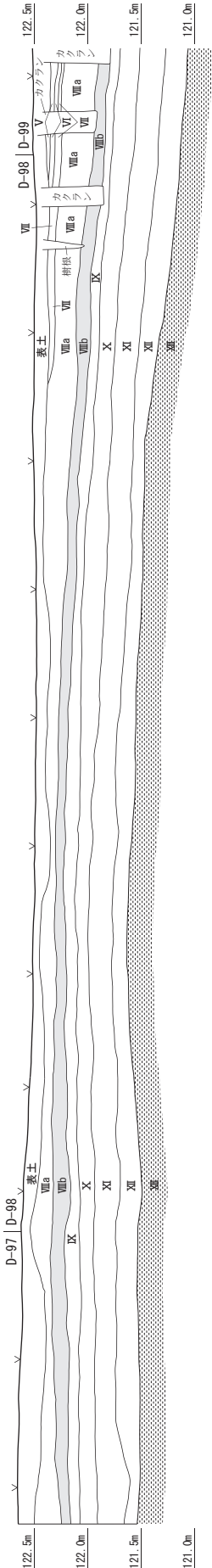
XII 層：暗茶褐色土で、黄橙色パミスを含むが、XI 層よりは、パミスは少ない。縄文時代早期前葉～中葉の包含層である。

XIII 層：黄白色で、桜島起源（P 14：約12,800年前）の薩摩火山灰である。

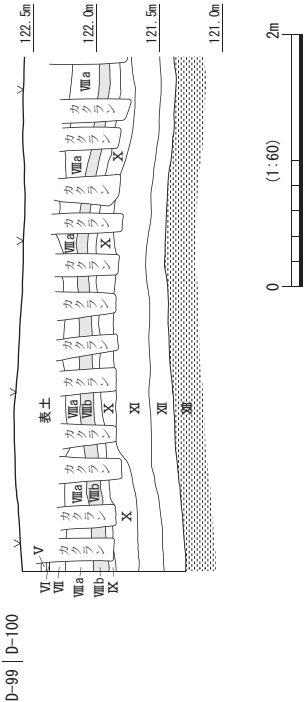
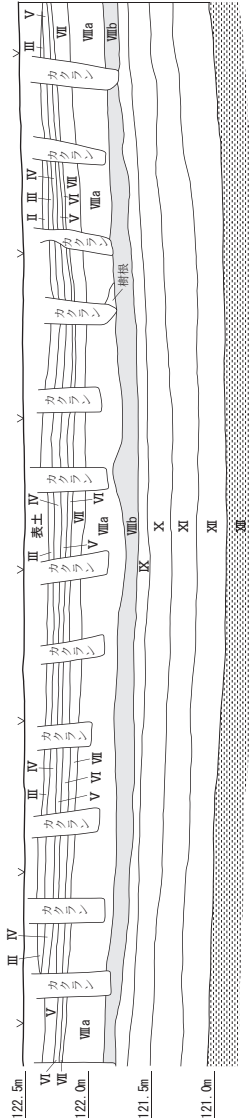
XIV 層：にぶい赤褐色で、粘質性が強く、「チョコ層」と言われる層である。



東西ベルト①

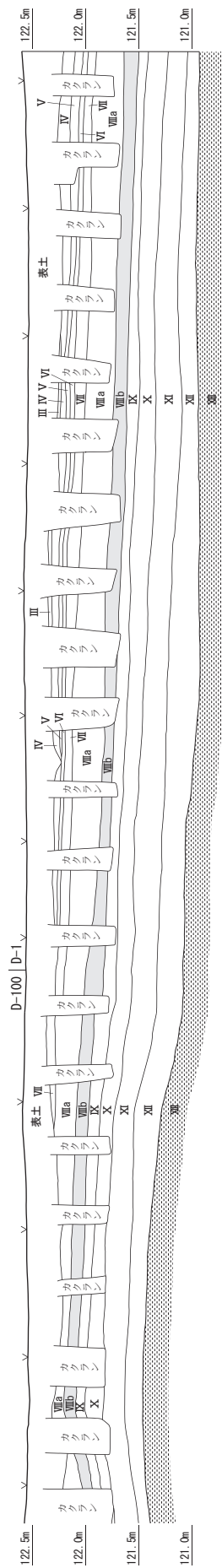


東西ベルト①

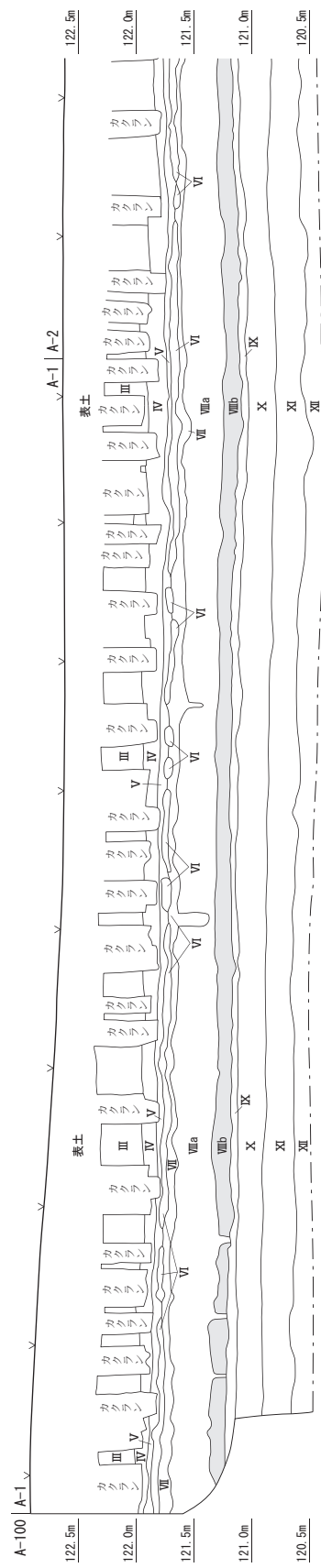


第9図 土層断面 1

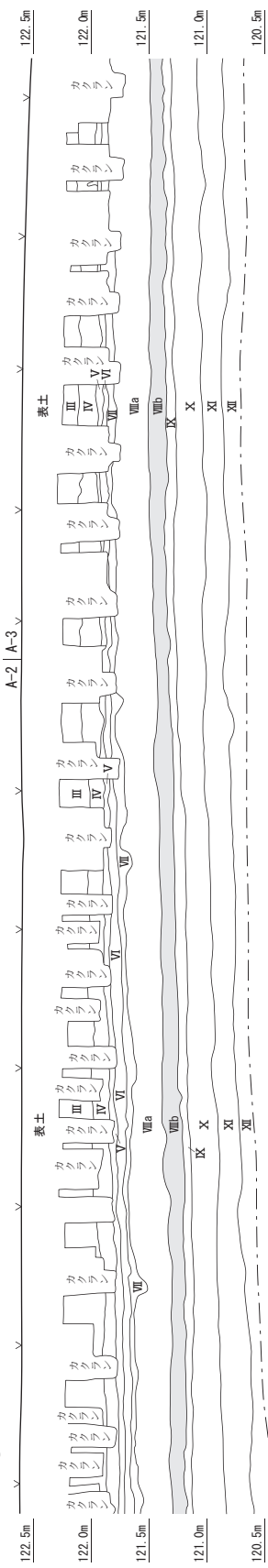
東西ベルト①



東西ベルト②



東西ベルト③

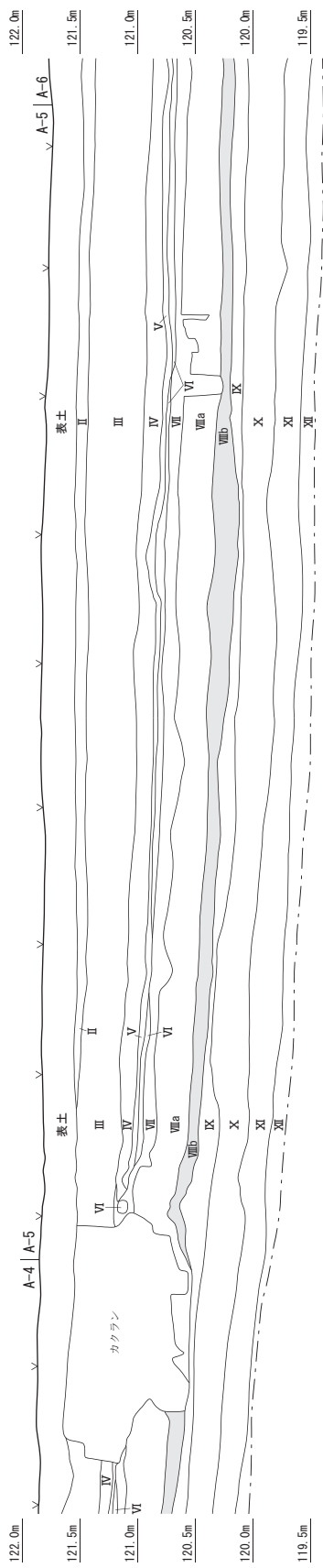


第10図 土層断面 2

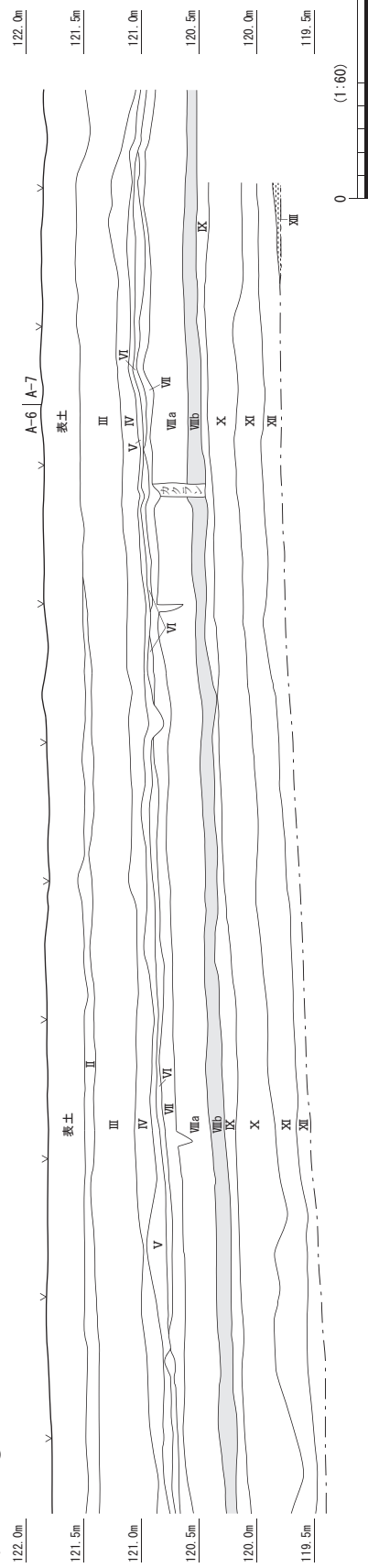
東西ベルト②



東西ベルト②

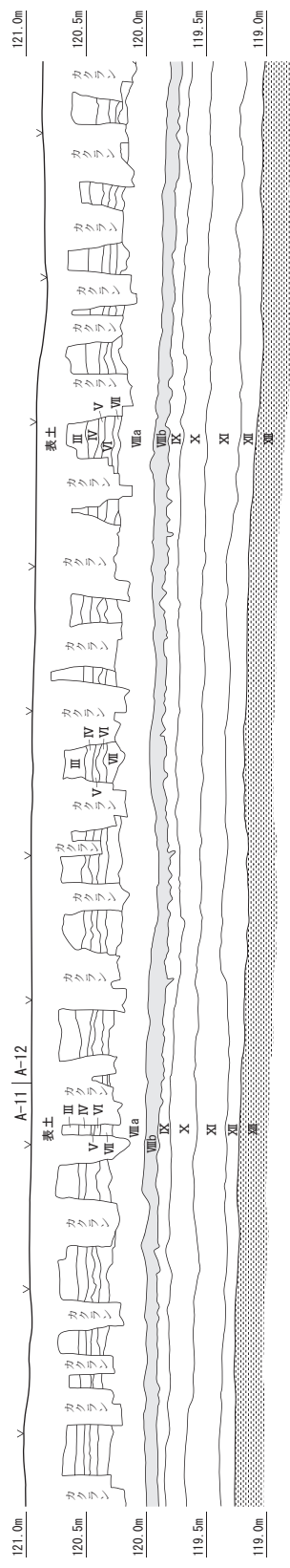


東西ベルト②

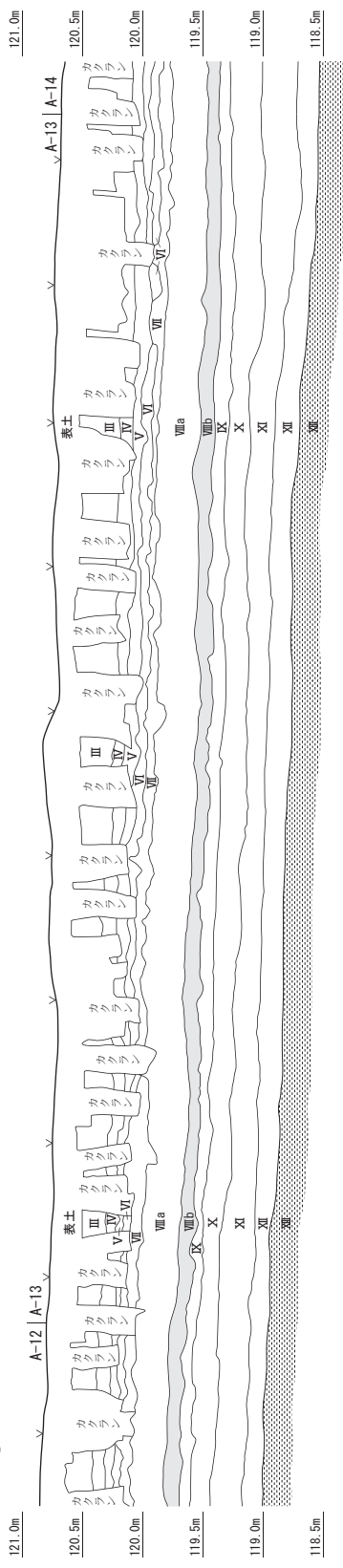


第11図 土層断面3

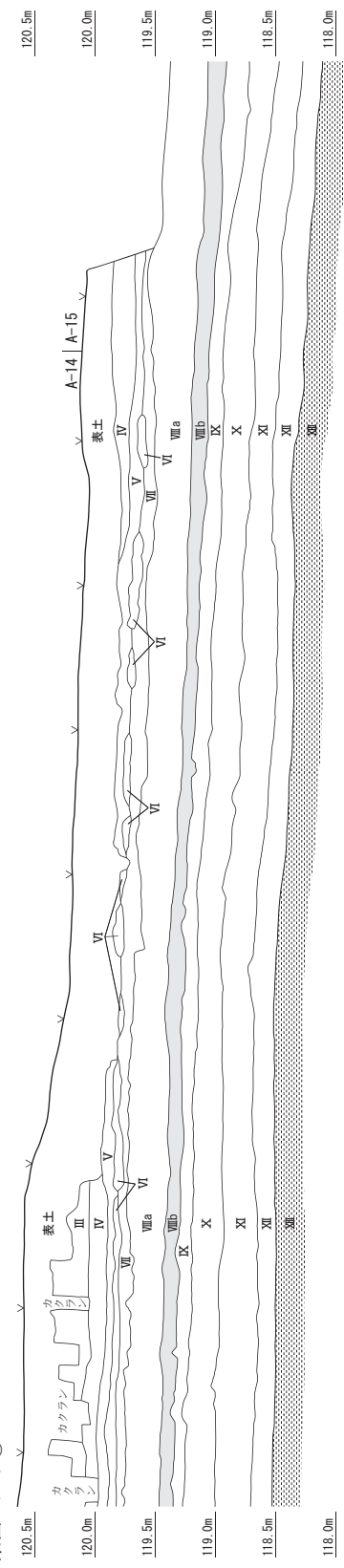
東西ベルト③



東西ベルト③

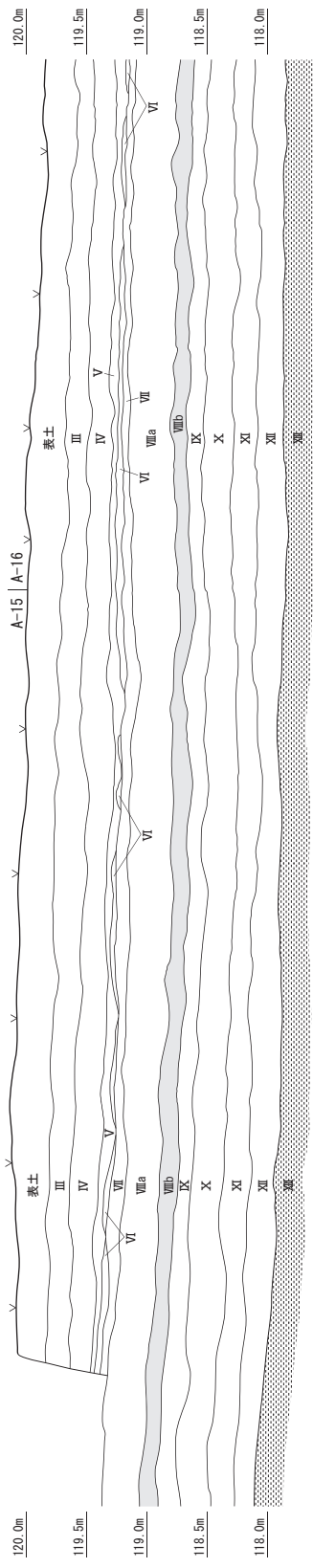


東西ベルト③

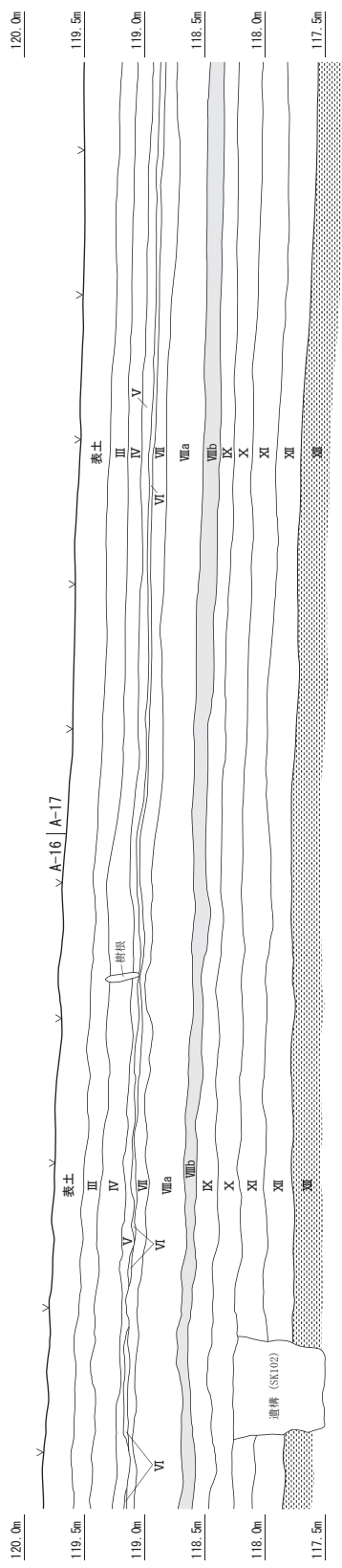


第12図 土層断面 4

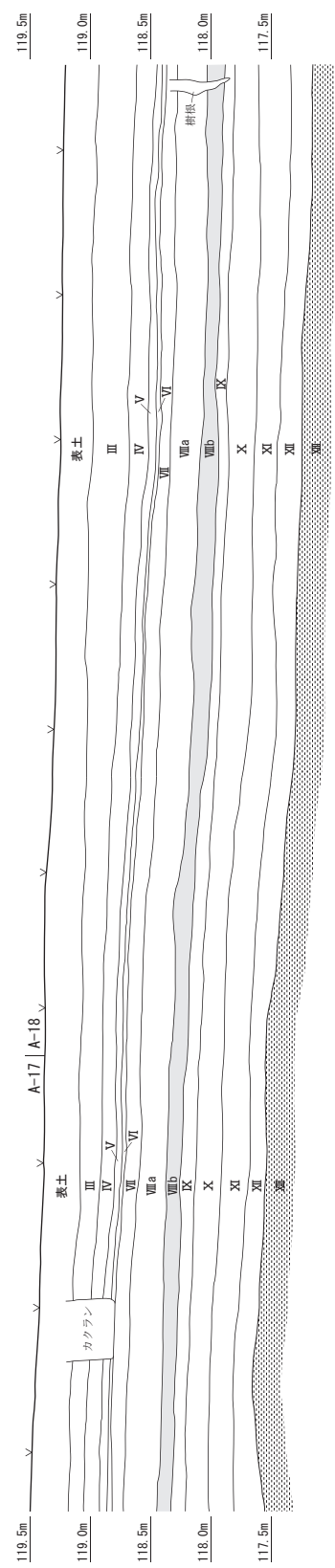
東西ベルト③



東西ベルト③

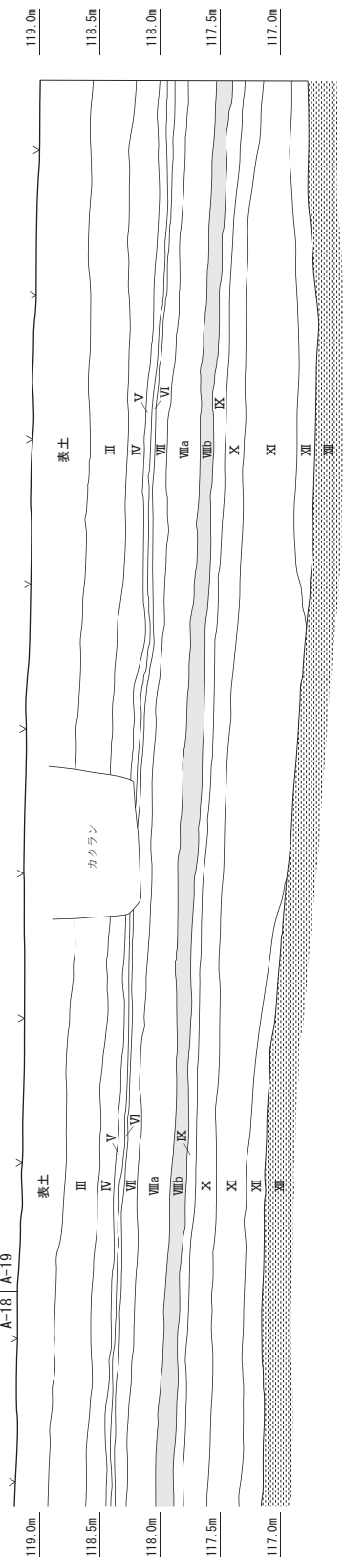


東西ベルト③

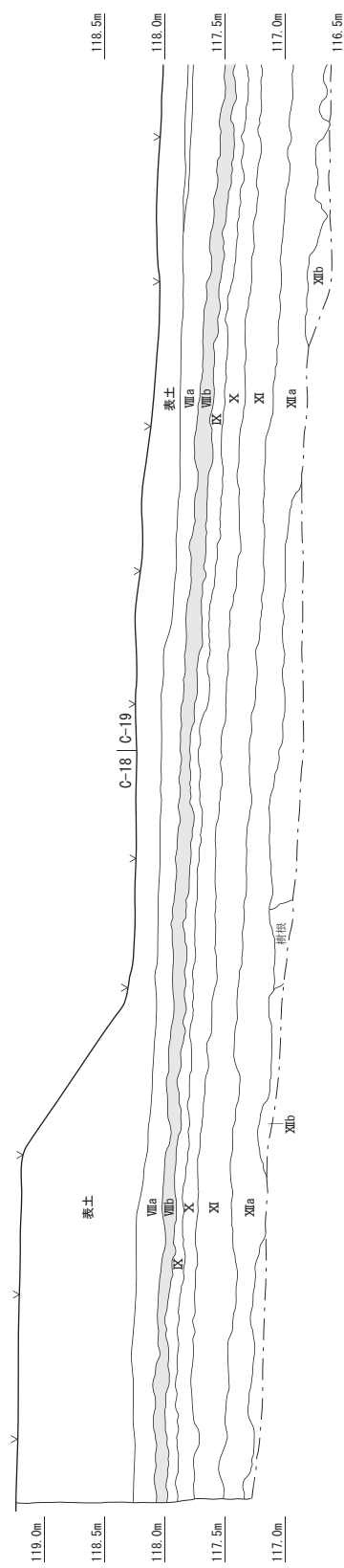


第13図 土層断面 5

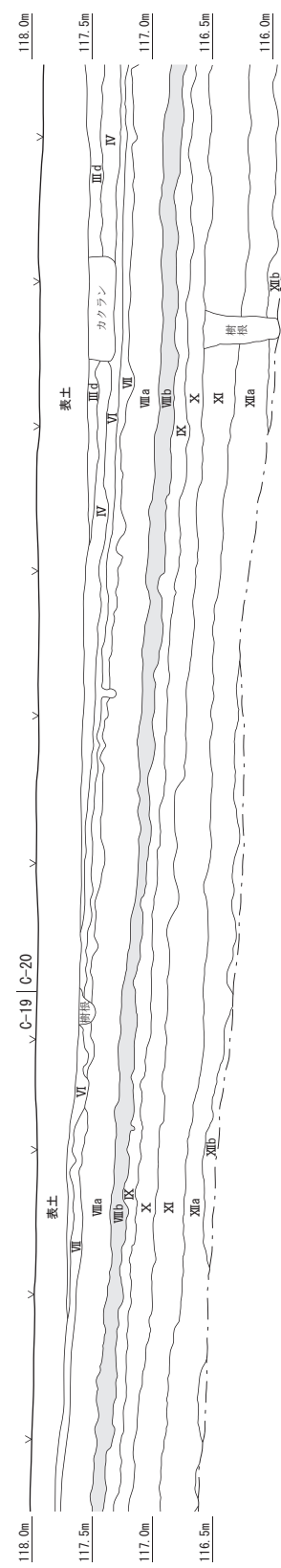
東西ベルト③



東西ベルト④

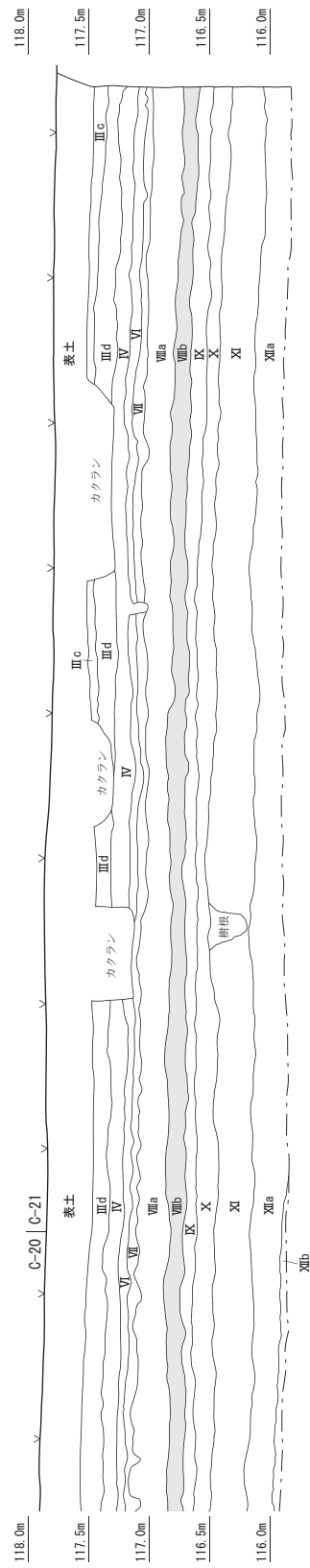


東西ベルト④

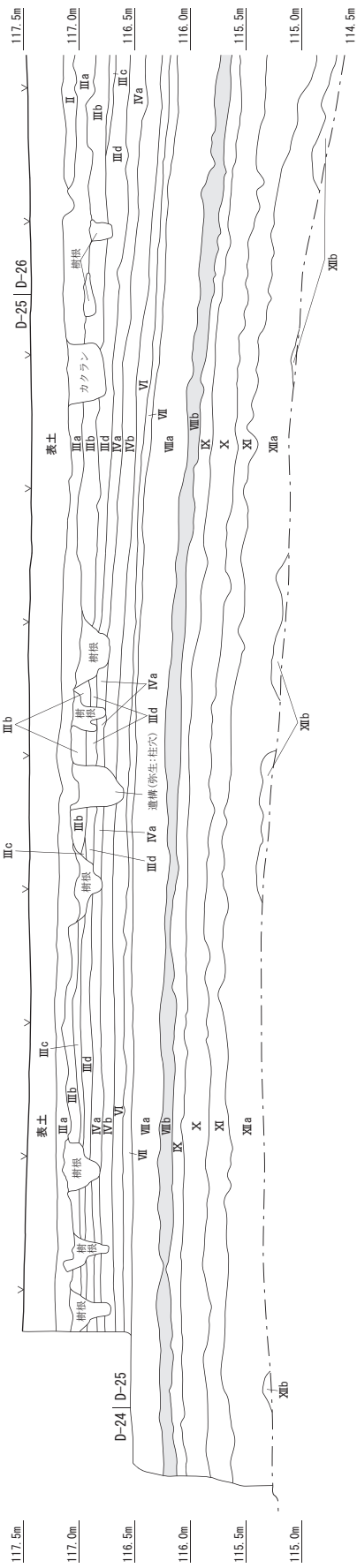


第14図 土層断面 6

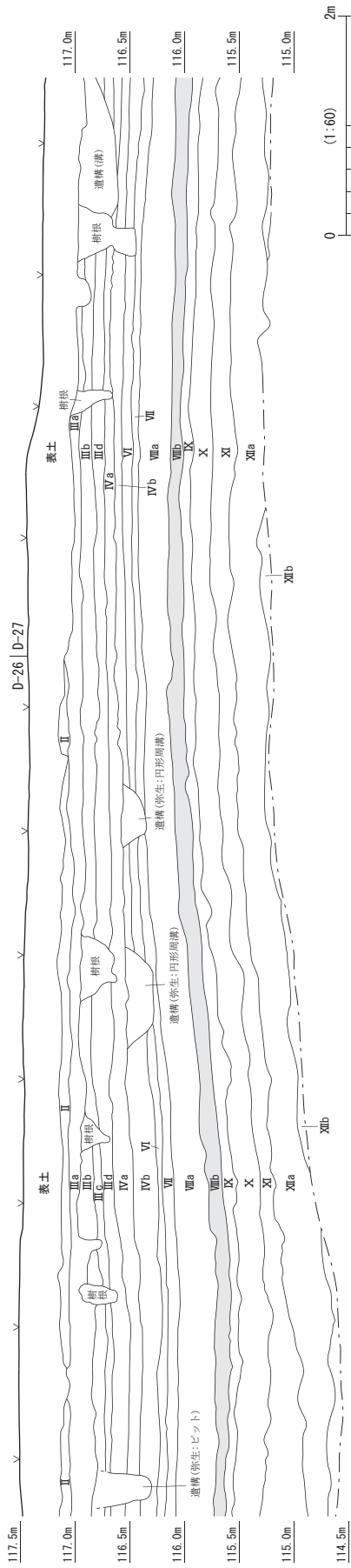
東西ベルト④



東西ベルト⑤

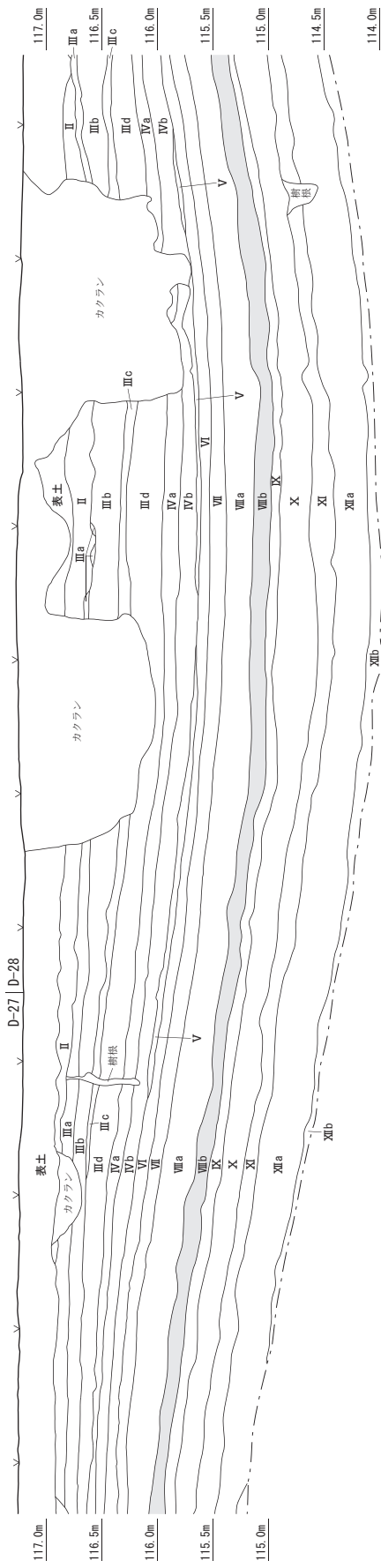


東西ベルト⑥

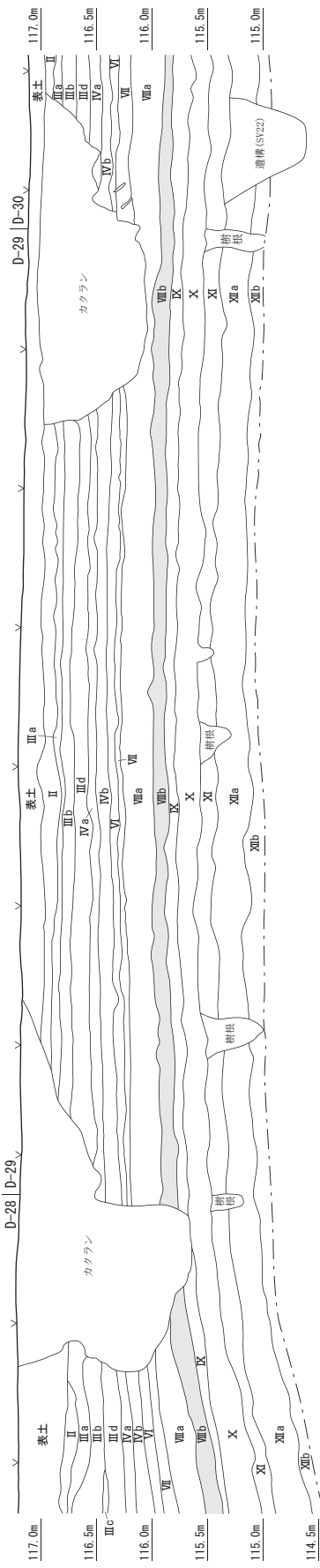


第15図 土層断面 7

東西ベルト⑤

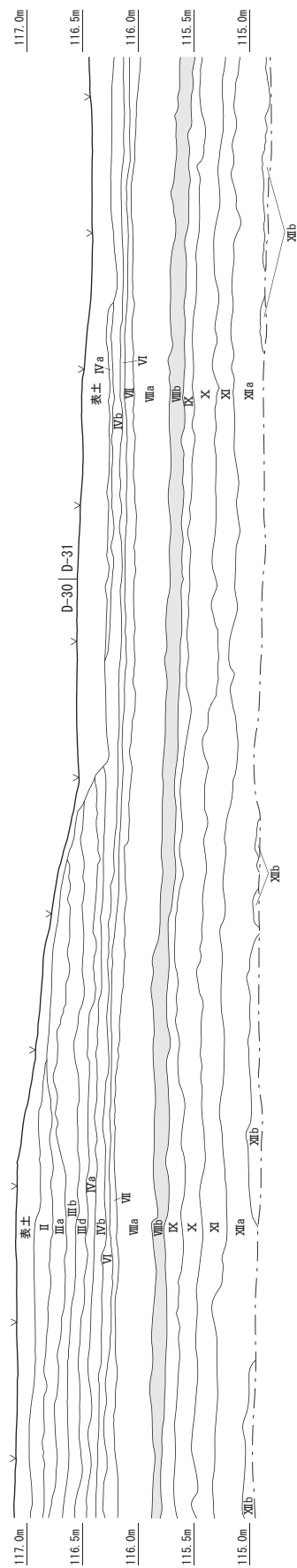


東西ベルト⑤

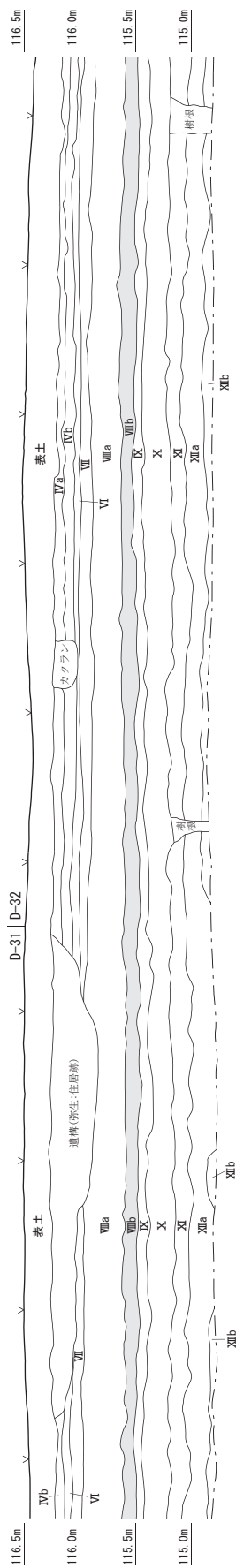


第16図 土層断面 8

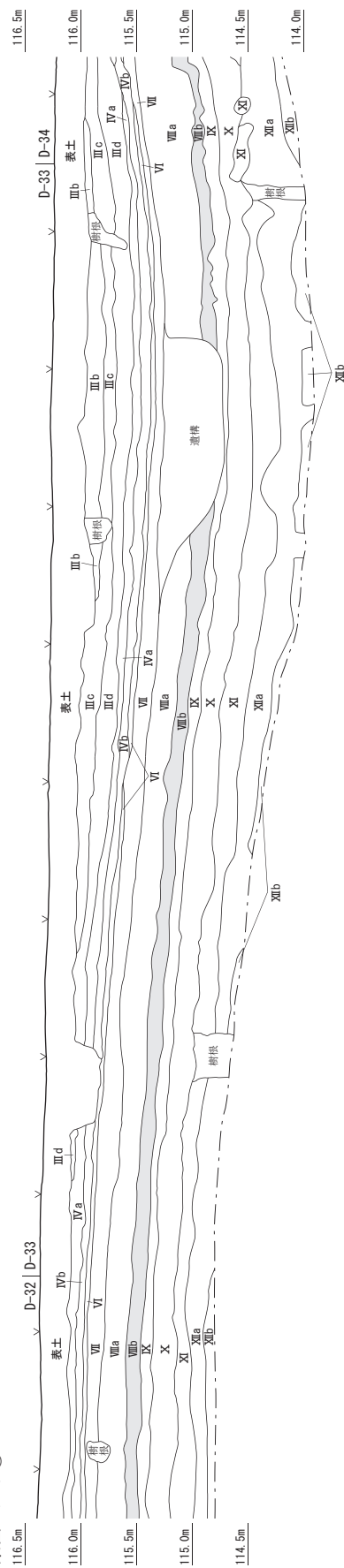
東西ベルト⑤



東西ベルト⑤

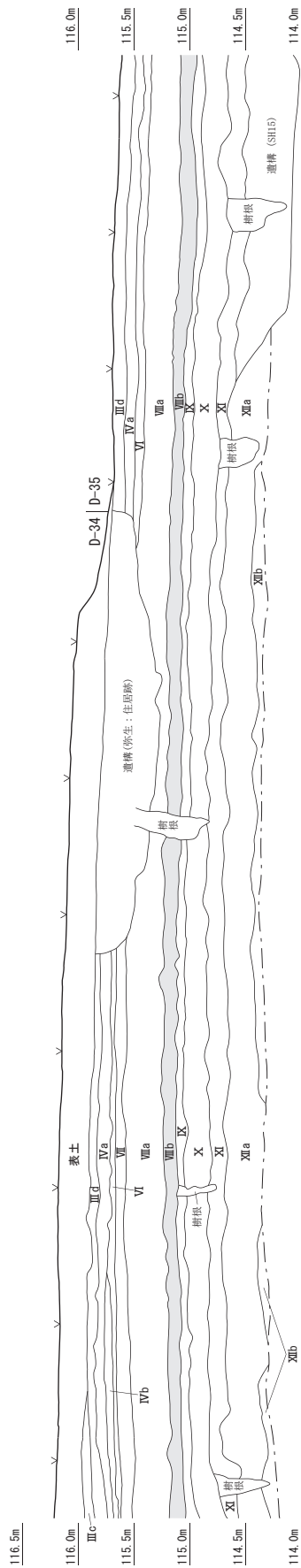


東西ベルト⑤

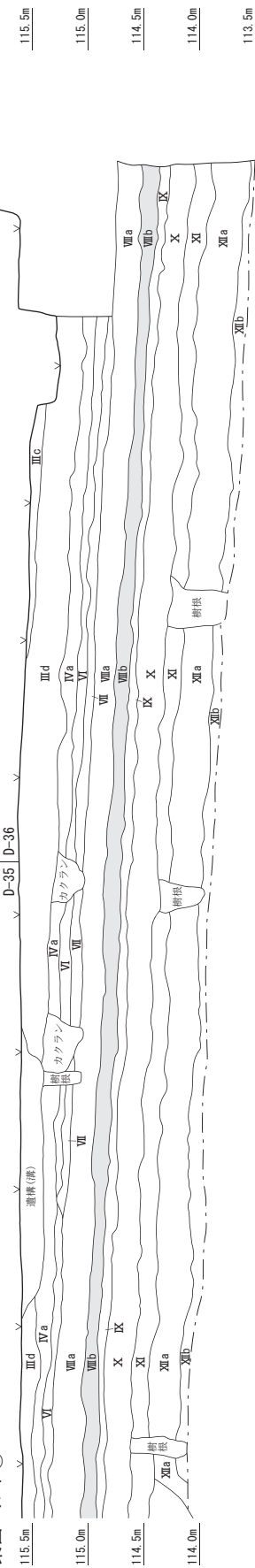


第17図 土層断面9

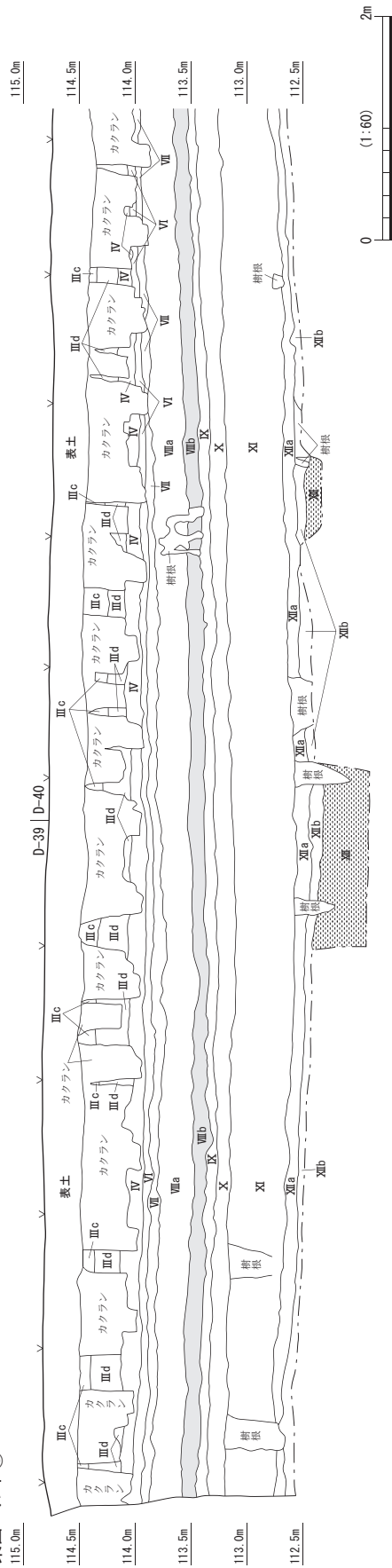
東西ベルト⑤



東西ベルト⑤

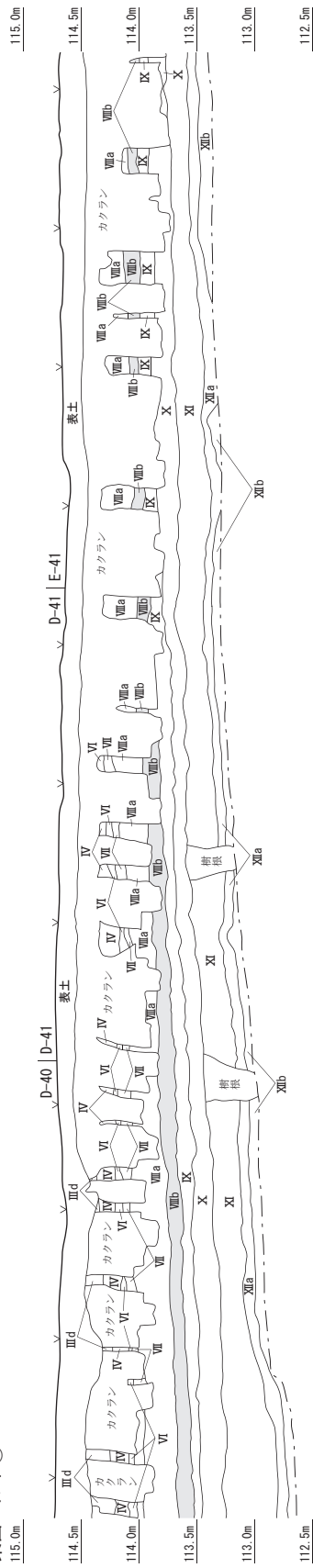


東西ベルト⑥

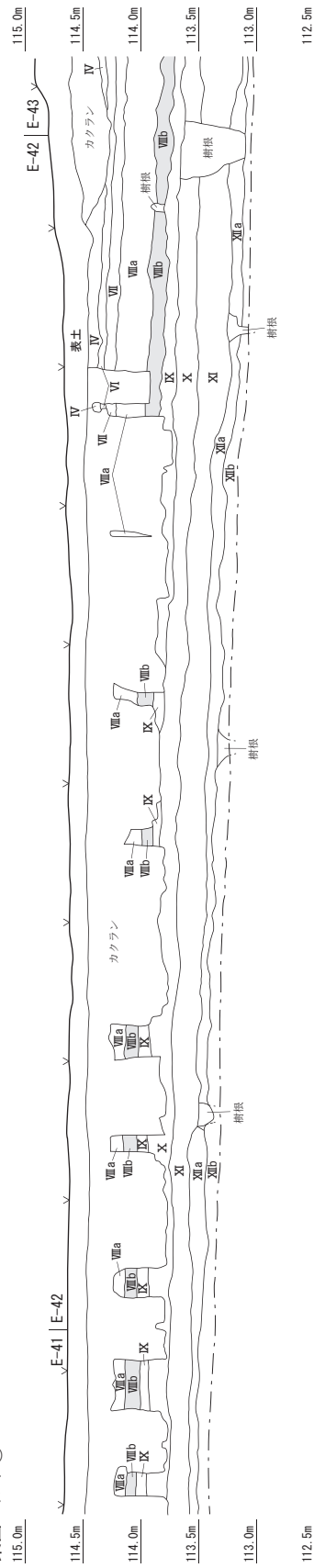


第18図 土層断面10

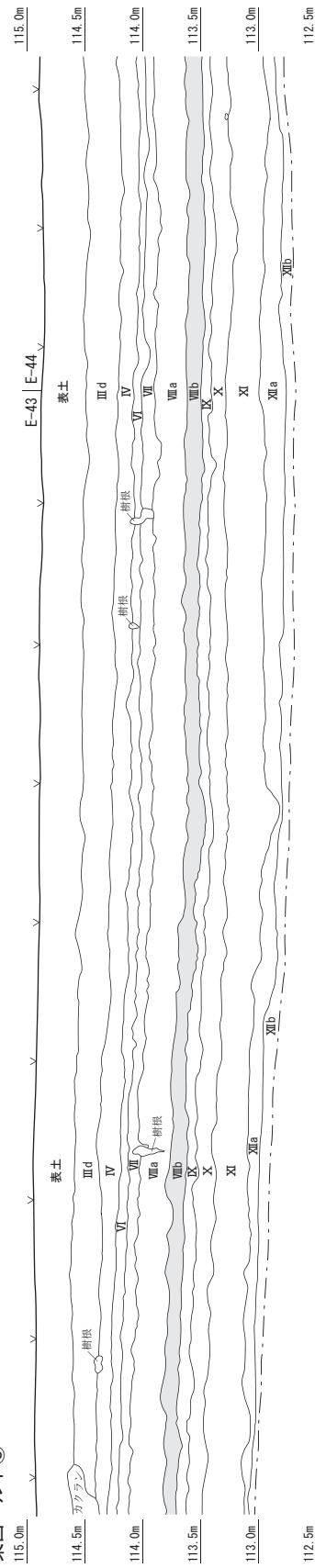
東西ベルト⑥



東西ベルト⑥

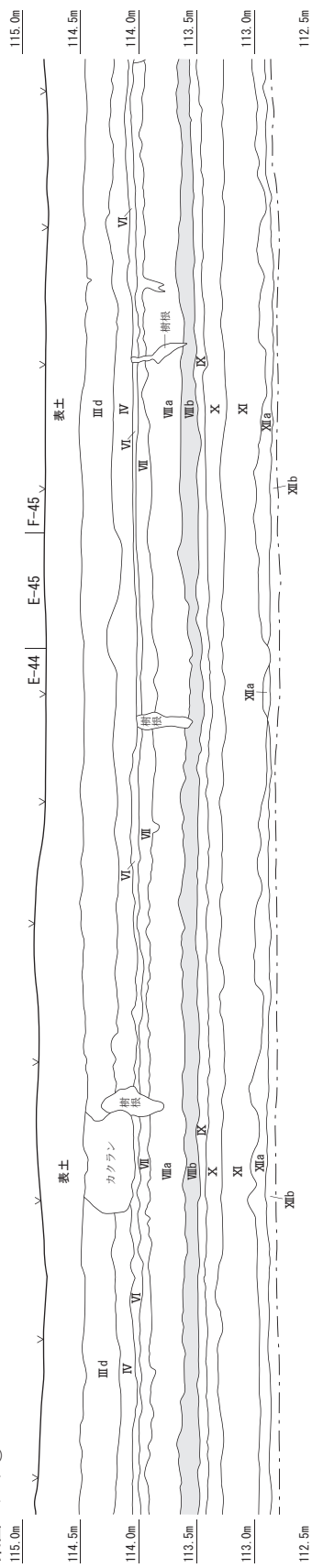


東西ベルト⑥

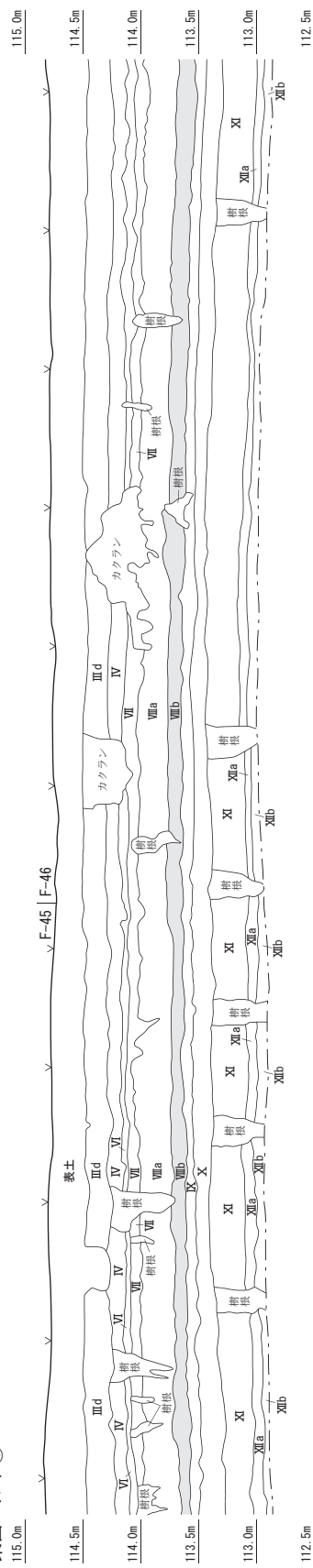


第19図 土層断面11

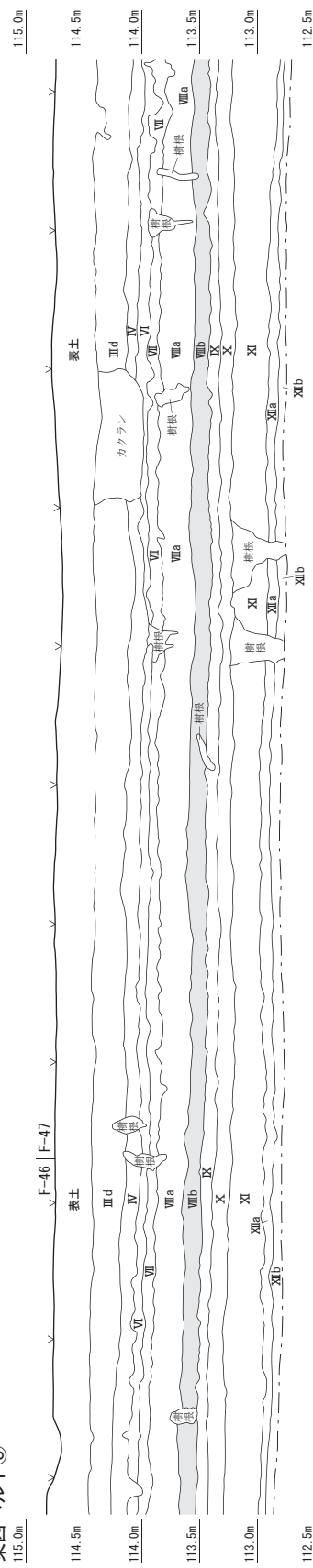
東西ベルト⑥



東西ベルト⑥

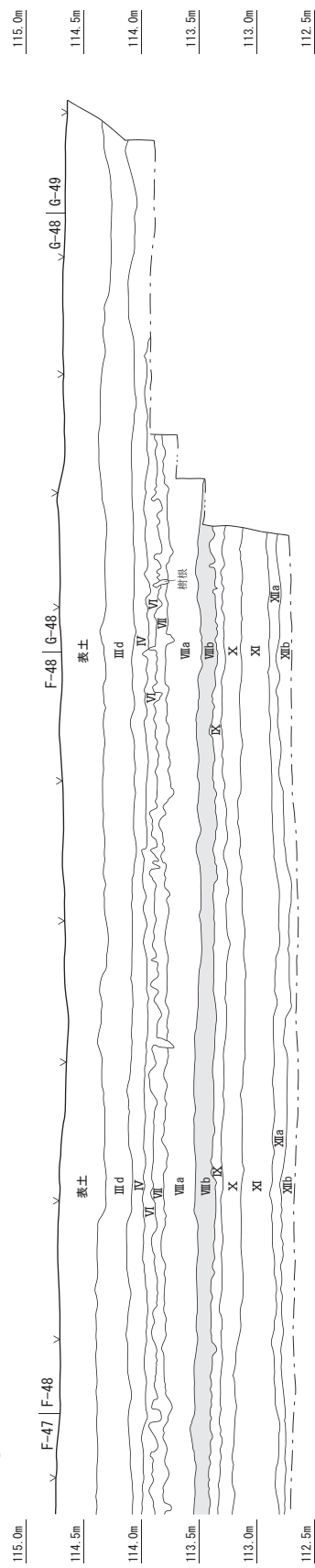


東西ベルト⑥

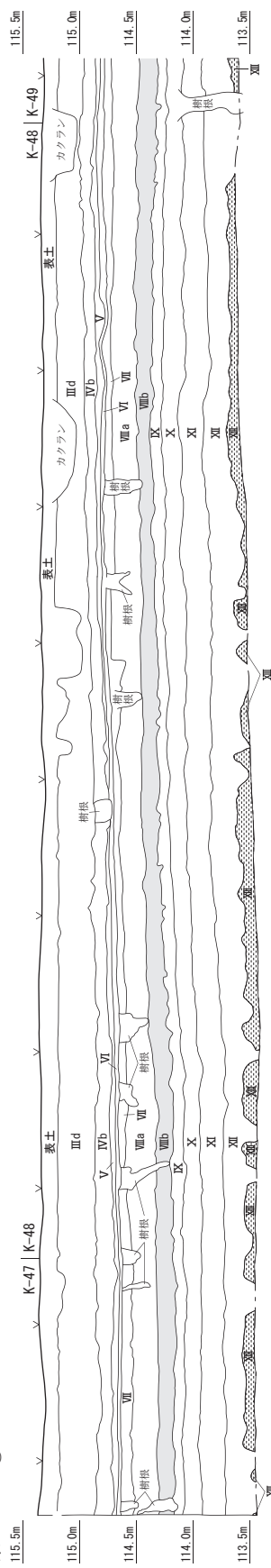


第20図 土層断面12

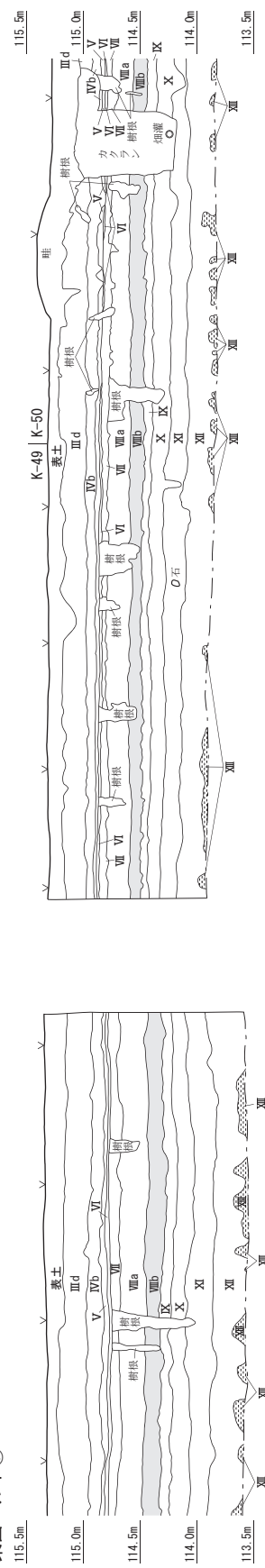
東西ベルト⑥



東西ベルト⑦

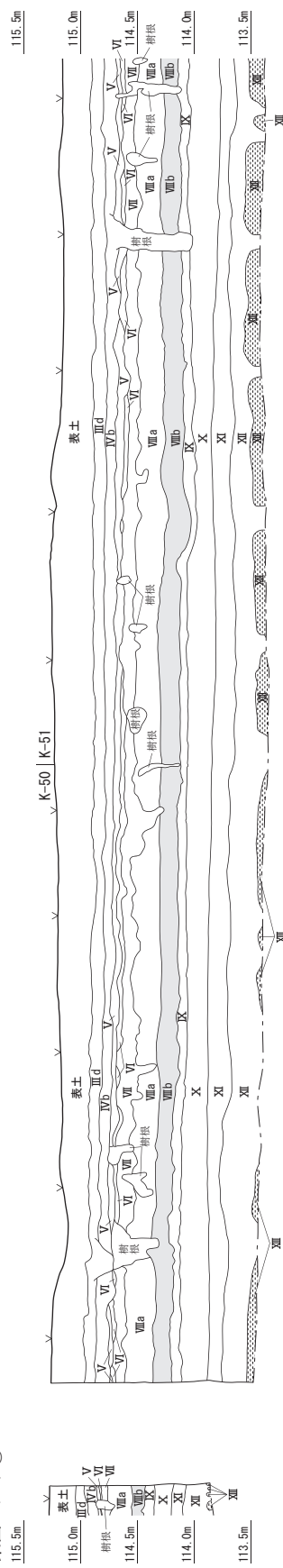


東西ベルト⑦

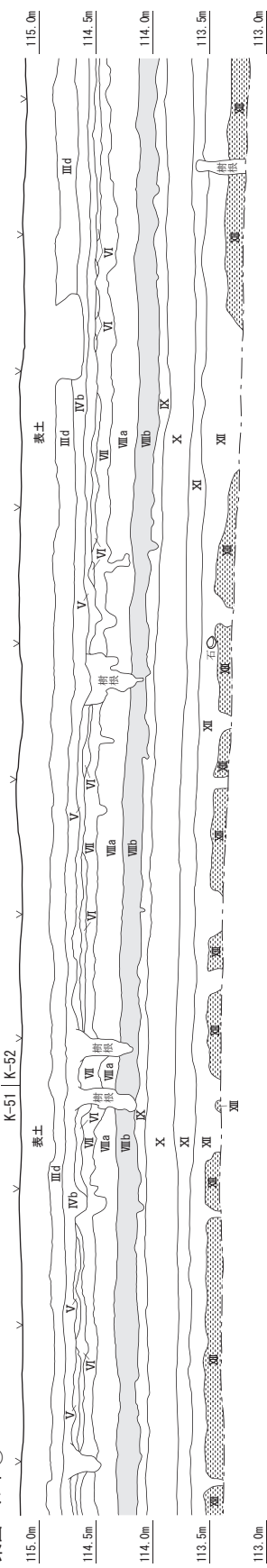


第21図 土層断面13

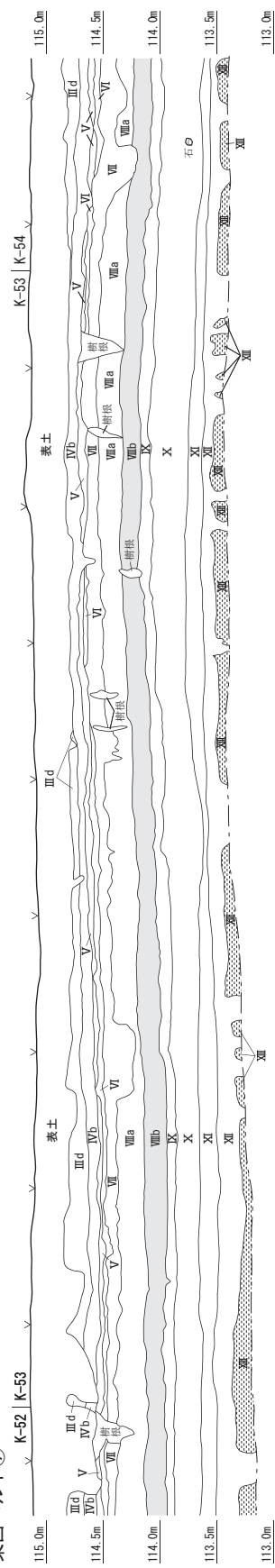
東西ベルト⑦



東西ベルト⑦

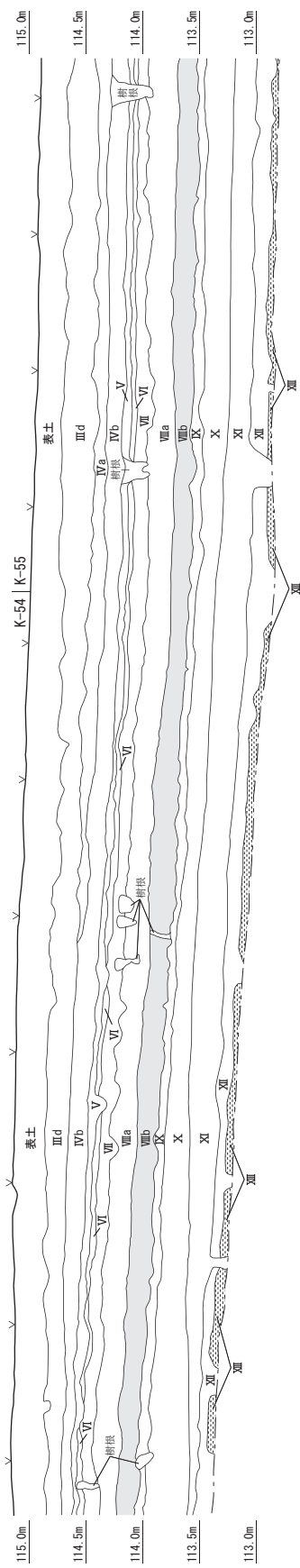


東西ベルト⑦

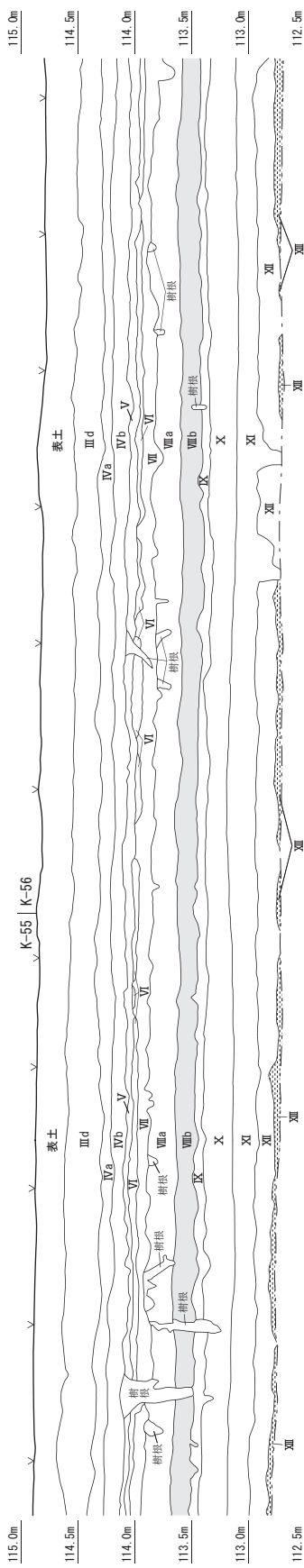


第22図 土層断面14

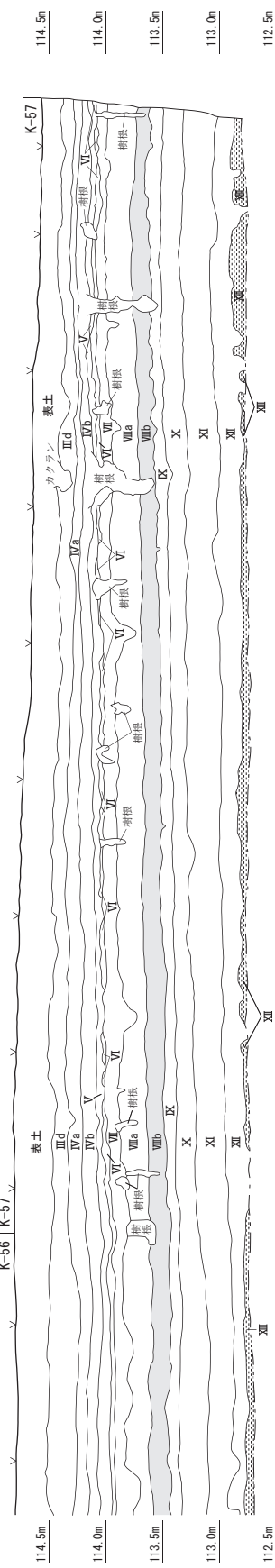
東西ベルト⑦



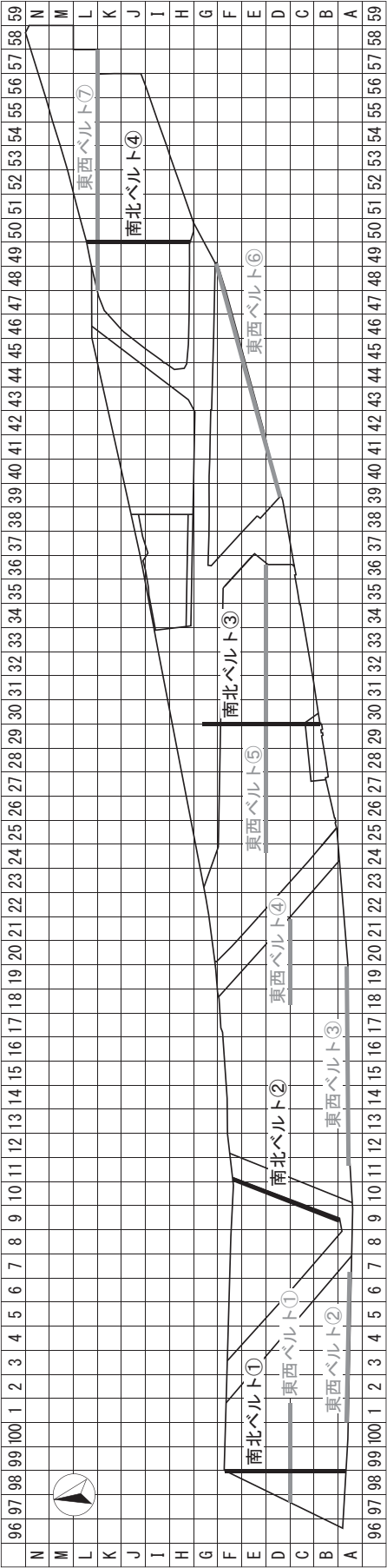
東西ベルト⑦



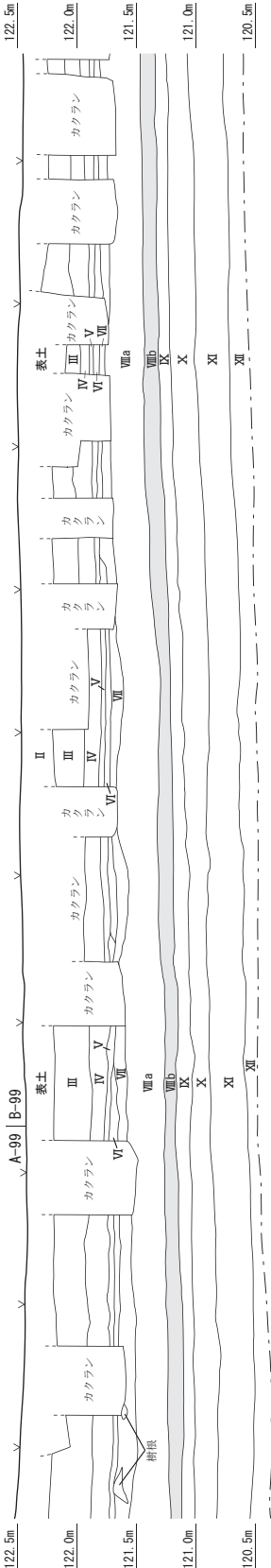
東西ベルト⑦



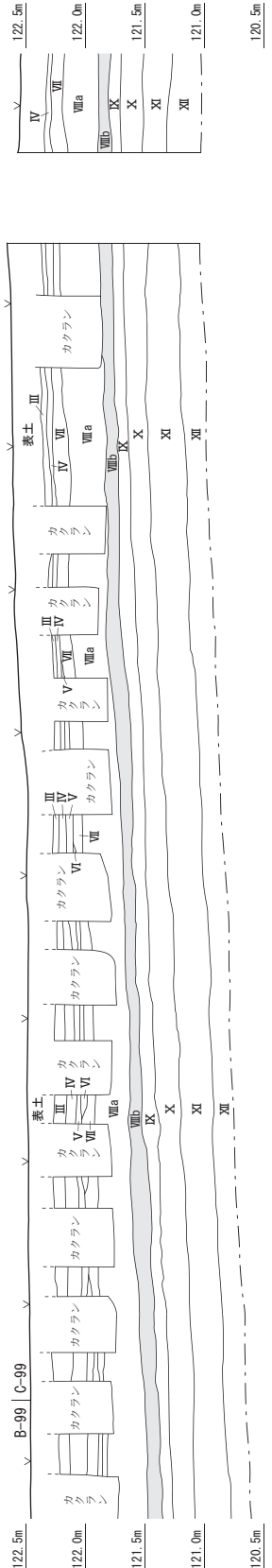
第23図 土層断面15



南北ベルト①

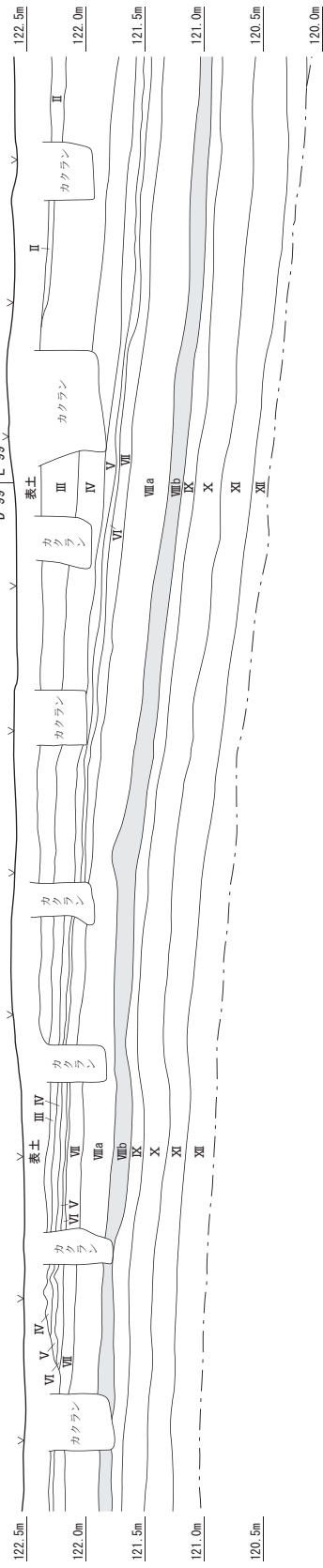


南北ベルト①

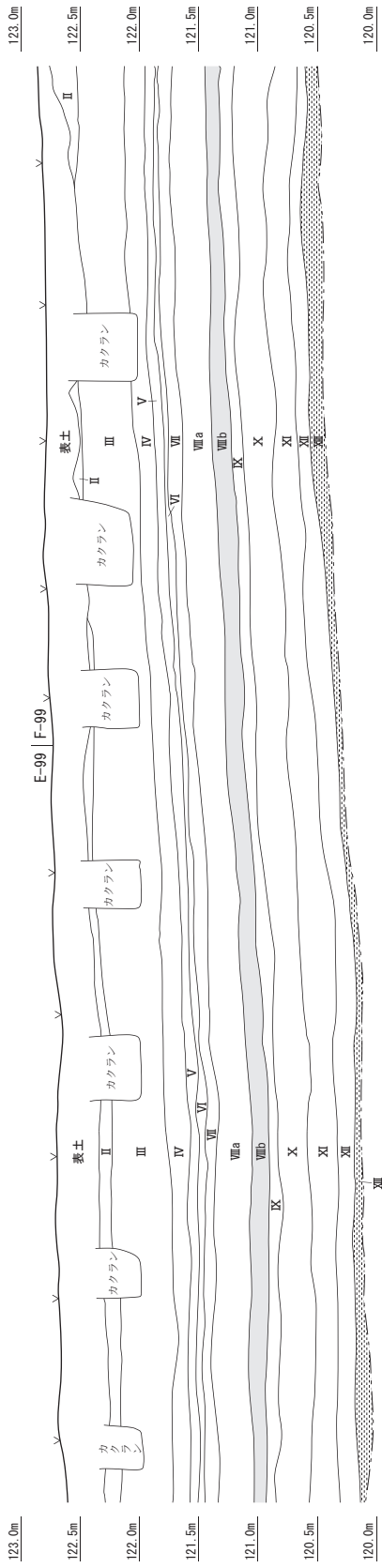


第24図 土層断面16

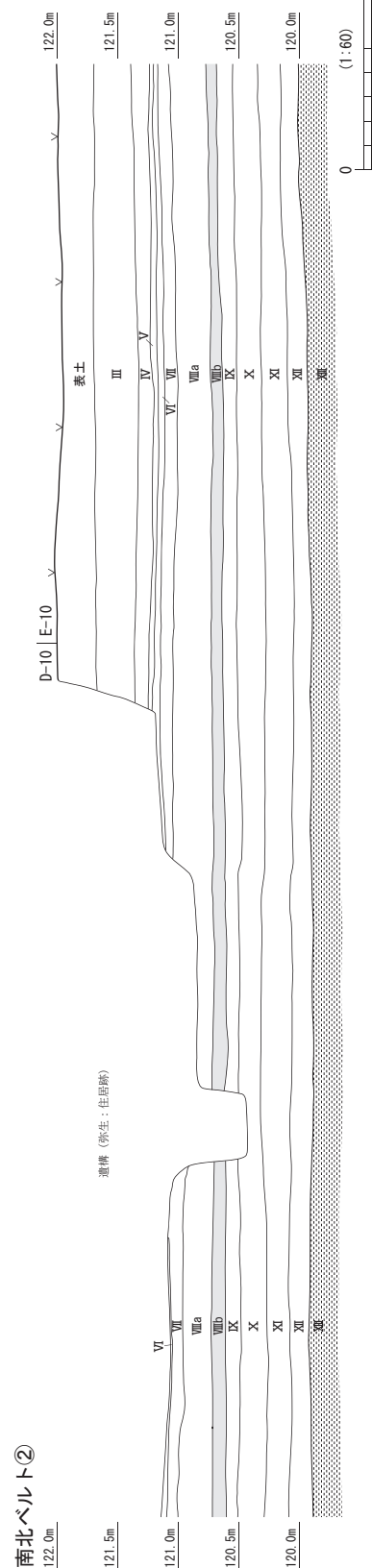
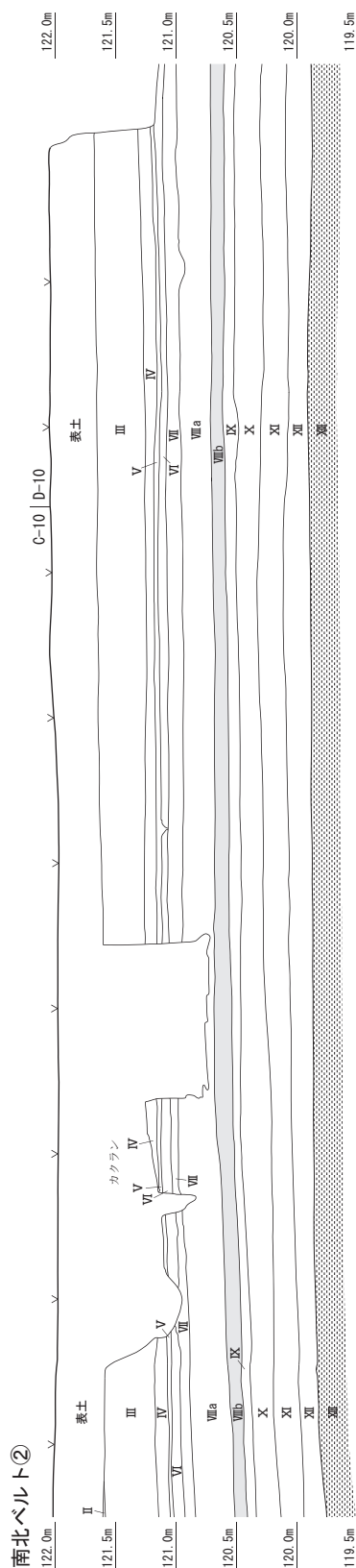
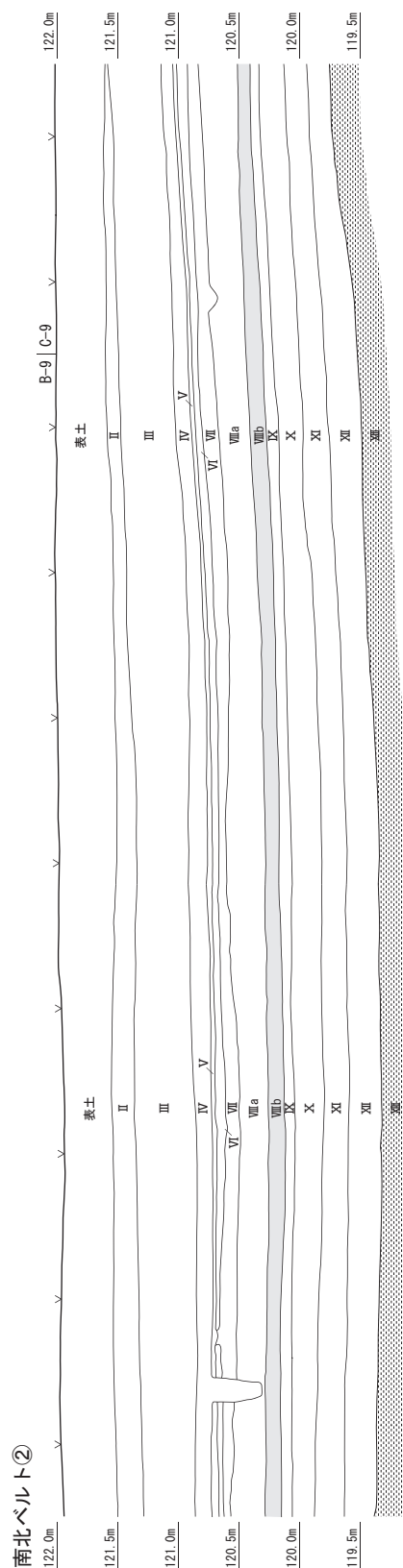
南北ベルト①



南北ベルト①

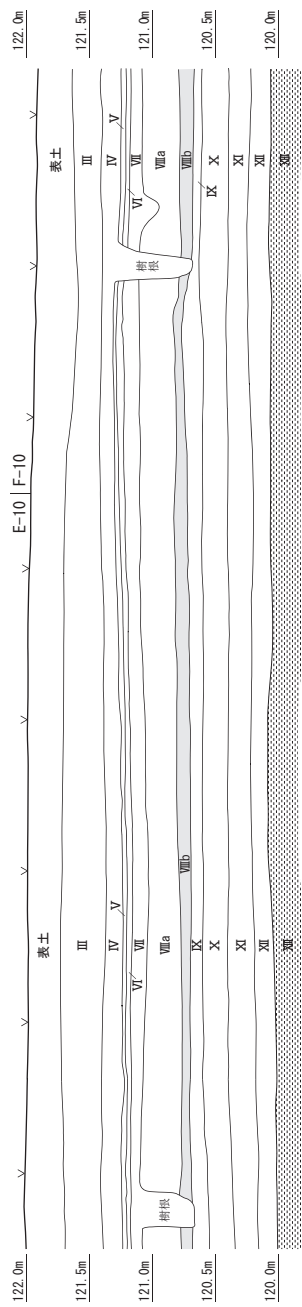


第25図 土層断面17

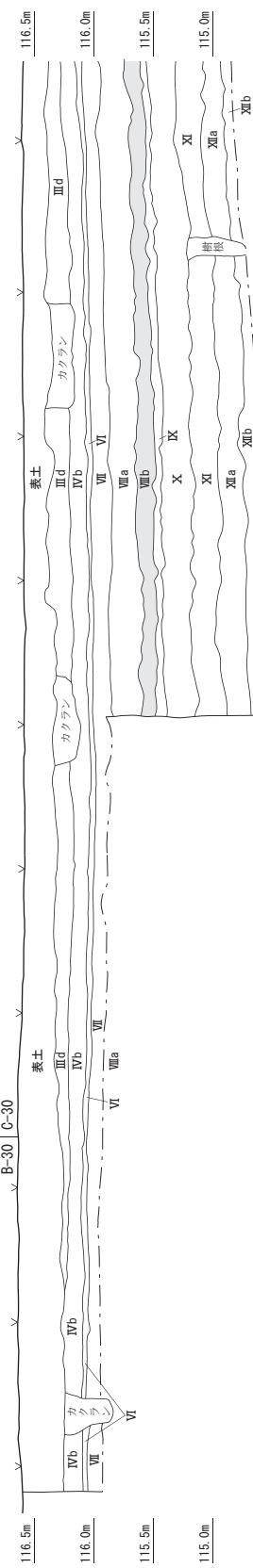


第26図 土層断面18

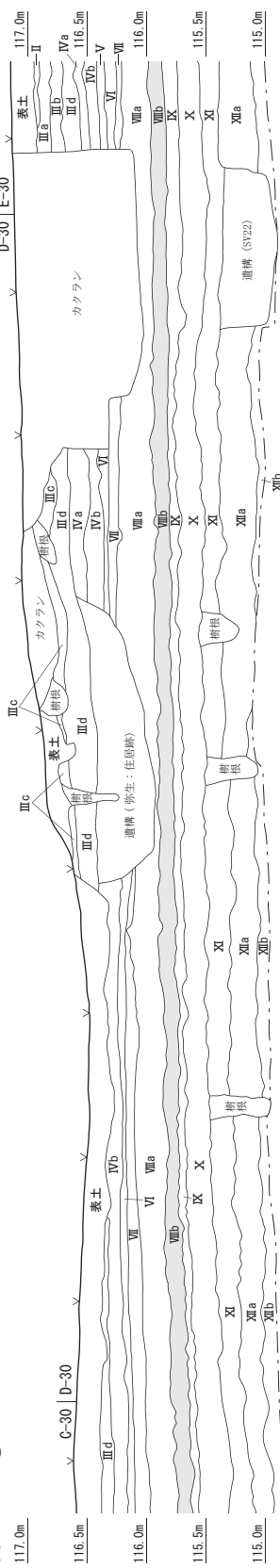
南北ベルト②



南北ベルト③

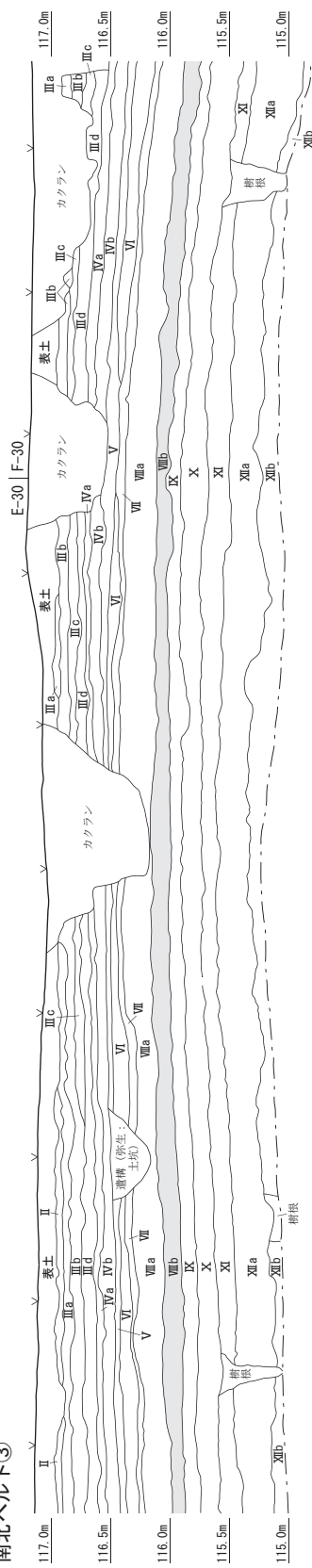


南北ベルト③

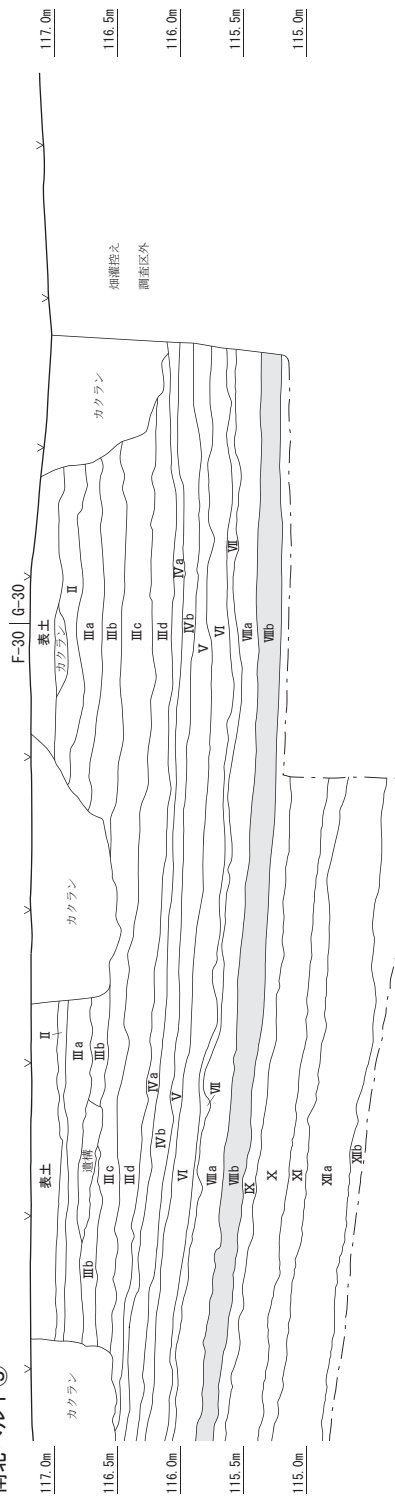


第27図 土層断面19

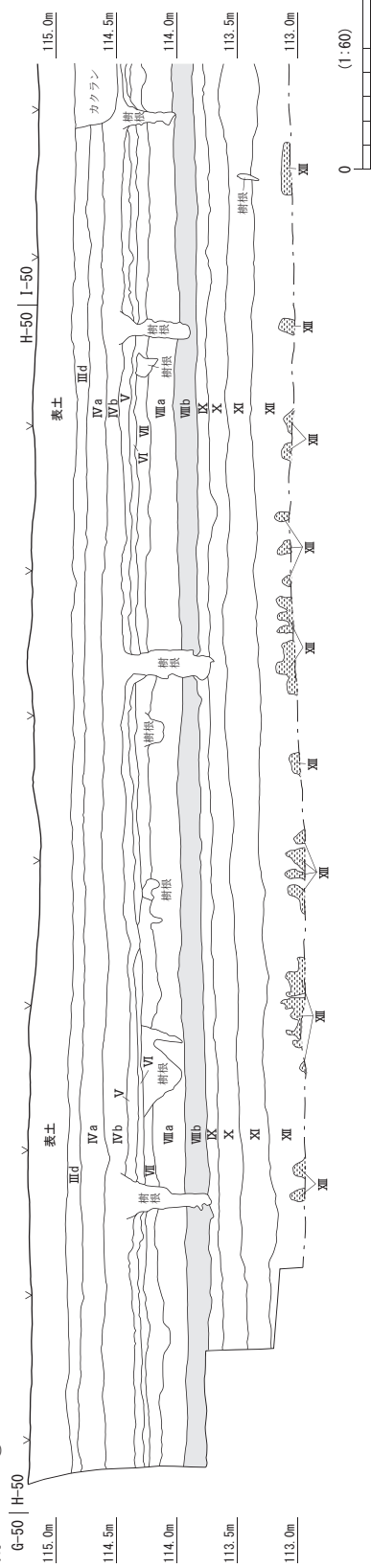
南北ベルト③



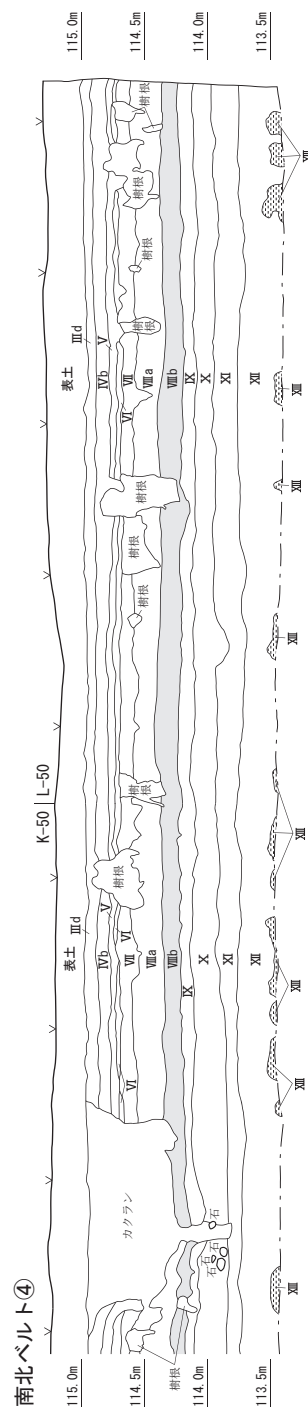
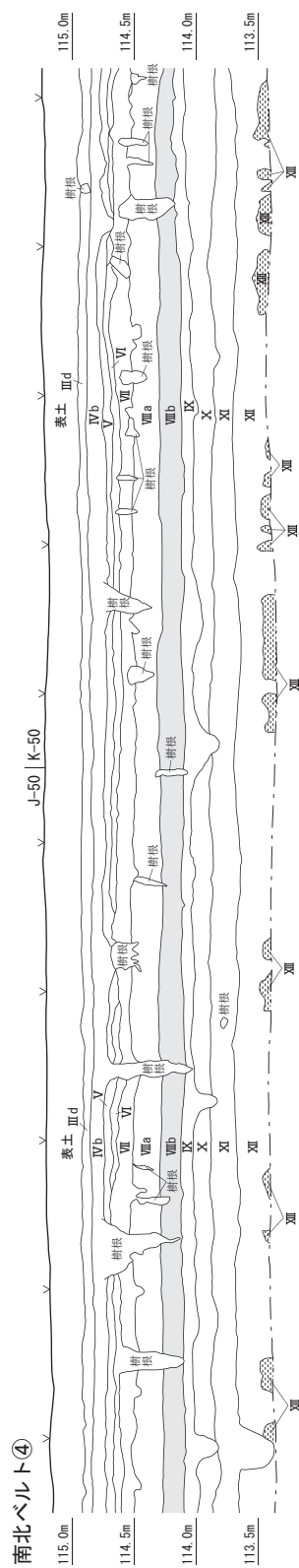
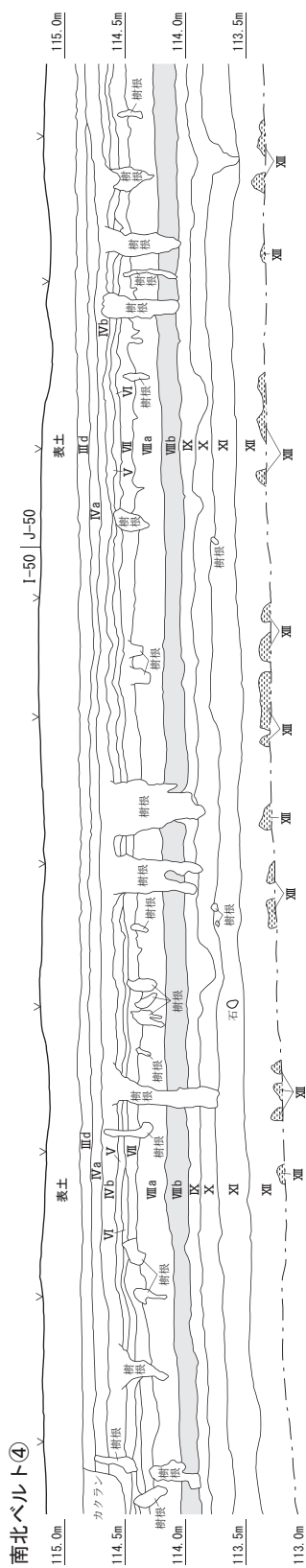
南北ベルト③



南北ベルト④



第28図 土層断面20



第29図 土層断面21



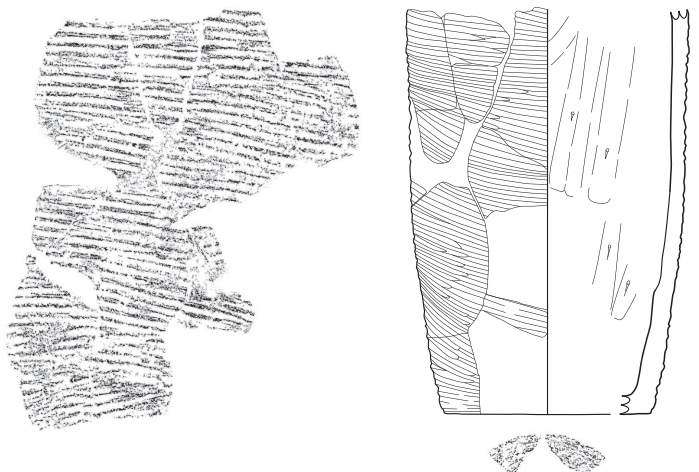
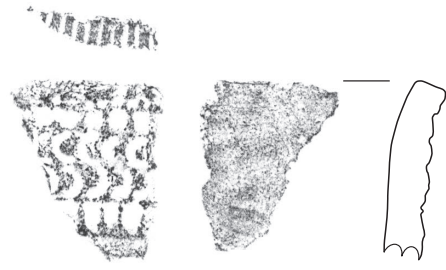
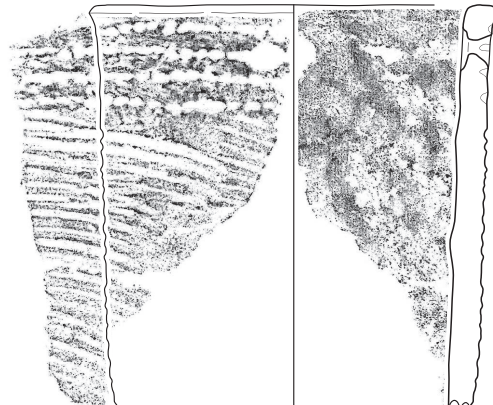
第3節 出土遺物の分類

田原迫ノ上遺跡で出土した縄文時代早期の遺物の多くは、主にⅩ層とⅪ層で出土した。本節では、抽出した土器と石器の分類について述べる。

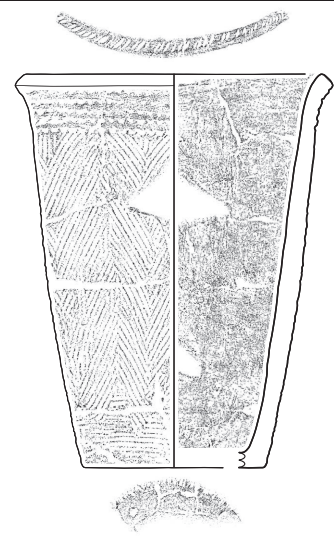
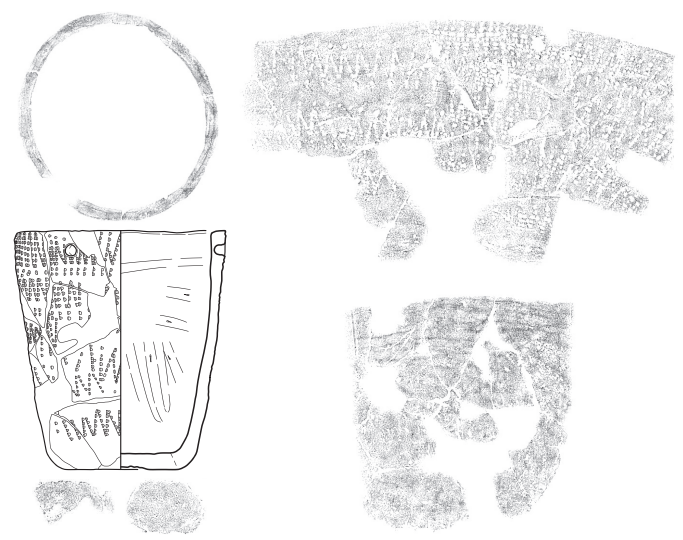
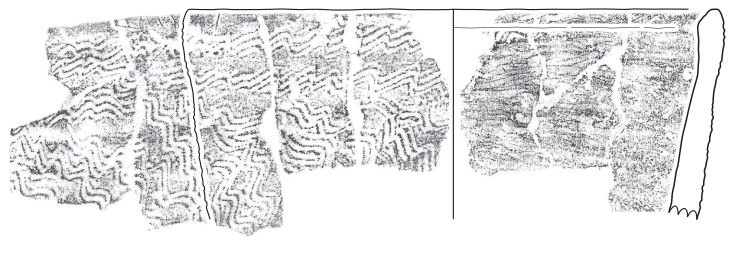
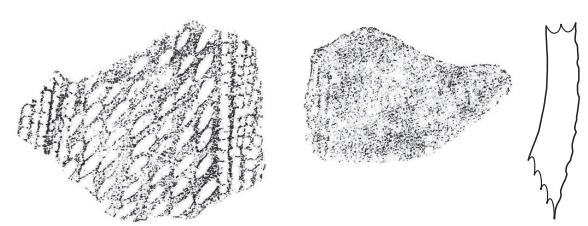
1 土器

田原迫ノ上遺跡から出土した縄文時代早期の土器を、Ⅰ類からⅩⅦ類に分類した。中でもⅣ類が多く出土して

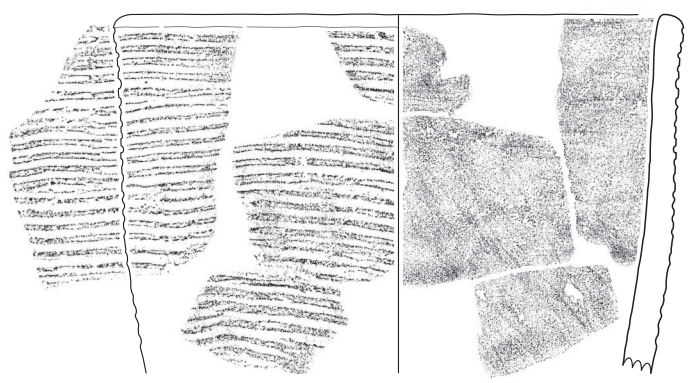
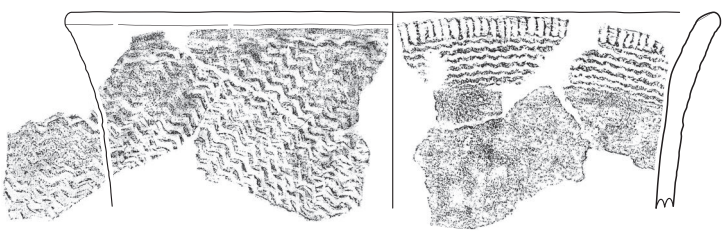


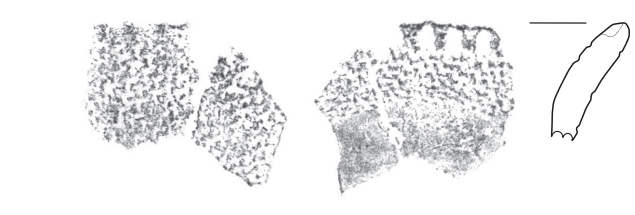
いる。各類の点数は、第2分冊第6章第2節に掲載している。出土したほとんどの土器が破片資料で、1個体として接合することができた資料は少ない。また、胎土については、同じ3人が観察を行った。各類の代表的な土器を第30～33図に模式図として示した。全ての模式図は、本遺跡で出土した土器の実測図を任意の縮尺で示したものである。

Ⅰ類	<p>器形 底部から口縁部まで直線的に立ち上がり、円筒形となる。</p> <p>文様・器面調整 胴部は貝殻条痕文、貝殻刺突文、底部はキザミを施す。</p>	
Ⅱ類	<p>器形 口縁部は外反する。口唇部に平坦面を有する。</p> <p>文様・器面調整 口唇部はキザミ、口縁部は横位の貝殻刺突文、半裁竹管文、胴部は貝殻刺突文を施す。</p>	
Ⅲ類	<p>器形 口縁部は外反し、円筒形となる。口唇部は平坦面を有する。</p> <p>文様・器面調整 口縁部は横位の貝殻刺突文、胴部は横位もしくは斜位の貝殻条痕文・押引き文を施す。</p>	

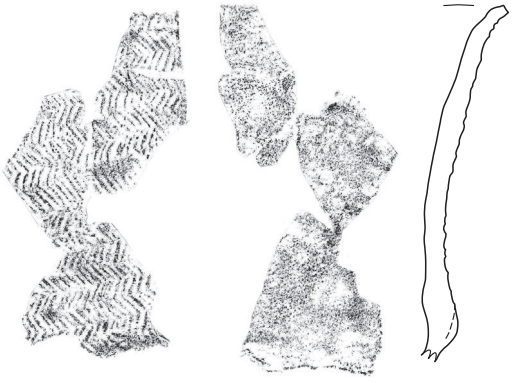
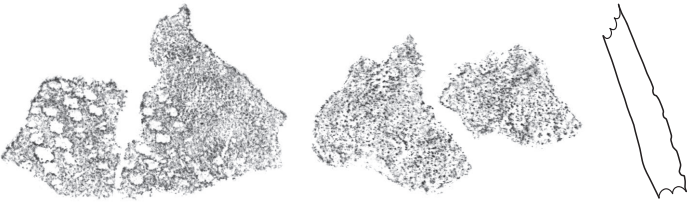

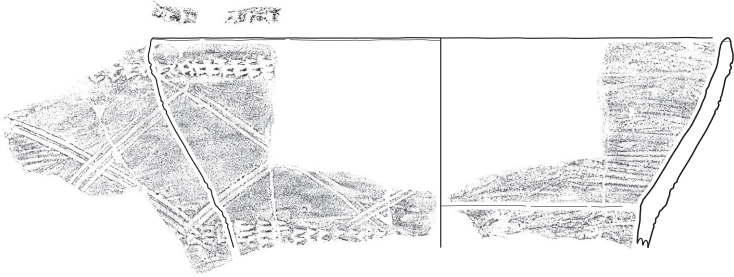
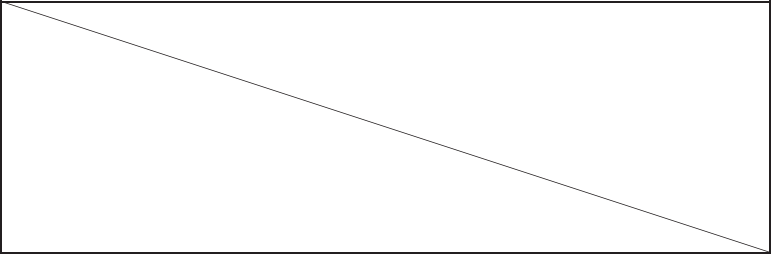
第30図 田原迫ノ上遺跡出土土器分類 1

IV 類	<p>器形 口縁部は外反・外傾・直口し、円筒形となる。口縁部に瘤状突起をもつものもある。</p> <p>文様・器面調整 口唇部にはキザミ、口縁部は横位の貝殻刺突文、胴部は綾杉状の貝殻条痕文、底部付近は横位の貝殻条痕文、底部外面端部はキザミを施す。</p>	
V 類	<p>器形 口縁部は内湾・直口し、円筒形となる。口唇部は平坦面を有する。</p> <p>文様・器面調整 外面は貝殻刺突文、貝殻条痕文を施す。口縁部と胴部の2帯に分けて施文するものと、全面を1帯で施文するものがある。内面にナデをおこなう。</p>	
VI 類	<p>器形 口縁部は内湾・直口し、バケツ形となる。</p> <p>文様・器面調整 外面は櫛状工具による羽状文、流水文を施す。内面はていねいなナデをおこなう。また、外面に押型文を施すものもある。</p>	
VII 類	<p>器形 胴部は膨らみ、口縁部は内湾する。</p> <p>文様・器面調整 外面は短沈線文を縦位、斜位、羽状に施す。</p>	

第31図 田原迫ノ上遺跡出土土器分類2

VIII 類	<p>器形 胴部は膨らみ，頸部ですぼまる。口縁部はやや外反し，円筒形となる。</p> <p>文様・器面調整 胴部に横位の貝殻条痕文を施す。</p>	
IX 類	<p>器形 口縁部は外反し，深鉢形となる。</p> <p>文様・器面調整 外面は，山形，楕円などの押型文を施す。口縁部内面に押型文，柵状文，刺突文を施すものもある。</p>	
X 類	<p>器形 口縁部は外反し，深鉢形となる。</p> <p>文様・器面調整 外面に撚糸文を施す。口縁部内面に撚糸文を施すものもある。</p>	
XI 類	<p>器形 口縁部は外反し，深鉢形となる。</p> <p>文様・器面調整 外面および口縁部内面に縄文を施す。</p>	
XII 類	<p>器形 口縁部は外反し，深鉢形となる。</p> <p>文様・器面調整 外面および口縁部内面は枝回転による施文を施す。</p>	

第32図 田原迫ノ上遺跡出土土器分類3

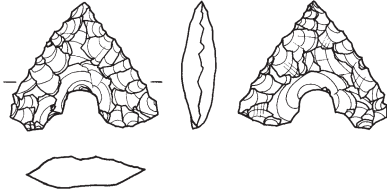
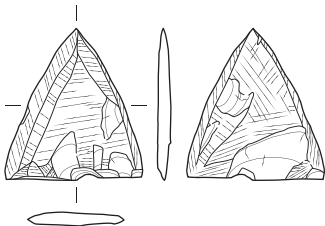
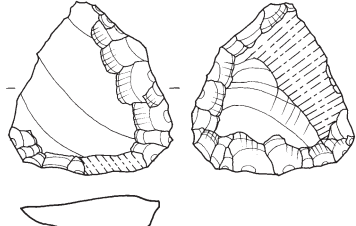
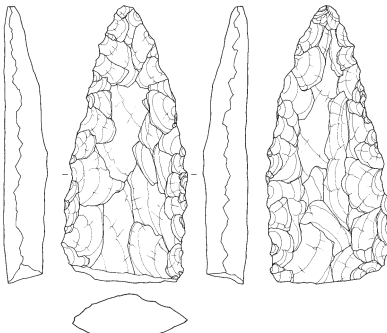
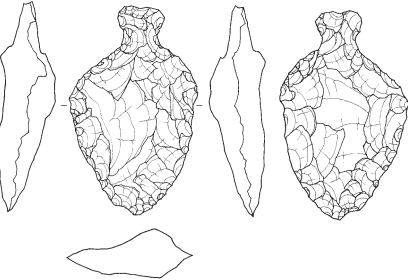
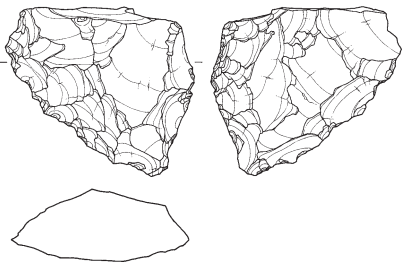
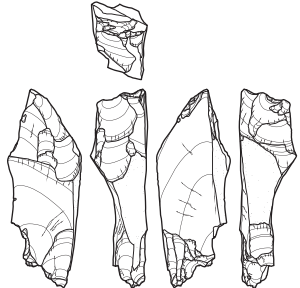
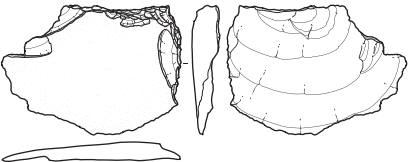
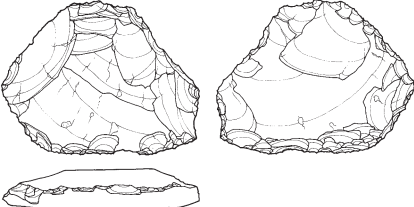
XIII 類	<p>器形 胴部は屈曲し、口縁部は大きく外反する。</p> <p>文様・器面調整 山形、楕円などの押型文とミミズばれ文等を組み合わせて施す。</p>	
XIV 類	<p>器形 胴部は膨らむ。</p> <p>文様・器面調整 胴部に縄文を施す。</p>	
XV 類	<p>器形 胴部は膨らみ、頸部ですばまる。口縁部は外反する。</p> <p>文様・器面調整 口唇部はキザミ、口縁部は刺突文、条痕文を、胴部に刻目文、連点文を組み合わせて施す。</p>	
XVI 類	<p>器形 胴部は膨らむものと直線的に開くものがある。口縁部はラッパ状に開く。</p> <p>文様・器面調整 格子状・流水状の沈線文、網目捺糸文、貝殻刺突文を組み合わせて施す。</p>	
XVII 類	<p>I～XVI類までに分類できなかった資料である。</p>	

第33図 田原迫ノ上遺跡出土土器分類4

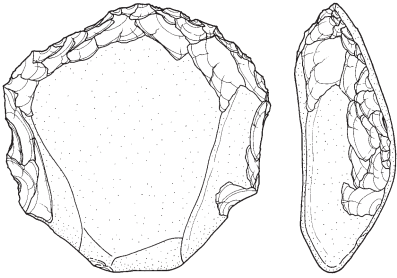
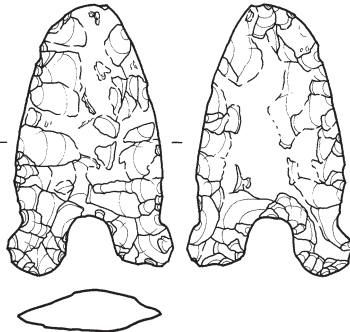
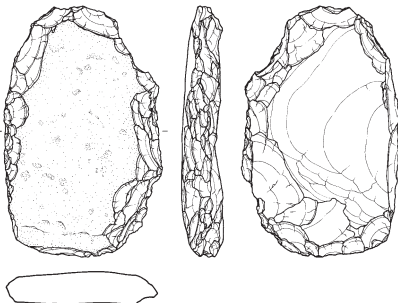
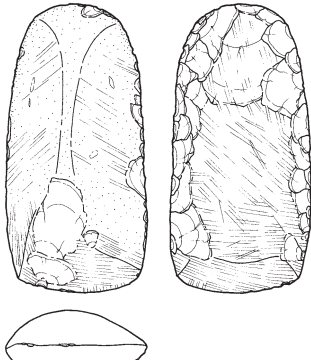
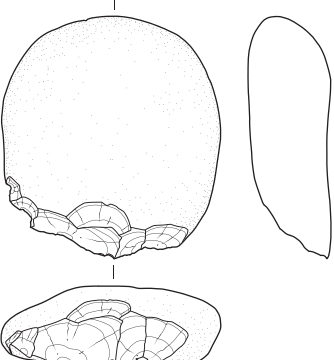
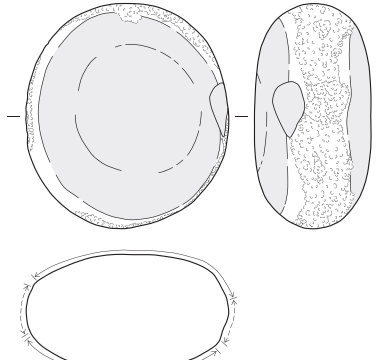
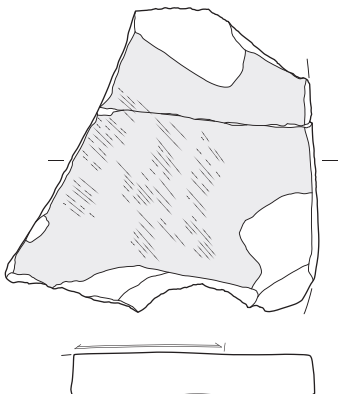
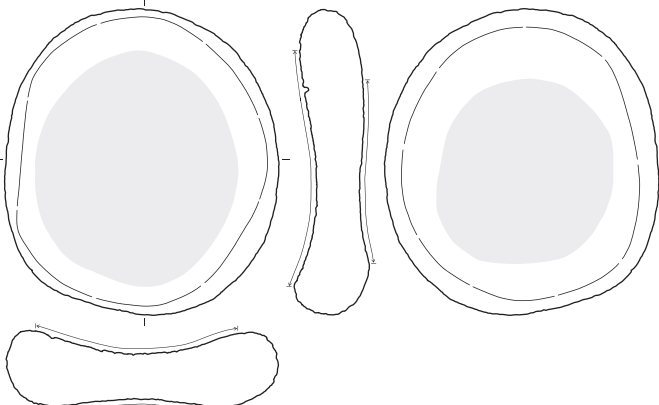
2 石器

観察表の石材分別は、剥片石器では第3表のように行った。石器の中で、器種が明らかな石器を第34・35図に模式図として示した。全ての模式図は、本遺跡で

出土した実測図である。また、第4章第1節の第349・350図に狩猟具類と加工具類に分けて分布図を示している。

打製石鏃 矢の先端に装着する狩猟具。素材剥片に押圧剥離により二次加工を施し整形しているもの。	磨製石鏃 打製石鏃とは製作技術が異なり、全て研磨により製作されたもの。	尖頭状石器 先端の尖った石器で、剥片を素材とし、押圧剥離によって形状を整える。形状は石鏃もしくは石鏃の未成品に類するが、厚みがある。
		
石槍 槍の先端に装着されたと考える狩猟具。剥片等を使用して押圧剥離で製作されたもの。	石匙 つまみ部を有することを第一の特徴とする。素材剥片に押圧剥離により整形され刃部はていねいな二次加工が施されたもの。	削器 剥片の縁辺に加工を施して刃部としたもの。
		
楔形石器 上下両端からの平行な剥離が認められ、両端は直線上の縁辺あるいは尖端の形状を呈するもの。	剥片 原石から薄く剥がしたもの。剥片から石鏃や削器などに加工される。	二次加工剥片 剥片の縁辺の一部に二次加工が認められるもの。削器と判断した以外のもの。
		

第34図 田原迫ノ上遺跡出土石器分類1

<p>石核 素材剥片を剥離したもの。</p>	<p>異形石器 何らかの形を模して作られたもの。もしくは用途不明の石器一群。</p>	<p>打製石斧 伐採具や土掘り具の一つと考えられる。全体あるいは刃部を押圧剥離により形成したもの。</p>
		
<p>磨製石斧 伐採具や土掘り具の一つと考えられる。全体あるいは刃部を研磨により形成したもの。</p>	<p>礫器 原石の一部を打ち欠いて刃部を付けたもの。</p>	<p>磨石・敲石類 植物質食料加工具の一つと考えられる。両平坦面に磨面，周縁には磨面や敲打痕等が認められるもの。</p>
		
<p>砥石 片面あるいは両平坦面に砥石として利用した痕跡が認められるもの。</p>	<p>石皿・台石類 植物性食料加工具の一つで，磨石類により堅果類の製粉作業化等に使用されたと考えられるもの。厚みのある大形礫のほか，使用により中央部が皿状に凹むものもある。</p>	
		

第35図 田原迫ノ上遺跡出土石器分類2

第3表 石器の石材分類表

石 材	分 類	特 徴
安山岩	A N	<ul style="list-style-type: none"> ・石英質の不純物を含み，基調は滑らかでガラス質に富む質感のもの。 ・不純物をわずかに含み，基質はややざらついた質感のもの。 ・色調は，黒灰色～青灰色系である。
チャート	C H	<ul style="list-style-type: none"> ・珪質分に富み，節理が発達せず，剥離面は滑らかで，油脂光沢であるもの。 ・珪質分に富み，節理がやや発達するもの。 ・珪質分にやや乏しく，節理がやや発達し，透明感や油脂光沢もほとんどないもの。 ・色調は，白色～灰色系，青灰色～緑色系，黒色系と様々である。
ホルンフェルス	H F	<ul style="list-style-type: none"> ・熱変成した泥岩～頁岩質のもので粒子が比較的細かいもの。 ・色調は，黒～暗灰色系，茶色～ベージュ系，白色系と様々である。
黒曜石	O B 1	<ul style="list-style-type: none"> ・不純物を多く含むもので，全く光を通さないもの。 ・色調は，漆黒である。
	O B 2	<ul style="list-style-type: none"> ・不純物を多く含むもので，光を通すもの。 ・色調は，黒色～アメ色である。
	O B 3	<ul style="list-style-type: none"> ・不純物を含まないか，わずかに含むもので，透明度が高いもの。 ・色調は，アメ色～黒色，オリーブ色である。
	O B 4	<ul style="list-style-type: none"> ・不純物をほとんど含まないものか，わずかに含むもので，良質でガラス光沢をもつもの。 ・色調は，黒色である。
	O B 5	<ul style="list-style-type: none"> ・不純物をほとんど含まないものか，わずかに含むもの。 ・色調は，黒灰色である。
	O B 6	<ul style="list-style-type: none"> ・不純物をほとんど含まないものか，わずかに含むもの。 ・色調は，青灰色である。
	O B 7	<ul style="list-style-type: none"> ・不純物をほとんど含まないものか，わずかに含むもの。 ・色調は，灰色～オリーブ灰色である。
	O B 8	<ul style="list-style-type: none"> ・微細な不純物を含むもの。 ・色調は，乳白色である。
頁岩	S H	<ul style="list-style-type: none"> ・珪質分に非常に富み，油脂光沢のあるもの。 ・珪質分がほとんどなく，無光沢で，節理は発達せず，緻密で良質のもの。 ・色調は，暗灰色～灰色系，黒色～暗灰色系と様々である。
その他	—	タンパク石，玉髄系，花崗岩，凝灰岩，砂岩

第4章 発掘調査の成果

第1節 縄文時代早期の調査成果

1 調査の概要

本遺跡における縄文時代早期の該当層は、Ⅷ（アカホヤ火山灰）層とⅩⅢ（薩摩火山灰）層に挟まれた、Ⅸ～Ⅻ層である。調査区全域でこれらの層を確認することができた。

Ⅶ・Ⅷa層の無遺物層を重機で除去し、Ⅷb層から人力で山鉤等を用いて徐々に掘り下げを行った。

Ⅸ～Ⅻの各層の土の色調が酷似していることから、遺構検出は困難を極めた。極力上位の層で遺構を検出しようと、慎重な調査を進めたが、本来の掘り込み面で検出できた遺構は少ないと考えられる。

遺構は、個々に検出状況の記録写真を撮影した後、各遺構の長軸にあわせてベルトを設定し、実測を行った。

出土遺物は、基本的に小破片はグリッド毎に一括して取り上げ、それ以外は、平板やトータルステーションで出土地点の記録を行った。

遺構・遺物について、各項で詳細を述べることにする。

2 遺構

発掘調査において、縄文時代早期の遺構を、Ⅸ～ⅩⅢ層で検出した。層位については、検出時に該当層の認定を行っているため、検出時の認定を生かしている。しかし、整理作業・報告書作成作業時に、発掘調査時の所見や写真、周囲の遺物出土状況なども加味し、総合的に判断し、修正したり、再認定したりした遺構もある。

調査の結果、遺構については、竪穴住居跡21軒、落とし穴9基、連穴土坑40基、土坑104基、集石遺構192基、石器製作跡5基を検出した。

これらの多くは、Ⅳ類土器やⅨ類土器などの土器の時期の遺構と考えられる。

(1) 竪穴住居跡（略記号：SH）

竪穴住居跡は、平成23年度の調査で4軒、平成24年度の調査で5軒、平成25年度の調査で6軒、平成26年度の調査で6軒の計21軒が検出された。

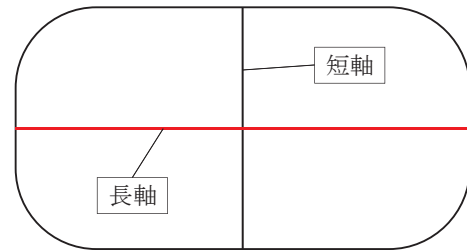
本報告書では、下記に示すように竪穴住居跡の各部分に名称を付し、規模を計測した。

長 軸：検出面で、竪穴住居跡のほぼ中心を通り、その竪穴住居跡の広がり長い方の長さ。

短 軸：長軸の真ん中を通り、長軸に対して垂直に広がる長さ。

方 位：長軸がのびている方角。

最深部深さ：長軸、もしくは短軸で、その竪穴住居跡で最も深い部分の長さ。



第36図 竪穴住居跡の各部の名称

検出状況 単独で検出された竪穴住居跡は18軒であった。そのうちSH1・SH3・SH13は、連穴土坑と切り合って（うちSH3は土坑とも切り合う）検出された。SH8・SH9・SH19は、調査区外へ広がるものであった。SH同士が切り合って検出されたものはない。また、Ⅸ層では検出されていない。

第4表 竪穴住居跡の検出層

検出層	軒 数	備 考
Ⅺ 層	3	先行トレンチより検出
Ⅻ 層	8	
ⅩⅢ 層	10	

住居跡の多くは、ⅩⅢ（薩摩火山灰）層上面で検出されている。結果、床面がⅩⅢ層で収まるものは、掘り込みが非常に浅くなっている。Ⅺ層で検出された3基は、先行トレンチで住居跡の一部を検出し、壁面の立ち上がり等から掘り込み面を上層で確認できたため、本来の掘り込みに近い状況だと思われる。

形 状 全形を把握できた17軒のうち、竪穴住居跡の形状を把握するため形状値（短軸÷長軸）について、以下のような定義を設定した。

横 長：形状値が、0.7未満で、長軸に対して左右に広がる形。

方 形：形状値が、0.7～1で方形に近いもの。

不定形方形：形状が整っていないと判断した方形。

第5表 竪穴住居跡の形状

形 状	軒 数
横 長	3 軒
方 形	11 軒
不定形方形	3 軒
不 明	4 軒

検出面の形状は、方形が11軒と最も多く、横長と不定形方形が3軒ずつとなっている。床面には、貼床と考えられる硬化面をもつものも6軒あった。しかし、竪穴住居跡に付随する柱穴（ピット）や炉跡、小土坑は検出されておらず、建物内部の具体的構造を把握することはできない。

規 模 検出層に違いがあるため一概にはいえないが、長軸と短軸、検出面積の最大値・最小値等について下表に示す。

第6表 竪穴住居跡の長軸と短軸の最大値・最小値・平均値

	長 軸 (m)	短 軸 (m)
平均値	2.76	2.22
最大値	3.83(SH11: XIII層)	3.03(SH12: XII層)
最小値	1.71(SH17: XIII層)	1.44(SH17: XIII層)

第7表 竪穴住居跡の検出面積の最大値・最小値・平均値

	面積 (㎡)
平均値	6.35
最大値	11.33㎡ (SH12: XII層)
最小値	2.46㎡ (SH17: XIII層)

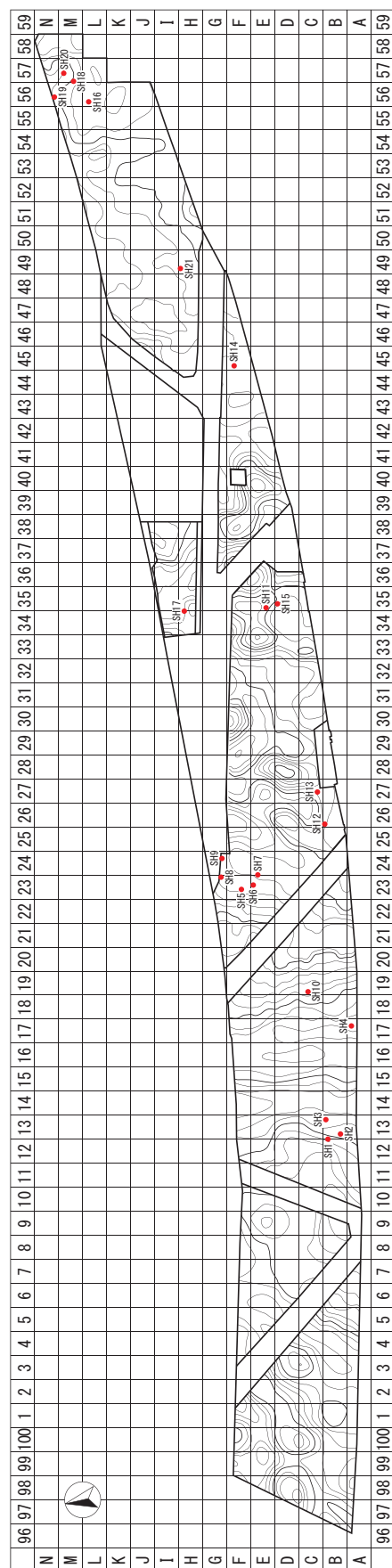
11㎡を超えるSH11とSH12は、他の住居跡よりかなり大きいことから、大型の住居跡ということになる。床面積から考えるとSH11がSH12より2㎡も広いことから本遺跡の最大の住居跡はSH11となる。

また、定塚遺跡の報告書に習い、「壁面傾斜値」を提示した。「壁面傾斜値」とは、住居跡壁面の傾斜度合いをみるための数値で、「壁面傾斜値」＝「床面積」÷「検出面積」で算出した。数値が1に近いほど、垂直度が高いということになる。ただし、検出面と床面とのレベル差が20cm未満の場合は、提示していない。

分 布 竪穴住居跡が2軒以上が近接して検出されている箇所が5箇所である。調査区Cで1箇所（B-13）、調査区Dで3箇所（E～G-23・24、B・C-26・27、D・E-35）、調査区Fで1箇所（L～N-56・57）である。他の住居跡はそれらをつなぐようにまばらに分布している。また、調査区CのB-13区より西側には検出されていない。

住居跡の床面積でみると、調査区中央より西側に床面積の平均値を下回るものがやや近接する範囲に存在する。他の遺構と重複するものも調査区中央より西側に存在する。

各竪穴住居跡 本遺跡で検出された竪穴住居跡を検出した順に報告する。



第37図 竪穴住居跡分布図

竪穴住居跡 1 号 (SH 1 : 第 39 図)

検出状況 B-12・13区, XIII層上面で検出された。

切り合い 住居北壁側で連穴土坑 1 号 (SV 1) と切り合っている。埋土の堆積状況から SH 1 が SV 1 に切られていると判断した。

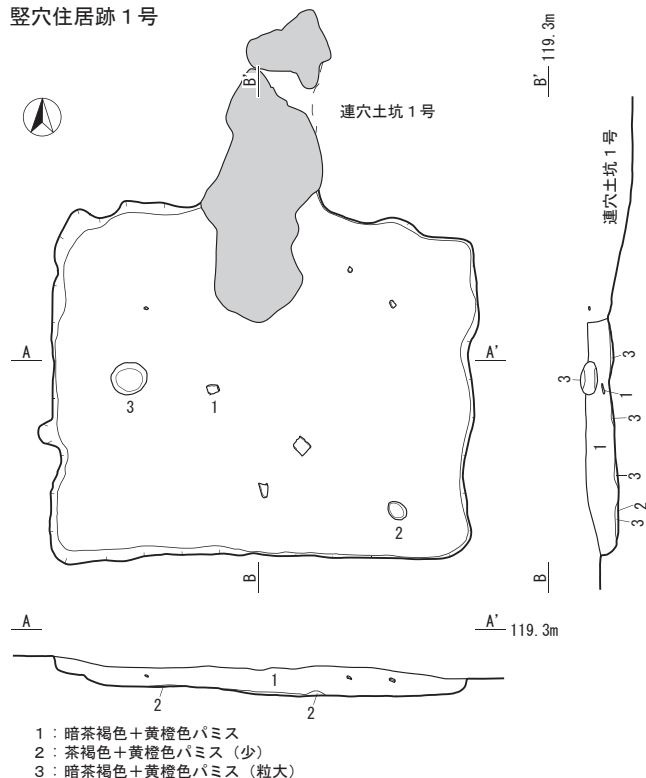
形状・規模 平面形状は方形で、長軸 2.18m、短軸 1.88m、検出面からの深さ 0.14m である。掘り方は XIII (薩摩火山灰) 層内で収まっており、床面として意識したものと思われる。

埋 土 埋土は 3 つに分かれる。埋土 1・埋土 3 は、ともに暗茶褐色の土で、黄橙色パミスを含み XI 層に類似する土である。黄橙色パミスの大きさ (埋土 1 < 埋土 3) の違いで分層した。埋土 2 は、茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。黄橙色パミスの包含量は、埋土 1 = 埋土 3 > 埋土 2 となる。

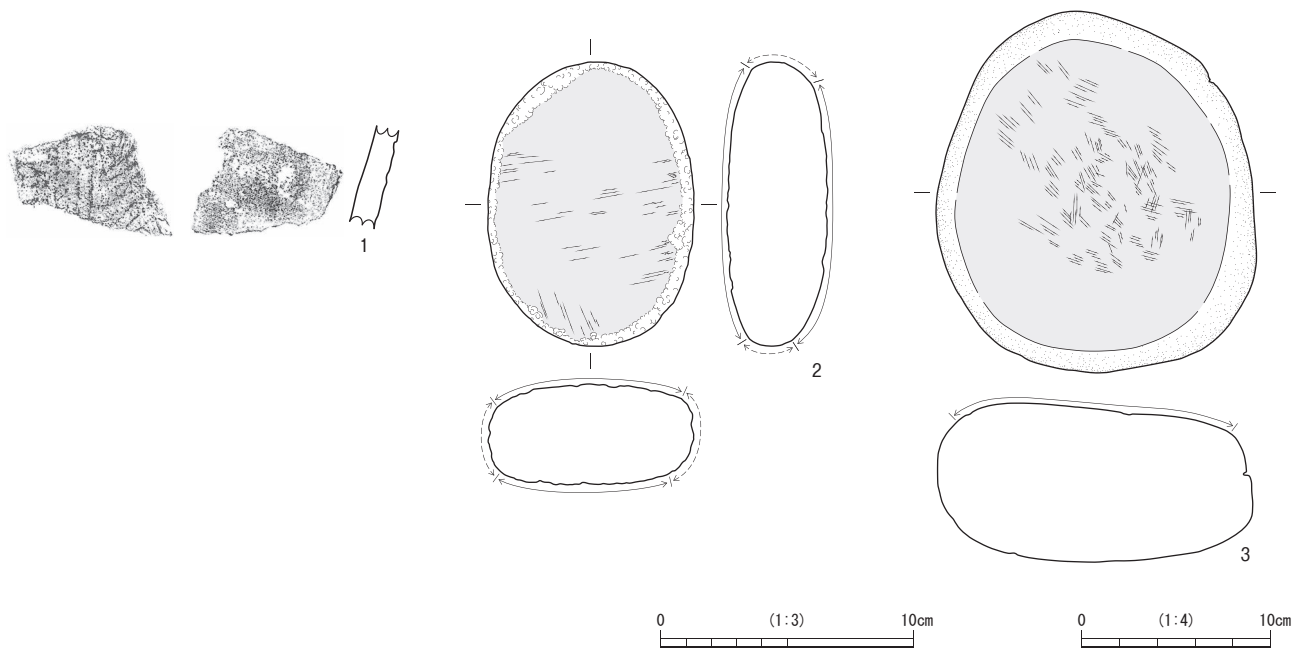
出土遺物 埋土中から出土した遺物のうち 3 点を図化した。1 (第 39 図) は、胴部である。外面は剥落しているが、綾杉状の貝殻条痕文を施す。2 (第 39 図) は安山岩製の磨石・敲石類である。扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用し、側面に敲打痕が認められる。3 は安山岩製の石皿である。扁平な礫の片面を使用面としている。被熱しており使用面にススが付着する。

土器分類 1 は、IV 類に該当する。

竪穴住居跡 1 号



0 (1:40) 2m



第 39 図 竪穴住居跡 1 号・出土遺物

竪穴住居跡2号 (SH 2 : 第40図)

検出状況 B-13区, XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状・規模 平面形状は不定形方形で、長軸1.97m、短軸1.76m、検出面からの深さ0.3mである。掘り方はXIII（薩摩火山灰）層内で収まっており、床面として意識したものと思われる。

埋 土 埋土は2つに分かれる。埋土1・埋土2は、ともに黒褐色の土で、黄橙色パミスを含む土である。色調の明るさ（埋土1<埋土2）や黄橙色パミスの含量（埋土1>埋土2）の違いで分層した。

出土遺物 埋土中から4点の遺物が出土した。土器片1点、石器1点、礫2点であった。土器片は、3条の貝殻条痕文を斜位に施す。図化はしていない。

炭化物 埋土中で採取した炭化物は、科学分析の結果から、 ^{14}C 年代測定は、8,467-8,285calBCを示した。明確な焼土は確認されなかった。

竪穴住居跡3号 (SH 3 : 第41図)

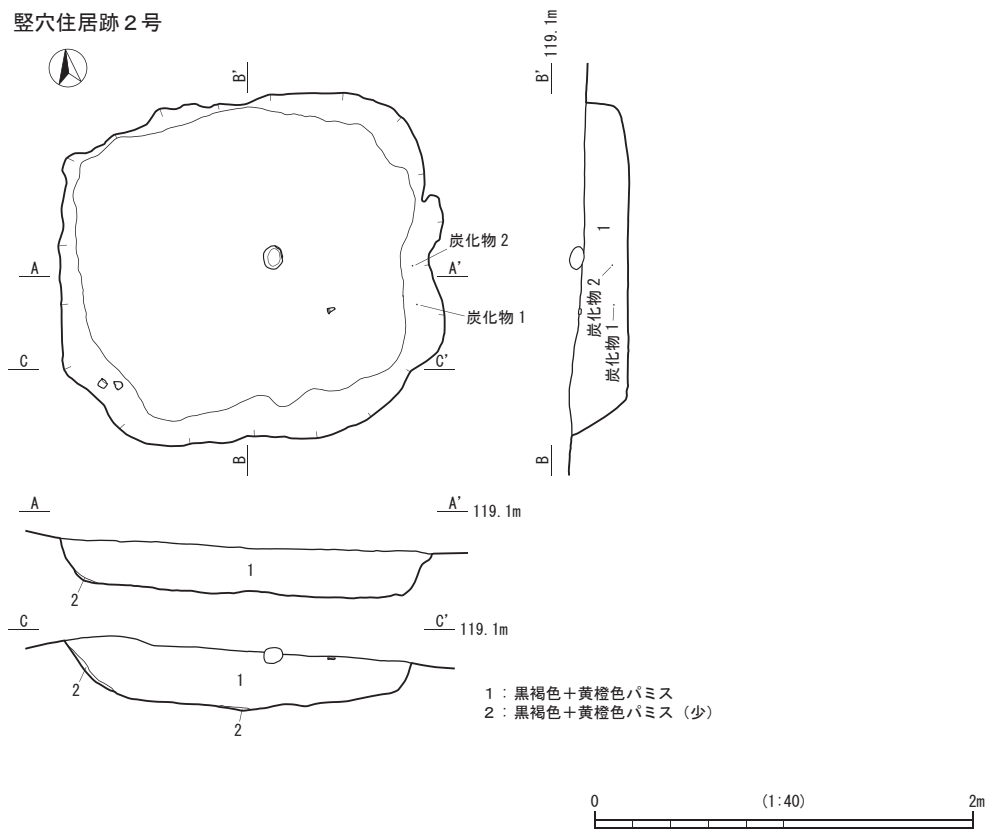
検出状況 B-13・14区, XII層上面で検出された。

切り合い 住居東壁側で連穴土坑9号 (SV 9) と、北壁側で土坑54号 (SK54) と切り合っている。埋土が、SV 9・SK54と一様であることから、SH 3 との新旧関係は不明確である。

形状・規模 平面形状は方形で、長軸2.53m、短軸2.36m、検出面からの深さ0.37mである。掘り方はXIII（薩摩火山灰）層で収まっている。中央部周辺の床面には、1.1m×1.0m程度の貼床と思われる黄橙色パミスを含んだ黒褐色の硬質土の広がりが見られる。SH 3 内からは6基のピットが検出されたが、いずれも掘り込みが10cm程度と浅く、検出位置などからも住居に伴うものではないと判断した。

埋 土 埋土は一様で、暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土で、XI層に類似する。一部にXIII（薩摩火山灰）層のブロックが混在していた。

出土遺物 埋土中から33点の遺物が出土した。土器片が21点で、石器が1点、礫が11点であった。そのうち土器片3点、石器1点を図化した。4（第41図）は、SH 3 内の2点と包含層出土遺物1点が接合した。やや外反する口縁部片である。口縁部外面に斜位刺突文を、その下位には横位刺突文を施し、横位刺突文の下位には、縦位や斜位の貝殻条痕文を施す。平坦な口唇部には、幅1～2mm程度のキザミを施す。内面には、指によるナデをおこなう。5（第41図）は、SH 3 内の2点が接合した底部である。底部外面端部にはキザミを、その上位には横位条痕文を施す。接合痕から、まず底部を形成し、その横から胴部を張り付けたことがうかがえる。底部内面には、指おさえが確認できる。6（第41図）は、胴部片で

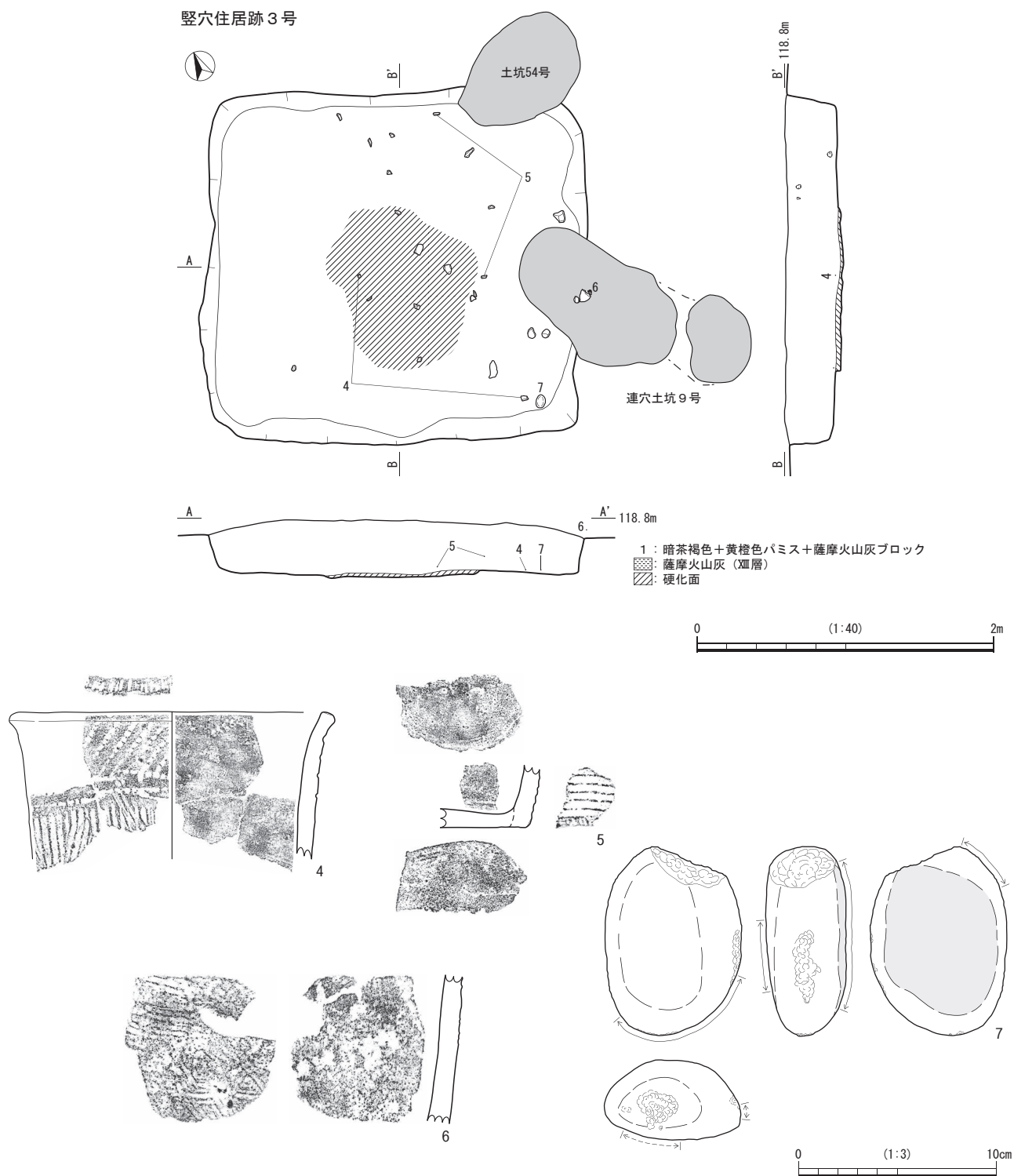


第40図 竪穴住居跡2号

ある。内外面共に剥落が激しいが、外面には、綾杉状に近い条痕文が確認できる。4～6は、胎土や器壁の厚さ、文様等から同一個体と言え難い。図化していない土器片のうち2点は、やや外反する口縁部で、口縁部外面に斜位貝殻刺突文を、口唇部にはキザミを施す。5点は胴部で、4と同一個体と思われる。斜位貝殻刺突文を施す。

残りは小破片のため、不明である。7（第41図）は安山岩製の磨石・敲石類である。扁平な円礫の片面を磨面に使用し、側面に敲打痕が認められる。上面は欠損後も敲打面として使用している。被熱しており上面から右側面にかけてススが附着する。

土器分類 4～6は、いずれもIV類に該当する。



第41図 豎穴住居跡3号・出土遺物